昭和59年3月1日号（毎月2回1日、15日発行）第27巻・第5号　通巻602号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1984
5
3.1.



国際婦人デー特集

ソビエト社会と女性

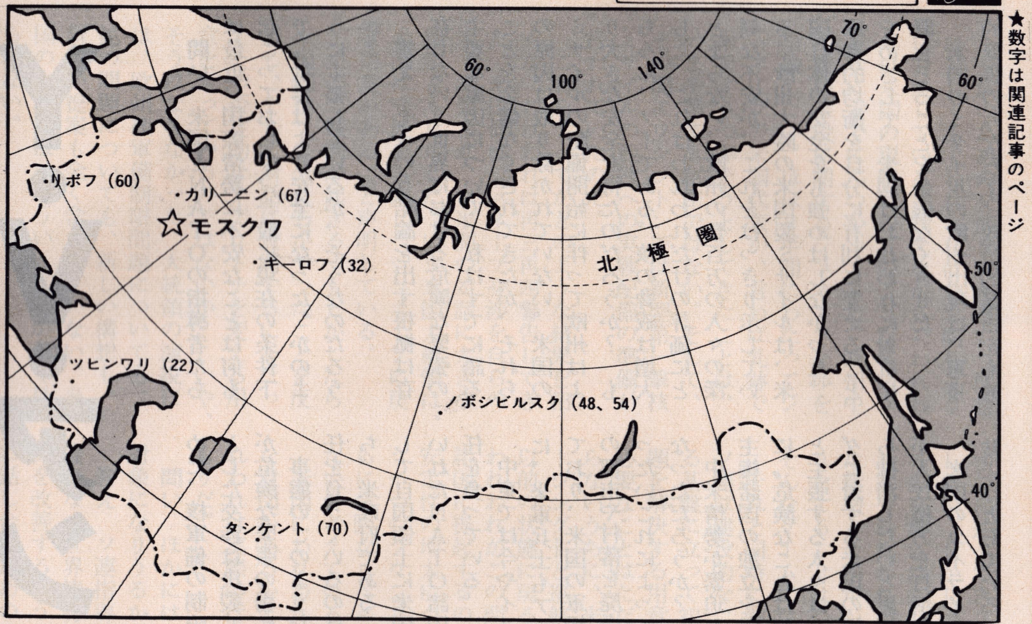
第2次世界大戦

欧州解放戦の歴史的意義

第5号　1984年3月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3—9—13
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(263)2811
〒101 東京都千代田区西神田2—7—12
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

プラウダ紙の質問に対するY・V・アンドロポフの回答

（一九八四年1月25日）

問い 米国とNATOの指導者たちは最近、国際情勢に不安なことは何も起こっておらず、一般に現在の条件下で〝世界はより安全になった〟かのように主張しているが、そうなのだろうか？

答え そういう結論を出す根拠は存在しない。世界における危険な緊張の主要な原因について、私はすでに語ることを余儀なくされてきたが、それらの原因は取り除かれていない。米国のミサイルの配備開始に伴って欧州はより大きな安全を得たのだろうか？ もちろん、ノーである。核の脅威は増大した。これはわれわれだけの評価にとどまらない。欧州の数百万の人々の深刻な不安が、これをはっきり示している。欧州大陸の米国製ミサイルは、米国自体の安全をも強めはしなかった。軍事的均衡を自分に有利に変えることをめざして、米国はわれわれに対抗措置をとることを余儀なくさせた。

米国のミサイルの欧州出現は、軍事的緊張のみならず、政治的緊張をも強めた。核軍備の制限と大幅削減を目的とした交渉は決裂した。国家間の関係が危険な緊張の場に置かれた。

事態のこのような進展に対する全責任を負っているのは、米国の指導者たち、米政府である。自国民の意思に反して自国領土に米国のミサイルを受けいれたNATO諸国の政府も、この責任を負っている。

中東では今やイスラエル侵略者と共に、米軍兵士もアラブ人に対して戦っており、米国の軍艦や空軍はレバノンの都市や村落を廃虚に変えているが、いったいこれによって世界はより安全になっただろうか？

中米情勢が緊迫し、米政府はここで主権諸国の独立を侵害している。世界に〝危険なことは何も起こっていない〟と主張する人々は、どうやら、グレナダに対する米国の侵略を人々の記憶から抹消したいと思っているのだ。米国が人民権力を打倒し、憎むべき独裁者・米国のカイライたちを武力で復帰させようとしていることは、明らかではないか。これらすべてがホワイトハウスでは〝人権を守る闘争〟と呼ばれている。これ以上の破廉恥は想像することもできない。

世界のその他の地域でも、帝国主義的強奪が行われている。これが現状である。現状は緊迫した危険なものだ。これを過小評価することは許されない。

そこで疑問が起こる。米国の指導者たちの発言は、何の目的で世界の現情勢を故意にゆがめているのか。何よりもまず、ワシントンの軍国主義的政策に対して日ごとに高まる諸国民の憂慮を吹き払い、この政策に対して強まっている抵抗の波をおさえようとしているのだ。

人々がいたるところで平和に対する危険を一層よく認識していること、この危険がどこから来ているかを理解していることは、疑いもなく、非常に重要な事実である。平和を守る数百万の人々の闘争——これもまた今日の客観的現実である。

問い 最近、米大統領はソ米対話に賛意を表明した。彼の演説では〝力と対話は手をたずさえて進む〟という表現が使われた。これをどう思われるか？

答え 対話が有益であり、目的にかなったものであることを、いまさらわれわれに説得する必要はない。これはわれわれの政策である。しかし対話はR・レーガンが提案しているような力の立場ではなく、対等の立場で行われるべきであり、対話のための対話であってはならない。それは具体的な合意の成立をめざすものでなければならない。対話は誠実に行うべきであって、それを場当たり的な目的に利用しようとしてはならない。

米国指導部は、すべてのことから明らかなように、力の立場から、脅しと圧力の立場からわれわれと交渉しようとする意図を捨てていない。このようなアプローチをわれわれは断固拒否する。総じて、われわれに対し〝力の外交〟を行おうとする試みは、見込みのないものである。

交渉のための交渉を行うという構想に対しても、われわれは全く同じように対処している。残念ながら、われわれは米国の現政権のこのようなアプローチにすでにぶつかってきた。欧州中距離核手段に関するジュネーブ交渉を指摘したい。ほぼ2年間にわたってジュネーブで米国代表が、言わば乳鉢で水をすりつぶそうとしてきたことは、いまや誰にも秘密ではない。そして、その間にワシントンでは新型第一撃核ミサイルの西欧への実戦配備の準備が行われていたのだ。

これらすべてがどのような結果を招くか、われわれは再三再四警告してきた。米国側はジュネーブ交渉を自らの手で決裂させ、ソ米間の対話に大きな損害をもたらした。いま米国大統領は、米国は交渉を再開し、ジュネーブに戻る用意がある、と声明している。

そこで疑問が起きる。もしかしたら米国側は、自分たちがやったことを反省し、そして対話に賛同するにあたってその否定的なアプローチを変える用意をもっているのではないか？ いや、そうはならなかった。大統領の演説には、欧州核軍備制限問題についても、他の問題についても、新しい構想も、新しい提案も全く含まれていない。米国の立場には、そういう気配が全く見られない。

われわれが平等と同等安全の原則にもとづく核軍備の制限と削減に関する実際的な合意の達成を目的とした交渉の実施のためあらゆる現実的なチャンスを利用する用意があることを、私はすでに述べてきたし、ここで再度強調したい。しかし、われわれは交渉のための交渉には応じないし、西欧にわれわれやわれわれの同盟諸国を目標にした新型ミサイルが存在しないようなふりをすることはやらない。われわれは、そんなゲームには参加しない。

それと同時に確認しておきたいが、ソ連は建設的な、相互に受けいれられる基盤に立って初めて、欧州核軍備問題を解決する用意がある。そのために必要なことはただ一つ——手後れにならないうちに、米国とNATOは、パーシングⅡと巡航ミサイルの配備開始以前の状態に戻る用意を表明すべきだ。われわれがこの問題を米国とその同盟諸国に提起するのは、欧州の緊張と不安定性の増大につながる軍拡競争のもう一つのラウンド、今回は新しい、さらに危険なレベルのラウンドを回避したいと考えているからだ。

米国にわれわれと対話を行う真面目な意図があるかどうかについては、われわれは実際の行動で判断していくつもりだ。

問い ほかにはどんな問題が対話の対象になりうるか？

答え ソ連指導部は、その解決が間違いなく世界情勢を健全化し、ソ米関係を改善するような一連の問題を真剣に話し合うための可能性があると確信している。平和と国際安全の強化をめざす具体的提案やイニシアチブの数々がわれわれによって打ちだされている。

これらの提案は依然として有効だ。

たとえば、ソ連が行ったように、米国が核兵器を先に使用しないという義務を引き受けるなら、それは国際気候や、ソ米関係の雰囲気に大きく影響するだろう。それは実際にどういうことかと言えば、二大核保有国が相手に対する核兵器行使を拒否することだ。ということは、第一撃も、それに続く核攻撃もなくなる。

NATO諸国が相互に軍事力を行使しないことにしようとのワルシャワ条約諸国の提案に同意すれば、これもまた、欧州、さらには全世界での信頼度を大幅に高めることになろう。実際には、それは、相対立する軍事グループが発生する係争問題の解決のための武力行使を拒否することを意味するだろう。交渉のための広い道が開けるだろう。ついでながら、この点で、開幕したばかりのストックホルム会議も少なからず成果を挙げることができるだろう。会議の第一段階では、ほかでもない信頼と安全の強化措置の作成がとりあげられているのだ。

宇宙での軍拡競争を防止する問題の解決を棚上げにしてはならない。棚上げにすれば、人類は、今日では想像することすら困難なほどの規模の新たな脅威に直面することになる。米国で開発されている新型兵器システムは、そうした見通しを全く現実的なものにしている。ソ連は、宇宙からと宇宙での武力行使の脅威をなくすことについての具体的提案を打ち出し、この問題をめぐって即時交渉を開始するよう米国に呼びかけている。

西側に用意があるなら、ウィーンでの中欧兵力軍備削減交渉で審議されている諸問題の実際的な解決に着手することができる。われわれは、この点に関する独自の具体的提案をとっくに交渉のテーブルに提出している。それは——もちろん協定達成への双方の熱意があればのことだが——協定の早急な成立への道を開いている。

戦争の危険性の減少をめざす一連の措置の中で、われわれは手始めとして、核軍備を凍結するという簡単であると同時に十分効果的な措置を米国に提案している。核軍備の大幅な制限と抜本的な削減に関する協定のできる限り早期の達成をめざす努力を積極化しなければならない。諸国民には、これらの問題で米国政府が良識と現実主義を発揮することを期待する権利がある。

これらすべての問題で合意を達成するためには、何よりもまず米国その他のNATO諸国の側からの願望と政治的意思が必要だ。そしてそのことは、他の問題にも取り組み、一つ一つ片づけていくのに好適な状況をつくりだすはずだ。われわれはここに平和維持政策の成功の保証を見いだしている。

力へのあて込みでも美辞麗句でもなく、そうした道での前進だけが、われわれが住む世界を本当にもっと安全なものにすることができる。われわれは、ほかならぬそうした選択をする用意と実際の行動を米国に期待している。それはわれわれの側にそれ相応の反応を見いだすだろう。

（プラウダ、一九八四年1月25日号）

第2次世界大戦

欧州解放戦の歴史的意義

――A・ジリン軍事史研究所長に聞く



ソビエト軍将兵を迎えたベオグラード市民（1944年10月）

40年前の一九四四年春、ファシストのくびきにつながれて呻吟していた欧州が、永年期待に胸をふくらませて待ち望んでいた出来事が、ついに起こった。ソビエト軍は、ソ連国内のヒトラー侵略軍を粉砕したのち、ソ連の南部国境を越えて隣のルーマニアに進出した。それ以後1年余りにわたってソビエト軍の解放作戦が展開され、ドイツ・ファシズムが欧州に築いた血なまぐさい“新秩序”は、全世界の見守るうちに崩壊した。

有名な軍事史家、軍事史研究所長パーベル・ジリン・ソ連科学アカデミー準会員は、ソビエト軍の欧州解放作戦の性格、目的、規模、欧州諸国民のその後の運命にとっての解放作戦の意義についてパーベル・シャリコフ本誌記者の質問に次のように語った。

――ソビエト軍の解放的使命の政治的、軍事的目的とはどんなものだったのか？　欧州諸国解放戦の性格についての見解を聞きたい。

大祖国戦争（ソ独戦）が始まって数日後はやくも共産党とソ連政府は、自国を防衛し侵略者を駆逐するだけでなく、ファシスト略奪者からの欧州の他の諸国民の解放を援助し、彼らの独立国家の復活に手を貸すことをも、ソビエトの任務に挙げた。

もちろんソビエト軍は欧州諸国へ進撃するに当たって、ドイツ軍国主義を完全に殲滅し、ドイツ本土でその軍国主義を粉砕し、さらにソ連国民を含む欧州諸国民をドイツの侵略の脅威から永久に救い出すという目的をかかげた。

一九四四年春にソビエト軍は勝利の進撃を拡大し、ソ連・ルーマニア国境に近付いた。ルーマニアはファシスト・ドイツの同盟国として対ソ戦に参加し



ワルシャワ攻撃戦（一九四五年1月）

ソ連軍を迎え、解放の喜びに湧くブカレストの市民（一九四四年8月、ルーマニア）

ていた。一九四四年3月27日未明ソビエト軍はルーマニア領に入った。

一九四四年4月22日ソ連政府は声明を発表し、ルーマニアへの進撃の目的について次のように述べた。「ソ連政府は、ドイツ軍とその同盟軍であるルーマニア軍の跡を追って赤軍の攻撃部隊が、ルーマニア領に入ったことを、ここに知らせるものである。赤軍最高総司令部はソビエトの攻撃部隊に対し、敵を壊滅し、降伏させるまで敵を追撃するよう命じた。

それと同時にソ連政府は、ルーマニア領のどこか一部を取得するとか、ルーマニアの現在の社会体制を変えるとかの目的を追求しないことを声明する……」

一九四四年4月12日に、米英両国とあらかじめ合意したソ連側の停戦条件がカイロ駐在のルーマニア代表に手渡された。チャーチル英国首相は一九四四年5月24日に英国議会で演説し、「ロシアがルーマニア側に提示した条件には、ルーマニアの社会体制を変える考えは入っておらず、多くの点でとても寛容なものであった」と述べた。

ソ連領外での攻撃作戦でソビエト軍が完全または部分的に解放した欧州諸国は11カ国、人口一億一三〇〇万人にのぼった。11カ国の中にはルーマニア、ポーランド、ブルガリア、ユーゴスラビア、チェコスロバキア、ハンガリー、フィンランド、ノルウェー、オーストリア、デンマークのほか、ソビエト兵の手から自由を獲得したドイツ国民も含まれる。われわれはこの中にアルバニアを入れなかった。それはわが軍がアルバニアに行かなかったからだが、それでもやはりバルカン半島でのドイツ・ファシスト軍に対するソビエト軍の勝利は、アルバニア国民を解放する条件をつくった。

ドイツ・ファシスト軍は一つの町、一つの村たりとも戦火を交えずに明け渡すことはなかった。たとえばポーランドの解放には三五〇万人余りのソビエト軍将兵が参加し、戦闘は10カ月以上に及んだ。わが軍はポーランドで敵の一七〇個師団を粉砕し、そのうち一〇〇個師を殲滅した。ハンガリーの解放戦には約一〇〇万のソビエト将兵が参加し、敵の57個師団を粉砕した。ハンガリーでの戦闘は8カ月余りかかった。チェコスロバキア国民を解放するために一八〇万人のソビエト軍将兵が戦い、敵の一二二個師を破った。解放作戦中に一〇〇万人以上のソビエト将兵が戦死し、ソビエト軍が進撃した多くの町や村にソビエト人の名を刻んだ軍人のオベリスクが建立された。ポーランドの解放戦だけで六〇万人のソビエト将兵が戦死した。

ソビエト兵のヒロイズムと献身を語ると同時に、決して忘れてならないのは、ポーランド、チェコスロバキア、ユーゴスラビア、ルーマニア、フランス人の部隊がファシズムの完滅に果たした役割である。欧州の解放に尽くした彼らの貢献は非常に大きいが、これは別個に取り上げるテーマである。

——ソビエト兵は欧州の人々の前に社会主義国の人間として現れ、欧州の人々はソビエト兵にこれまでの軍隊に見られない初めてのものを見たわけだが、ソ連軍将兵のどのような資質が欧州諸国民にとって新発見だったのか？

ソビエト兵のヒューマニズム、道徳の堅固さ、自覚性を、欧州の人々はまず第一に指摘した。わが将兵は真のヒューマニスト、非武装住民の擁護者として欧州諸国にやってきた。一九四五年5月の日々にベルリンの街頭の軍のキッチン車の前に並んだ子供、婦人、老人の列を思い出すがよい。わが将兵はベルリンの平和的住民に最後のパンの一かけらまで分け与えた。



年寄りなら戦時中の暮らしのつらかったことをよく覚えているだろう。何もかも不足していたにもかかわらず、ソ連は一九四四年後半に解放されたポーランドの諸都市の住民に二万五〇〇〇tの小麦粉を放出し、ユーゴスラビアの住民に五万三〇〇〇tの食料を提供した。その当時ソ連は新ポーランド政府に一〇〇〇万ルーブルの無利子の借款を供与した。これらの借款や食料は、何百という都市が廃虚となり、切符制が施行されていた国に、不要なものであったろうか？

ソ連でのドイツ・ファシスト兵の行状を振り返ってみると、彼らはわが国民の民族的聖地をさんざん荒らし、ヤースナヤ・ポリャーナのレフ・トルストイの屋敷やミハイロフスコエ村のプーシキンの邸宅、クリンのチャイコフスキーの家、レニングラード郊外の宮殿や公園……に火をかけ、破壊した。一方ソビエト兵はドイツのドレスデン美術館の絵画、ポーランドのクラクフの建築物、チェコスロバキアのプラハの宮殿その他の欧州文明の粋を傷めないように全力を尽くした。

ベルリンのトレプトウ公園にソビエト兵＝解放者の壮大な碑が建っているが、この像はファシズムから世界を救ったソビエト軍人の姿を正確に表現していると思う。その像は救った赤ちゃんを手に毅然たる姿で立っている。

——ソビエト軍は他国の領土や他国の富源を奪取するために欧州に進撃し、銃剣で一連の国々に社会主義革命を持ち込んだかのように言う人が、西側にいるが、これについてどう思うか？

これは歴史的真実をわざと歪めている。革命は外部から持ち込むことはできない。革命はあれこれの国の国内の社会的発展の結果であり、その社会の内部で成熟するものである。第2次世界大戦中ソビエト軍はオーストリアや他の多くの国にいたが、これらの国の体制は変わらなかった。

第2次世界大戦後社会主義革命が勝利した東欧諸国について言えば、真相は次のとおりである。これらの国でソビエト軍はファシズムと戦ったが、その内政や社会の社会体制には干渉しなかった。しかしナチズムとナチズムを支持してきたこれらの国の反動政権の壊滅は、反革命勢力を著しく弱め、逆に革命的プロレタリアートとその共産



山地を進む苦労は大きかった。

▼戦死したソビエト将兵の葬儀（ベオグラードで）



主義的前衛の勢力を倍加した。社会主義革命が勝利するのに好都合な条件がつくられ、これらの条件が東欧諸国の国民の手で生かされたのである。

――わが軍が他の国々の領内に進出するに当たって、ソビエト政府はそれらの国の政府の同意を得たか？

必ずそうした。たとえばポーランド解放のさい、ソビエト軍は一九四四年5月8日にソ連政府とポーランド民族解放委員会が調印した「ソ連軍のポーランド領進出後のソビエト総司令官とポーランド行政機関の関係に関する協定」に基づいて行動した。同じような条約は一九四四年5月8日にソ連とチェコスロバキアとの間で締結された。ソビエト軍は一九四四年5月16日付けの協定に基づいて、ノルウェー領に入った。軍事行動をユーゴスラビア領に移すさいは、ユーゴスラビア人民解放軍最高総司令部の同意をとった。だから他の国々でのソビエト軍の行動の〝不法〟うんぬんという西側の一部の歴史家の言い分には何の根拠もない。ソビエト軍はいつ、いかなるときも他国の国家主権を犯そうとしたことはなかった。

いま、欧州解放作戦でのソビエト軍



ルーマニアの北トランシルバニアを進撃するソビエト軍歩兵

の行動は〝不法〟だったと主張して、欧州を解放したソビエト軍の偉大な功績を軽んじようと努めている連中に、私はあの勝利に湧いた時の光景――解放者の軍隊を迎え、歓喜しているブルガリア人、ルーマニア人、チェコ人、スロバキア人、ポーランド人、オーストリア人、ハンガリー人、ユーゴスラビア人、ノルウェー人の群衆――を収めた映画や写真を見せたい。

またソビエト軍がファシズムから解放した国々の政治家、社会活動家たちの権威ある発言も、ぜひ先の連中に聞かせたい。たとえばノルウェーのホーコン7世は「ノルウェー国民は赤軍のヒロイズム、勇敢さ、ドイツ軍に与えた強打を熱心に見守ってきた……東部戦線で赤軍は戦争に勝った。この勝利の結果、赤軍は北方のノルウェー領土を解放することができた……ノルウェー国民は赤軍を解放者として迎えた」と語った。

もう一つ当時のオーストリア首相K・レンナーは「オーストリア、とくにウィーンの住民は、ソ連とソビエト軍が苦しい時に全面的な援助をしてくれたことに心から感謝している」と語った。

オーストリア首相が語った援助とはどんな援助だったのだろうか？ソビエト軍はウィーン地区のドナウ川の西北橋と南橋を復旧し、ドナウ川のオーストリア区間の魚雷を除去し、一二八隻の沈没船を引き揚げ、一七一九kmの鉄道、45の鉄道橋梁を復旧し、約一万両の鉄道車両やウィーンの水道を修理した。ソ連の食料フォンドからウィーンの住民一人当たり1日300gのパン、50gのひきわり、30gの食肉、10gの脂肪、20gの砂糖が配給された。

ソビエト軍はファシスト・ドイツと組んでソ連と戦ったオーストリアへ、解放者としてやっていったのであり、報復しようとか、ソ連が受けた損害を償おうという意図などはなかった。このことをもう一度繰り返しておきたい。

最後に、ソビエト将兵があらゆる困難を乗り越えて欧州作戦を立派にやり遂げ、国際主義的責務を完遂したことを強調しておきたい。ソビエト軍が40年前にやったことは、決して忘れられないだろう。

ソ連は二〇〇〇万人の尊い犠牲を払って、ファシズムに勝利した。新しい恐ろしい戦争が起こらないように、ソ連は全力を尽くすつもりである。

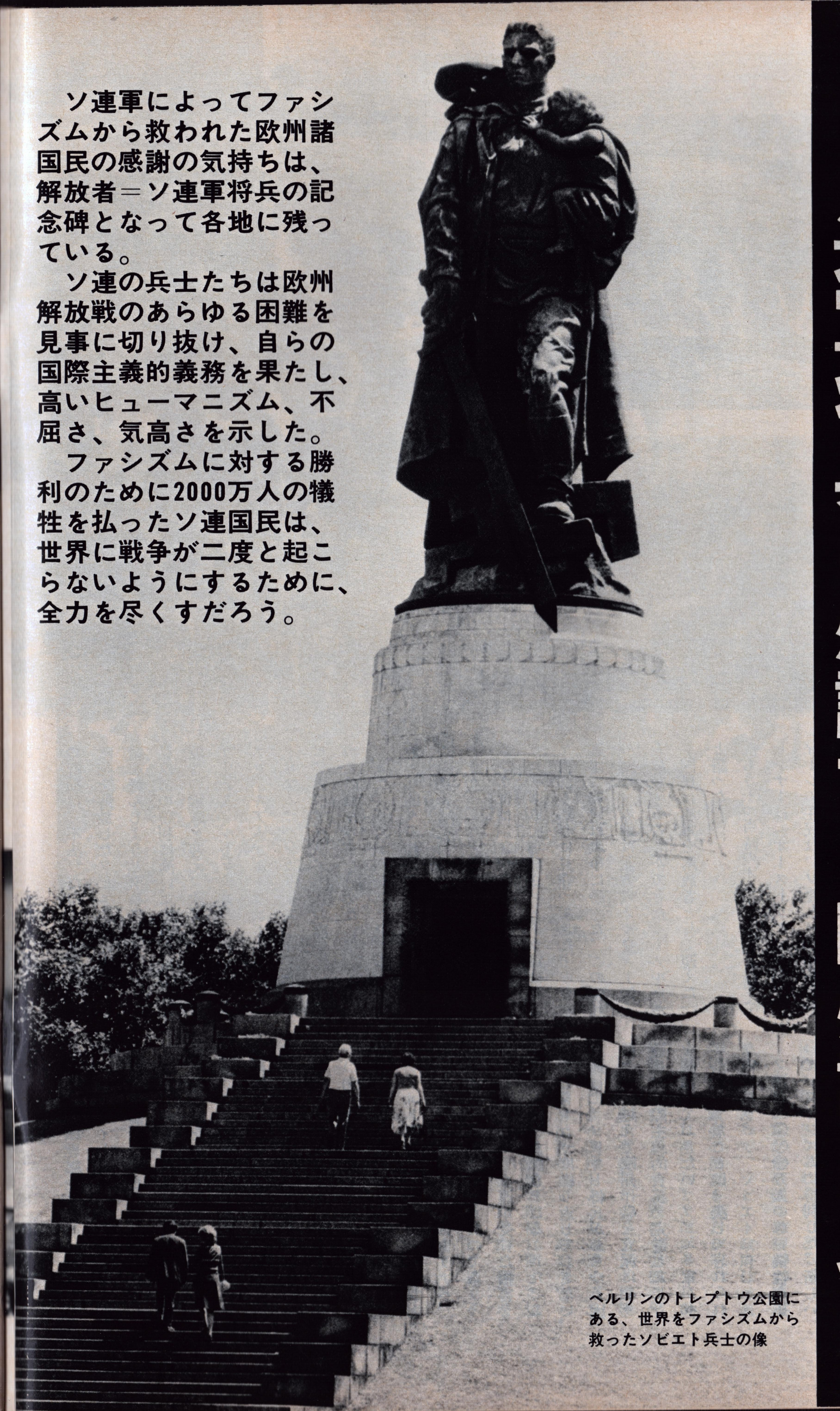
ファシズムからの解放者

ソ連軍将兵に感謝する欧州諸国民

ソ連軍によってファシズムから救われた欧州諸国民の感謝の気持ちは、解放者＝ソ連軍将兵の記念碑となって各地に残っている。

ソ連の兵士たちは欧州解放戦のあらゆる困難を見事に切り抜け、自らの国際主義的義務を果たし、高いヒューマニズム、不屈さ、気高さを示した。

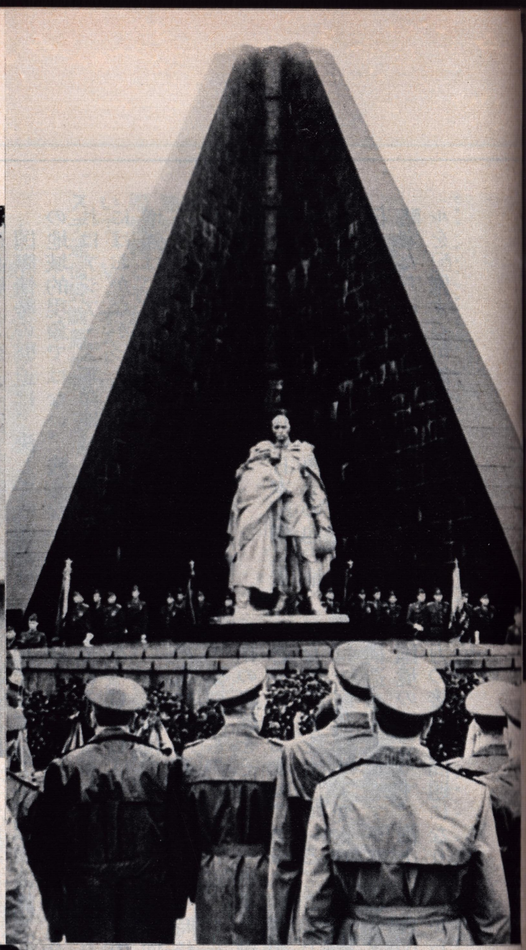
ファシズムに対する勝利のために2000万人の犠牲を払ったソ連国民は、世界に戦争が二度と起こらないようにするために、全力を尽くすだろう。



ベルリンのトレプトウ公園にある、世界をファシズムから救ったソビエト兵士の像

ブルガリアのシリストラ市にある戦死したソ連軍将兵の記念碑。シリストラは1944年９月、ソ連軍に解放されたブルガリア最初の都市の一つ。





▶ドゥクラ峠(ポーランド＝チェコスロバキア国境)のソ連軍将兵記念碑。1944年10月、ソ連軍はこの交通困難な山岳地帯でドイツ・ファシスト精鋭軍を破り、チェコスロバキア解放に着手した。



ノルウェー解放のために戦死したソ連軍将兵の記念碑



ハンガリーの首都ブダペストの自由広場にある解放者＝ソ連軍将兵の記念碑



ポーランドのコシャーリン市にあるポーランド国民の自由と独立のために戦死したソ連軍将兵の記念碑

ソ連の視点

欧州軍縮会議と極東の信頼醸成措置

ソ連科学アカデミー米国・カナダ研究所教授　V・ルキン

グロムイコ・ソ連外相は1月18日、ストックホルムで開かれた欧州軍縮会議で「緊要な問題の一つは、諸国間の信頼を固めること、政治面でも軍事面でも信頼を固めることである」と述べた。

諸国民の安全の確実な保障は、軍拡競争を抑制し、引き続いて軍縮を行うことを通じてのみ可能であり、信頼強化措置はこの長い困難な道の第一歩にすぎない。しかしこの一歩は、国際情勢が極度に緊迫し、信頼の明らかな欠如が見られる現状のもとでは、特に緊急に必要とされる一歩である。

国際情勢の緊迫は、決して欧州だけの地域的現象ではない。残念ながらそれはアジア・太平洋地域にも波及せずにはおかなかった。この地域での軍備増強は、最近とみにテンポを速めている。ワシントンは、日本をも含めた西太平洋に基地を置く第七艦隊の兵力を3割以上増やした。

米国は核搭載機F16の日本配備に着手しているが、これはソ連その他の地域諸国にとっての直接の脅威である。伝えられるところによると、米国の戦略家たちは日本と南朝鮮に巡航ミサイルを配備する可能性を検討している。

これらの措置はアジア諸国民の安全の度合いを高めるのだろうか？　とてもそうとは考えられない。

米政府は、三沢基地のF16にも、日本に持ち込むことが計画されている巡航ミサイルにも、核手段は装備されないことになっていると、日本の世論に信じ込ませようとしている。しかし極東地域で米国の核兵器が盛んに増強されている背景の上で、この種の声明をどこまで信用することができるだろうか？

ソ連はすでに長年にわたって、すべての関係諸国、まず第一に米ソ中日の参加するアジア・太平洋地域での信頼醸成措置に関する会議を開くよう提案している。アジアでの最近数カ月の不安な、しばしばドラスチックな出来事は、信頼強化の問題についての地域協議の構想を、過去のいかなる時にもまして緊要のものとしている。もちろん、欧州の経験をそっくりそのまま繰り返す必要はあるまい。アジアの情勢は顕著な特殊性をもっている。ここでの情勢は一層流動的で変化しやすく、地理的構造も複雑だ。アジアの場合、陸上の国境のみならず、海上での各国の海軍力の接触も問題になりうるからだ。

恐らく日本は、他の多くの地域諸国以上に、アジア・太平洋地域諸国間の信頼強化に客観的に関心をもっているはずだ。というのも、通常兵器を使用するものであれ、核兵器を使用するものであれ、いったん武力衝突が発生したならば、国土面積が小さく、人口の都市集中率が異常に高く、エネルギーや原料の輸入依存率が高いこの国は、特に脆弱な立場に置かれるからだ。日本は自国と東南アジア、中近東、南北アメリカ諸国を結ぶシーレーンの安全に特別の関心をもっている。米軍の戦略家は日本人に対して、日本はその海軍力を増強し、手始めとしてその行動範囲を沿岸から一〇〇〇カイリまで拡大することによって、米海軍と協力して太平洋のシーレーンの安全を確保することができると説得している。これは危険な幻想だ。現代の軍事技術の水準のもとでは、衝突が起こった場合、どんな護衛手段を講じてもそのような安全を保証することはできないだろう。確実な保証を与えることができるのは、衝突そのものを防止する措置のみである。そして、政治面でも軍事面でも信頼を強化する措置に関する地域交渉は、このような措置を作成するための最初の措置となりうるだろう。

いま欧州でもアジアでも、国際情勢は決して良好とはいえない。これらの地域の緊張は危険な限界に近づいている。だが欧州では一九七五年のヘルシンキ全欧会議で創設された協議のメカニズムが活動し続け、4カ月余り前に成功のうちに終わったマドリード再検討会議に引き続いてストックホルムで欧州軍縮会議が開かれたのに対して、アジア・太平洋地域の状況は全く別である。ここでは今にいたるまで信頼強化、軍拡抑制のための地域的な話し合いのメカニズムがつくられていない。このため地域の情勢は特に危険なものになっている。

グロムイコ外相がストックホルム会議で指摘したように、「深刻に複雑化した国際的条件の中でも、社会体制の異なる国々は、もしそれを望むならば、相互に受けいれ可能な基盤の上で合意することができる」。ソ連は「国家間の関係における信頼の雰囲気を支持する。紛争の調整のために、相互に有益な交流と接触の発展のために、信頼の雰囲気が必要である」。

核破局から人類を救うために

——ブロヒン・ソ連医学アカデミー総裁に聞く

ニコライ・ブロヒン・ソ連医学アカデミー総裁は、ソ連最高会議の民族会議外務委員としても活躍している。国際情勢とそれに対するソ連の対応について、V・オストロフスキー・ノーボスチ通信評論員が聞いた。

——昨年末のソ連最高会議で採択された「国際情勢とソビエト国家の対外政策について」の決定は、あなたの見解ではどういう意義をもつものか？

何よりもまずそれは、ソビエト国家の最高立法機関の決定であり、その中には、ソ連は、洋の東西を問わずどの国であろうと他国の安全を侵害しない、と厳粛にうたわれている。このことは、西側の多くのマスコミ機関が連日〝ソ連の軍事的脅威〟をめぐる騒々しい宣伝を展開している中にあっては重要なことだ。わが国の最高立法機関は、理性が人類を核破局から守ることができるし、守らなければならないという強い確信を表明した。われわれソ連最高会議代議員は、世界のすべての国の議会と国民に、この現代の焦眉の問題の解決に重みのある貢献をするよう呼びかけた。私もまた、現在の国際情勢の現実を感じとる現実感覚を、西側のすべての人々が失っているわけでは決してない、と信じている。政治家の理性は、科学者の理性と同様、世界中で高まっている核戦争の危険に反応しなければならない。政治家はこの危険を感じとらなければならない。

ソ連国民はすべての国と平和に暮らすことを願っており、われわれの平和愛好的な対外政策は、社会・政治体制の異なる国々との平和共存の原則の上に築かれている。平和のためには、ワルシャワ条約加盟諸国とNATO諸国間の武力不行使・平和関係維持条約の締結提案や、すべての核保有国がソ連の例にならい、核兵器を先に使用しないよう約束するという提案、宇宙空間での軍拡競争停止提案などの実現が不可欠だ、とわれわれは考えている。

——そうしたことに、医学者としてあなたがつけ加えられることは？

われわれの医学アカデミーの手で、核戦争が今始まればどんなことになるかを明らかにするための一連の研究が行われた。同様の研究は外国の科学者も行っている。グローバルな核戦争は、25億人の生命をただちに奪うことができる。

想像してほしい。人口100万の都市の上空でのたった1個の核弾頭の爆発が、36万—37万人を即座に殺すことができ、同じ数だけの人々がその後に死んで行くのだ。その原因はさまざまだ。何よりもまず人々は、複合的な傷を受ける。熱性、物理性、放射性の傷である。それらは被爆者の間の死者の比率を何倍も高めるばかりでなく、さまざまな感染に対する人体の抵抗力を大幅に低下させ、感染症の数は無数に増加する。

核攻撃を受けた所にはきれいな水も、医薬品も、十分な数の医師も、交通手段も、そしてさらには病院もなくなり、被爆者は最小限の医療がないために死ぬことになることを、念頭に置く必要がある。

医学者は、どのような核兵器の行使であろうと、その恐ろしさと、それを決して許してはならないということを以前から理解していた。すでに3年続けて医師たちは国際会議を開き、核戦争反対と核兵器の即時禁止の意思を表明している。一九八一年には米国に11カ国の医学者がつどい、その翌年にはイギリスに34カ国の医師が、昨年はオランダに44カ国の代表が集まった。このように、医学者の積極性が高まり、また人類に対する医学者の使命についての理解が高まっている。

地上の生命を守る——これは医学者の職業的な課題であるばかりでなく、核戦争が何をもたらす恐れがあるかという知識をもっている人間としての、われわれの義務にほかならない。

この危険をソ連国民とソ連最高会議ははっきりと認識している。だからこそわれわれは、現状を考慮し、国際情勢をよりよい方向に変えるために必要な措置を今後も実施していくことを、ソ連政府に委任したのである。この目的のためにわれわれは、ストックホルム会議でもそうした路線をとるようソ連政府に依頼した。

少数民族の舞踊フェスティバル

シベリアの諸民族が住むまちや村で伝統の舞踊フェスティバルが催されている。舞踊はチュクチ人、コリャク人、マンシ人、ウリチ人などの諸民族に人気があり、これらの民族はけものや魚を沢山とったときとかお祝いごとのさい、踊りで祝うのが昔からの伝統になっている。写真は西シベリアに住む人口4500人のセリクプ人の祭りのひとこま。

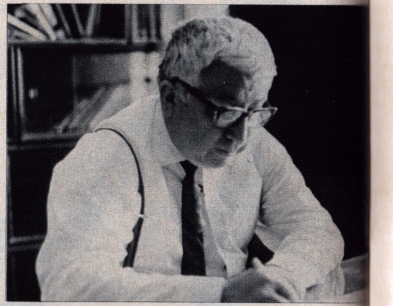


ショスタコービチの未発表作品

永年作曲家D・ショスタコービチの作品を研究してきたレニングラードの音楽研究家ソフィア・ヘントワは、このほどショスタコービチの未発表の手稿を発見した。その中のアニメ映画『坊主とその下男バルダの話』（ロシアの詩人プーシキン作の同名の物語）の音楽（1936年）は、この作曲家としては異色のはなやいだ曲である。ほかにベートーベン、ビゼー、ダルゴムイシスキー、ムソルグスキーの作品や戦時中（1941—45）のソ連の作曲家の20編余りの歌の編曲も発見された。これらの未発表の作品はレニングラードで演奏された。

文化トピックス

ソ連の詩人が国際コンクールで1等



ソ連の詩人ラスル・ガムザトフ（写真）が、ローマの「20世紀のポエジー」国際コンクールで1等に入選した。コンクール応募者数は三一三人。有名なイタリアの批評家、詩人、ジャーナリストから成る選考委員会は、ガムザトフの詩は全人類的なテーマを取り上げ、人々が平和に暮らす希望をうたっていると指摘した。

ガムザトフ（60歳）は、カフカズに住むアバール人で、ダゲスタン自治共和国に住んでいる。ソ連最高のレーニン賞を受賞しており、作品はソ連の数十の民族語や外国語に訳されている。

サーカスの芸人たちに国際賞

昨年ソ連のサーカス芸人4名が国際賞を受けた。すなわち奇術のスルタンガリ・シュクロフ、サラ・カビグジナのペアが国際奇術師連盟のグランプリを、曲芸のグリゴリー・ポポビチがハバナのサーカス芸術国際フェスティバルの1等賞を、手品のウラジーミル・ダニリンがカルロビバリ（チェコスロバキア）の第18回現代魔術国際コンクールで入賞した。

ソ連のサーカス芸人は全世界でよく知られており、毎年外国公演のさいの観客動員数は900万人以上にのぼる。

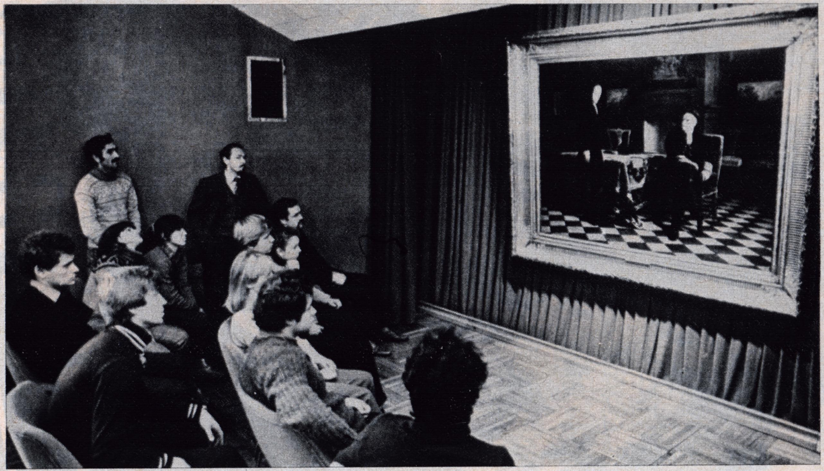
ロシア初の常設サーカス場は1873年にサラトフ（ボルガ川流域）に設けられ、その7年後にはモスクワにつくられた。いまソ連の常設サーカス場は66。芸人の数は6400人。年間約6万回公演し、観客動員数は約7000万人。

1枚の絵の美術館



たった1枚の絵の美術館がロシア中央部のペンザ市に開設された。ソ連各地の有名な美術館が所蔵する名画を一時借りて展示し、鑑賞するこの美術館では、展示された絵について専門家が毎回1時間にわたって解説する。特別の照明、こぢんまりした居心地のよいホール、静けさが絵の鑑賞にもってこいとあって、好評である。

写真は美術館の入口(上)とニコライ・ゲーの『皇子を訊問するピョートル1世』を鑑賞する人々(下)

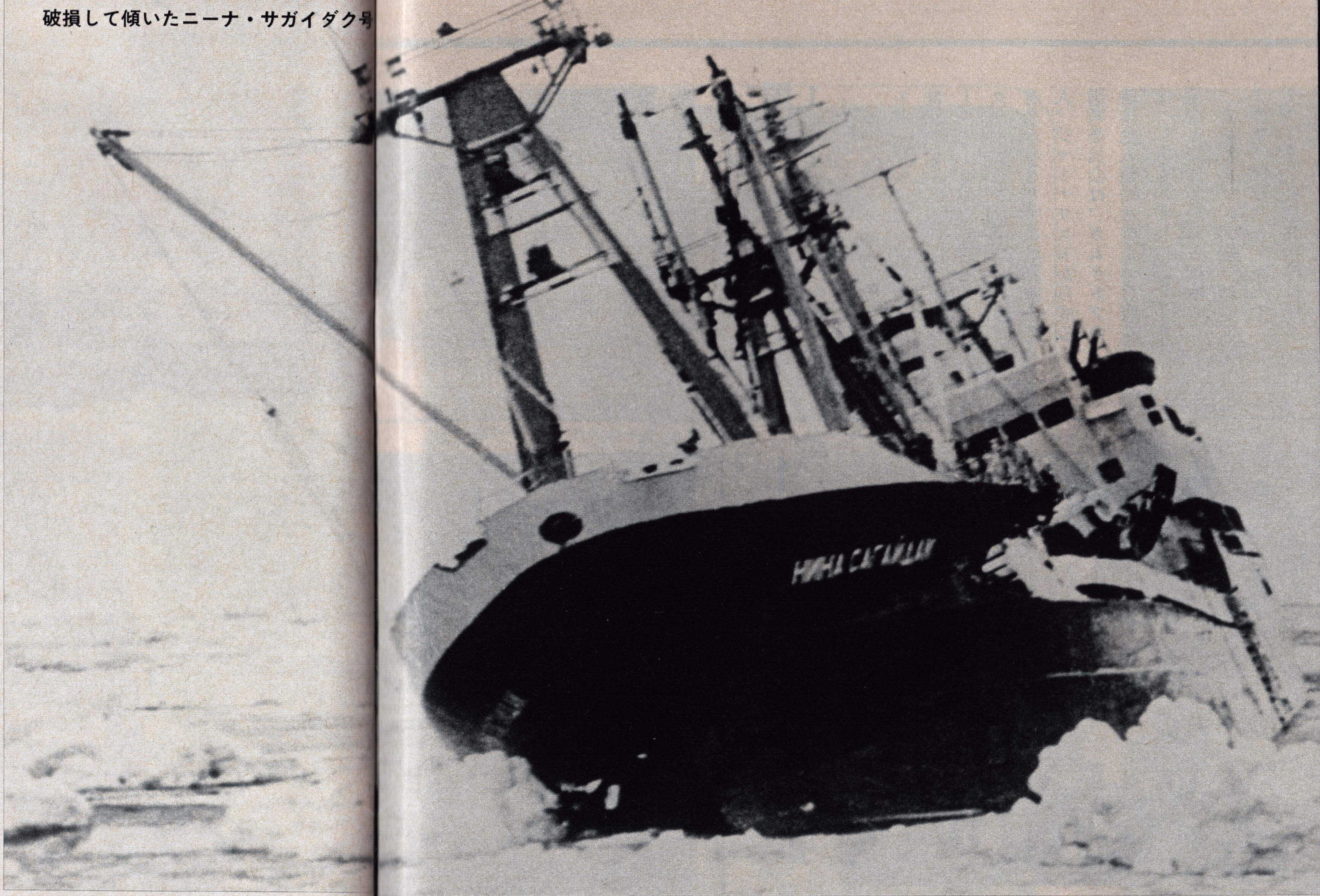


氷海で貨物船21隻が立ち往生！

——北極海の大救出作戦

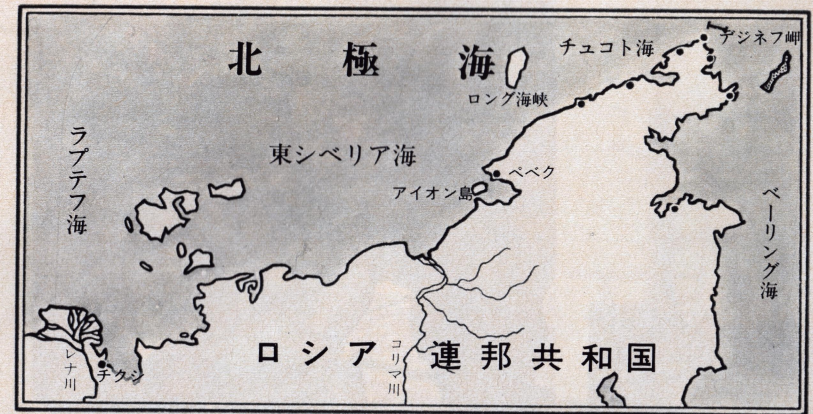
カメラ V・チスチャコフ

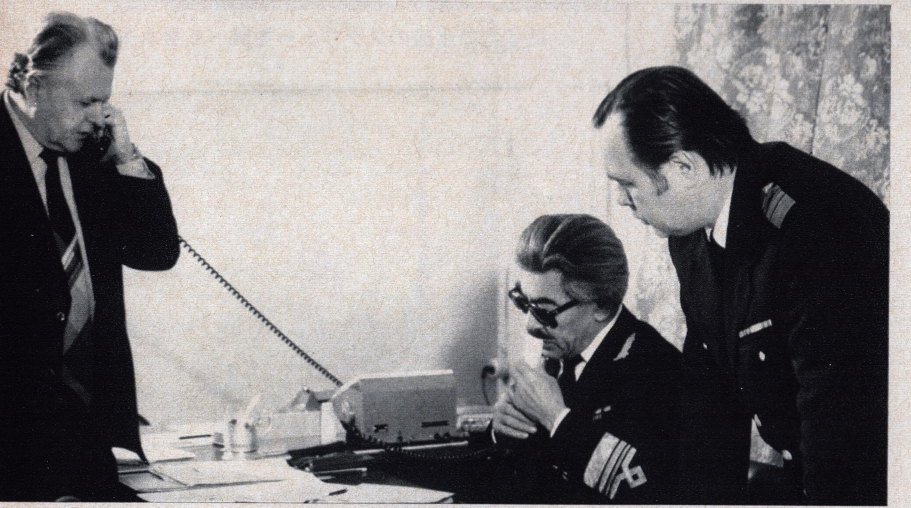
破損して傾いたニーナ・サガイダク号



氷海で難破して見捨てられた船







ペベクの救出作戦本部で

昨年の10月初め、ソ連の北極海船団は過去50年間で最も厳しい試練を味わった。21隻のソ連貨物船が3週間にもわたって氷の海に閉じ込められてしまったのだ。

氷の襲来

ソ連北極海東部セクター（西はチクシ港から東はデジネフ岬まで）で働く船員たちは、すでに夏から、一九三二年の定期航路開設以来見たことのない異常な自然現象にぶつかっていた。この区域では6月末から10月末までの約4カ月間、通常の航行が行われるが、すでに8月に、連日の北西の風のためにアイオン島沖の海氷（厚さ3m以上）が大陸の方に向かって動き出し、ロング海峡を閉ざしてしまい、船は大陸周辺の定着氷に沿った狭い開水面の帯を通ってしか航行できなくなってしまった。8月末にはそれも氷に閉ざされた。船団は航行するよりも停泊していることの方が多くなった。その結果、数十隻の船がヤクーチア（ヤクート自治共和国）やチュコト半島の港の入口にたまってしまった。

9月には、いつにない氷の状況を考慮して、海がいつ凍結してもいいように、気象予報官は10月6日までに全船団を北極海東部から退去させるよう勧告した。貨物を届ける期間が厳しく短縮された。9



氷状の偵察に向かうヘリコプター



原子力砕氷船のスクリューを調べる潜水夫



月にはこの海域に70隻以上の船と8隻の大型砕氷船が集まっていた。

予報によれば、ロング海峡では10月2日から3昼夜にわたって東の風および南東の風が吹くことになっていた。この風は氷を大陸から押し離し、ペベクからデジネフ岬まで航路帯が出現することが期待された。そこでペベクからは東に向かって、4隻の砕氷船を伴う大船団が出発し、東からは砕氷船レニングラード号とキャプテン・ソローキン号を伴う別の船団が出発した。だが、1昼夜後にはすでに風の向きが変わり、以前の北西の風が吹き出して、氷が動き、気温が急激に下がった。予期していたような航路帯は現れず、幅20カイリから30カイリまでの氷の帯が三つもできてしまった。砕氷船はこの氷の障害を突破することができず、船団は氷に閉じ込められ、舵も動かなくなってしまった。氷の海に閉じ込められた船の総数は、両船団合わせて21隻にのぼった。



一面の氷を押し分けて進む（チュコト海で）

さしもの砕氷船も

モスクワの海運省の救援本部とペベクに設けられた作戦本部は、すぐに活動を開始した。氷海域に北極海のすべての航路から砕氷船が派遣された。大型原子力砕氷船レオニード・ブレジネフ号とシベリア号（ともに七万五〇〇〇馬力）、原子力砕氷船の長老レーニン号をはじめとする13隻の砕氷船が事故海域に投入された。氷状を偵察するため、飛行機やヘリコプターが四六時中、空を飛んだ。

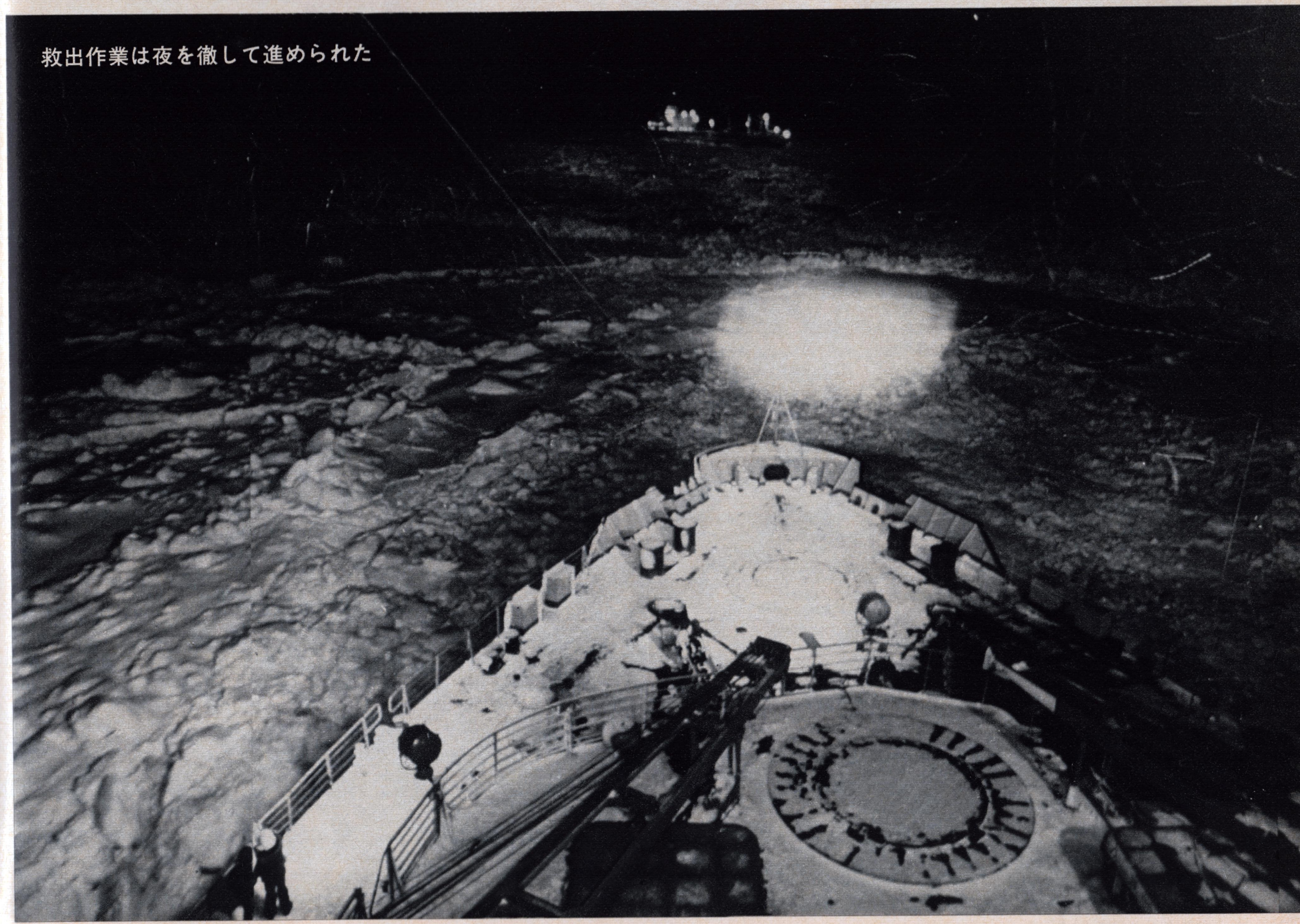
一九七七年に砕氷船レオニード・ブレジネフ号（当時の名前はアルクチカ号）は氷を割って北極点にまで到達した。しかし、こんどの仕事はそれよりもはるかに困難だった。氷との闘いで左のスクリューの重さ2tの翼を折ってしまった。レーニン号も同じ運命に見舞われ、ゲオルギー・セドフ号は見たこともないような大きな海面下の氷の塊でスクリューの翼を3枚もぎ取ら



氷に閉じ込められた船に近づいて
救出するマカロフ提督号（右）

れ、舵もだめにしてしまった。強化型砕氷船クラスの多目的船イガルカ号は、舵とスクリューを保護する突起を折られてしまった。これらの砕氷船はペベクで壊れた部分を取り換えて、ふたたび事故海域にもどった。

ディーゼル・電気船アムグエマ号を厚さ10ｍの氷から解放するために、合計出力一六



救出作業は夜を徹して進められた

万三〇〇〇馬力の3隻の砕氷船——レオニード・ブレジネフ号とマカロフ提督号とエルマーク号が約2昼夜かかった。この3隻の砕氷船の共同作業で船団の大部分が救出された。その戦術は、レオニード・ブレジネフ号がまず氷を割って水路を作り、エルマーク号が船体でそれを広げ、マカロフ提督号が閉じ込められていた船を引き出す、というものだった。

勝利の陰に

最新の技術と海の男たちの勇気が、北極海の氷とのこの信じられないほど困難な闘いで勝利することを可能にした。だが、例外が一つだけあった。

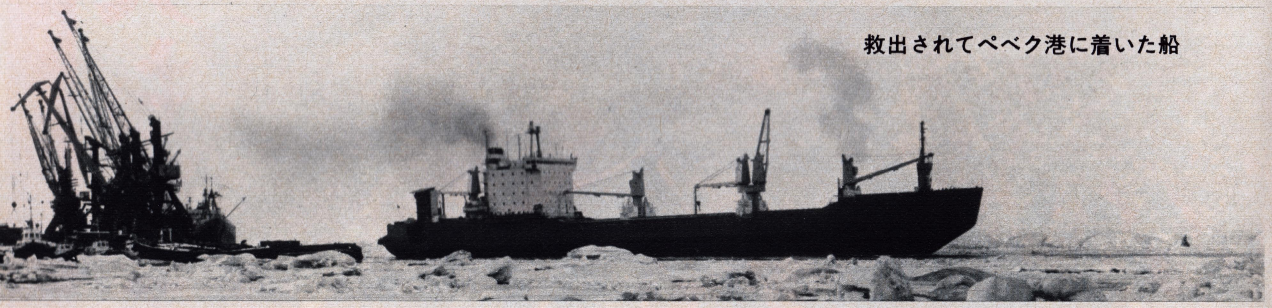
北極海の風はしばしば向きが変わり、秒速15ｍにも達する。氷に閉ざされた船団の中に貨物船ニーナ・サガイダク号があった。船は船首と船尾から氷に圧迫され、主エンジンが動かなくなってしまった。甲板員と機関員の適確な行動によって、船は何とか水平に保たれていた。

ところが、わきに漂泊していたタンカーが氷に押されてニーナ・サガイダク号の方に近づいて来た。タンカーの舷側には急いで予備の緩衝材が取りつけられ、乗組員は船体に水をかけた。衝突して火花でも飛んだら、たちまち燃え上がるからだ。最初の衝突で貨物船の外板がへし折れ、2度目の衝突で裂け目がさらに広がり、船倉に水がなだれ込んだ。

氷が舷側を越えて甲板にまでのしかかり、押しつぶされた機関室から火の手が上がった。火は消し止められたが、機関室は壊れてしまった。船体は40度も傾いた。全部で51人の乗組員は船を放棄した。

シャーベット状の氷の上に渡した板を通って固い氷の上に脱出した乗組員は、ヘリコプターで砕氷船に運ばれた。

同じクラスのコーリャ・ミヤゴチン号も、あやうく同様の運命に見舞われるところだった。この船はすでに第1目に舵を折られ、主エンジン



救出されてペベク港に着いた船

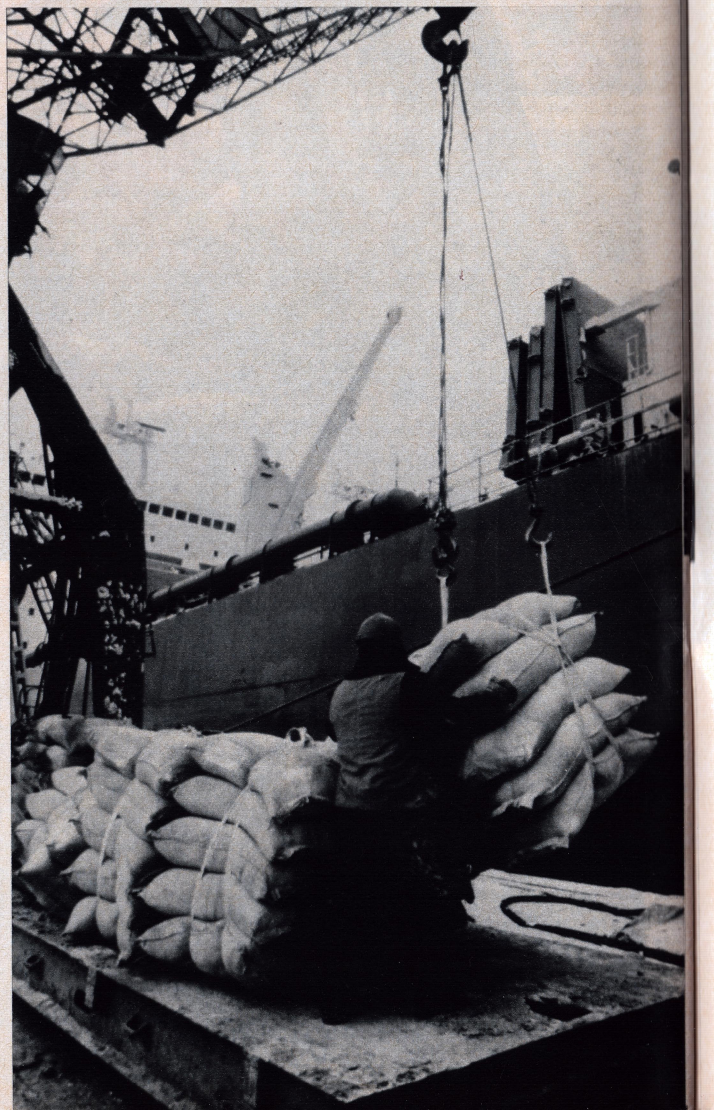
が故障し、船体に長さ2・5ｍ、幅0・5ｍのき裂が生じた。3台の強力なポンプで排水したが、毎時四〇〇ｔも流入する水は増える一方。き裂に防水シートが2重にあてがわれ、それを特殊なセメントで補強することになった。ヘリコプターで砂とセメントと鉄骨が運ばれた。コーリャ・ミヤゴチン号は砕氷船キャプテン・フレブニコフ号に曳航されて、やっとのことで窮地を脱した。

闘いはつづく

ソ連海運省作戦当直室のテーブルに置かれた無線機に次々に「針路をとる……」「港に着いた……」「開水面に出た……」等々の連絡が入り始めた。氷との闘いは終わりに近づきつつある。船は次々に氷海を脱して、目的地に向かって動き出した。

現在、ソ連の北極海沿岸地域はソ連経済の重要な一部となっている。新たな油田、ガス田、その他有用鉱物の鉱床の開発、工業企業の建設など、この地域のいっそうの発展は北極海航路の安定した運行と不可分に結びついている。だから、北極海と人間との闘いはこれからもまだまだつづくだろう。

ついでながら、ニーナ・サガイダク号の乗組員は全員、新しい船でふたたび北極海航路で働くことを希望し、希望はかなえられた。



ペベク港での荷下ろし作業

国際婦人デー特集　ソビエト社会と女性

花も実もある女性知事



精力的に各地を駆けめぐる
タマラ・カブロワ知事

本誌記者　タチヤナ・ワリシエワ
カメラ　S・ソロビヨフ

3月8日は国際婦人デー。ソ連では全国民的な祝日になっているこの日にちなんで、本号ではソ連の女性たち、特に働く女性たちについて特集した。まず最初は、カフカズの女性知事の仕事ぶりから。

◇　◇

タマラ・カブロワはオセット人で45歳。南オセチア自治州（人口約10万。グルジア共和国に入る）の人民代議員ソビエト執行委員会議長（州知事）で、グルジア共和国最高会議の幹部会員である。

母親として

1年前、モスクワでソ連婦人委員会幹部会の定例会議が開催された。会場のロビーには色鮮やかな児童画が展示され、その周囲には人が群がっていた。絵は子どもたちの生活や夢を物語っていた。

その時、白い髪をふんわり結い上げた美しい女性の姿が目にとまった。その女は目に涙をためて絵を見ていた。それがタマラ・カブロワだった。私は思いがけず初対面のタマラと話しこんでしまった。

ファシスト・ドイツがソ連に対して侵略戦争を開始した時、タマラは3歳



グルジア最高会議で演説するカブロワ



カブロワの生まれ故郷。かつての粘土の家に代わってれんが造りの二階家が立つ。周囲は果樹園。



南オセチアの山からトビリシ市の中心部に移された古いオセチアの塔。収穫祭の時にはオセチアの民芸品の展示即売会場になる。

だった。タマラたちが住んでいた家からわずか数十kmの所がむごたらしい戦場になった。大カフカズ山脈のおかげで辛うじて南オセチアは戦火を免れていた。

父親は出征し、家に残された母親はタマラと1歳になる息子を抱えていた。乏しい食糧配給券でパンをもらうために、小さなタマラが長い行列に加わった。

タマラ・カブロワは語る――「お腹を空かせた弟の顔が忘れられません。それに、自分と同じ年頃の子どもたちの真剣なまなざしも。戦争が無邪気な子ども時代を奪ってしまったのです。

娘を出産した時、苦い思い出にもう一つ、恐ろしさが加わりました――万一この子にあれと同じことが起こったら？そうだ、破滅を避けるには行動しなくては駄目だ、とその時気づきました。私たち母親は何よりもまず、自分の子どもたちの幸せな将来について考えねばなりません。私は何よりもまず、母親なのです。

ですからソ連婦人委員会の一員として、世界のすべての女性に向けられた核軍拡反対、新たな戦争の脅威反対の闘いを共に進めようというアピールの採択に賛成票を投じました」

現場をとび回る

2度目にカブロワに会ったのは南オセチアの中心地ツヒンワリ市だった。早朝、カブロワと私はロクスキー峠へ出発した。峠では大カフカズ山脈横断トンネルの工事が行われている。一九八五年にトンネルが貫通するとカフカズ横断自動車道が開通する。この大幹線道路の持つ意義は大きい。開通に伴い、ソ連欧州中央部からザカフカズ地方（カフカズ山脈の南側）への道程は約半分に短縮される。この幹線道路の工事が南オセチア当局の注目の的になっているのもそのためだ。南オセチア州執行委員会の次の会議でその工事の進捗状況が審議される。カブロワも自分の意見をまとめるためにそこへ足を運ぼうというわけだ。

車は緑に埋もれた市の中心部を後にした。典型的なオセチアづくりの二階家に代わって中層住宅が見えて来た。

「ツヒンワリ地区の拡大は州の経済的必要から生じたものです。それに、州の企業の90%が市内に集中していますしね。ツヒンワリの人口は少なく、労働力は限度があります。新しい労働力を市は農村部に求めていますから、私たちはちゃんとした住宅を提供する義務があります。どこに建てるか？州執行委員会は郊外の霜で駄目になったブドウ畑を建設用地として転用する決定を下しました。ブドウ畑のあったところが今は住宅地になっているのですよ」――とカブロワの説明がつづく。

ツヒンワリを出て私たちは、くねくねと曲がるアスファルトの道を、大カフカズ山脈の頂の氷河が白くみえる北へ、北へと進んだ。山脈にへばりついたような村落があちこちにちらほら見えた。南オセチアの人口の半分は山間部に居住している。遠く離れた山村からツヒンワリまで何週間もかけてやっとたどり着いた時代のことを古老たちは今も覚えている。現在は州内の道路の整備も進み、舗装道路の全長は何百kmにも及ぶ。

右手に見えて来た、一瞬鋼鉄パイプの山かと思ったのは、給水管の敷設現場だった。この給水管が種々の鉱物塩に富んだ鉱泉を州都に運ぶ。

車がカーブすると、中世の物見やぐらが突き出ている古い村が目にとび込んで来た。いずれこの古村は野外博物



職務上カブロワはしばしば工場を観察し、女性の労働・生活条件の改善に注意を怠らない。

館になる。オセチアの隅々から古い建造物がここに運び込まれるはずである。

間けつ熱泉の谷に入った。いくつもの噴水が効能で有名なミネラル水を地中から3－4mもの高さに噴き上げている。間もなくここから配管工事が始まり、ツヒンワリ市でことし着工予定のミネラル水工場まで給水管が伸びることになっている。

カブロワは州執行委員会での審議について話してくれた。企業側の最初の案によると、給水管の路線は松の大木の生い茂る林の中を通る予定だった。だが、現地当局の強い要望で路線を少し迂回させ、貴重な松林の9/10を保存することが出来た。

車が最後のカーブを曲がると、道路は行く手に待ち構えた真っ暗な、パクッと口を開けた半円で行き止まりだった。それがロクスキー・トンネルだった。

「怖くありません？」――建設場長のキピアニの案内でトンネルに入るとカブロワがこう問いかけた。「私はここにもう何十回となく足を運んでいますが、最初は地獄にいるような気がしたものです。闇と水の流れ、岩を打ち砕く轟音、増幅されたエコー、そのうえ頭上には厚さ1kmもの土砂があるという意識――今は慣れましたけれど……」

正直のところ、地下の洞穴から出て白い光を見つけた時にはほっと胸をなでおろした。

帰り道、カブロワはずっとキピアニと工事の話をしていた。それを聞きながら私は、彼女がトンネル建設の問題に実に精通しているのに感心した。

私の気持ちを見すかしたようにカブロワは言った――「私はどこにでも自分で出かけて行くように努めています。ですから時々私は、いつも旅行中のような気持ちになります。今度のような出会いが新たな知識を与えてくれます。もちろん私は経済学者でも、法律家でも、技師でもありませんから、専門書はいっぱい読まなくてはなりません。場合によっては経済学者や法律家や技師にもならなければなりませんのでね。私を高い地位に選出して下さった人たちの信頼にもっともっと応えたいのです」

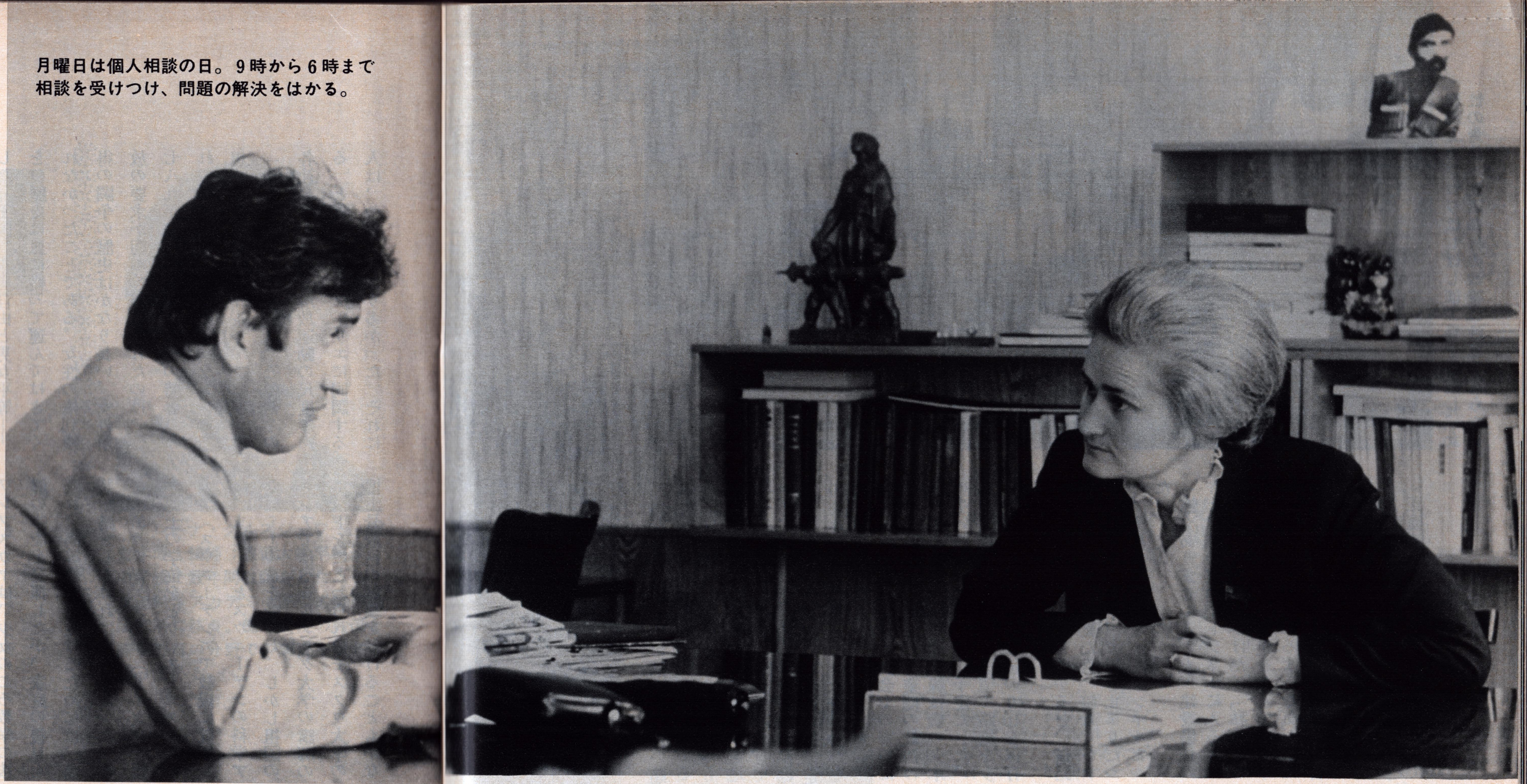
一日の仕事を終わって……

ツヒンワリは小都市だから、一人ひとりの人間の動静が手に取るようにわかる。みんながうわさの対象になる。

〃公平な人〃、〃つつましい人〃、〃思いやりのある人〃というのが地元の人たちのカブロワ評だ。人々は頼み事や苦情を持って、あるいは助言を求めて

ツヒンワリのニュータウン





月曜日は個人相談の日。9時から6時まで相談を受けつけ、問題の解決をはかる。

カブロワの所に来る。時には町でカブロワをつかまえて、〝お願い、タマラ！〟と頼みこむ人もいる。そんな時もカブロワは快く応じてあげる。

州執行委員会議長が個人的問題の相談を受け付けるのは毎月曜日、9時から6時まで。この日がどれほどの体力と忍耐を必要とするかを知っているのは当のカブロワだけだ。一人ひとりがそれぞれ問題を抱えているし、みんながみんな等しく自制心を持っているわけではない。そのうえ何か不愉快なことがあれば、なおさら抑えがきかない。こういうとき教育者魂（カブロワは教育大学を卒業している）が役に立つ。

「仕事でものすごく疲れた時にブラブラするお気に入りの場所を教えましょうか？」——最後の相談者が帰るとカブロワは言った。「人々の運命——そのためにこそ私たちは働いているわけですが、こうやって一人ひとりの話を聴くのはとりわけ気骨が折れます。普段はいつも急いで家に帰るのですが、この日ばかりは外をぶらつきながら考えごとをし、自分と差し向かいになりたいと思うのです」

私たちは真っ赤なケシの花の中を細い道を伝って山に登った。そこからまちや渓谷の素晴らしい景色が見えた。

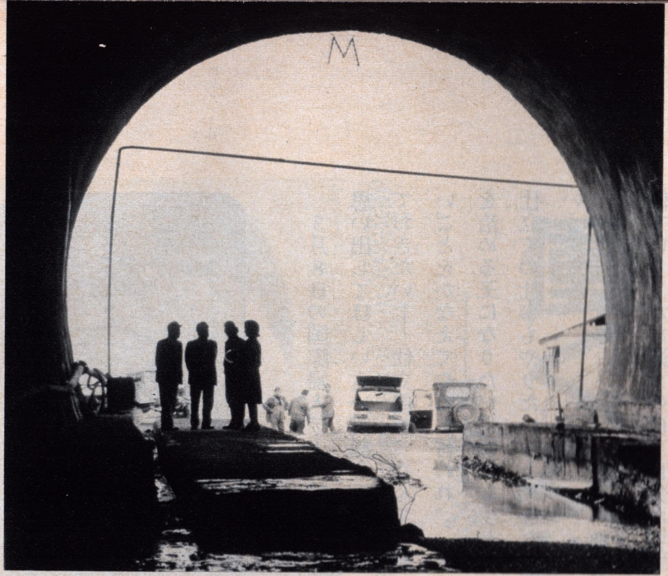
「3人で来ることもありますのよ。私と娘と夫と。でも、何か疑問が頭をもたげて来た時には一人で来るんです」

私はハッとして遠れを見た。あの強さ、き然さはどこに消えてしまったのか？ 私の前にいるのは、素朴な、やや疲れたような女性であった。

「ここからは私の故郷が一ぺんに望め

ロクスキー峠から北に延びる新しいカフカズ横断自動車道。中央に見えるのはオセチア文学の祖コスタ・ヘタグーロフ（1859—1906）のメモリアルと住居博物館。





南北オセチアを結ぶことになるカフカズ横断自動車道のトンネル工事現場を視察するカブロワ。

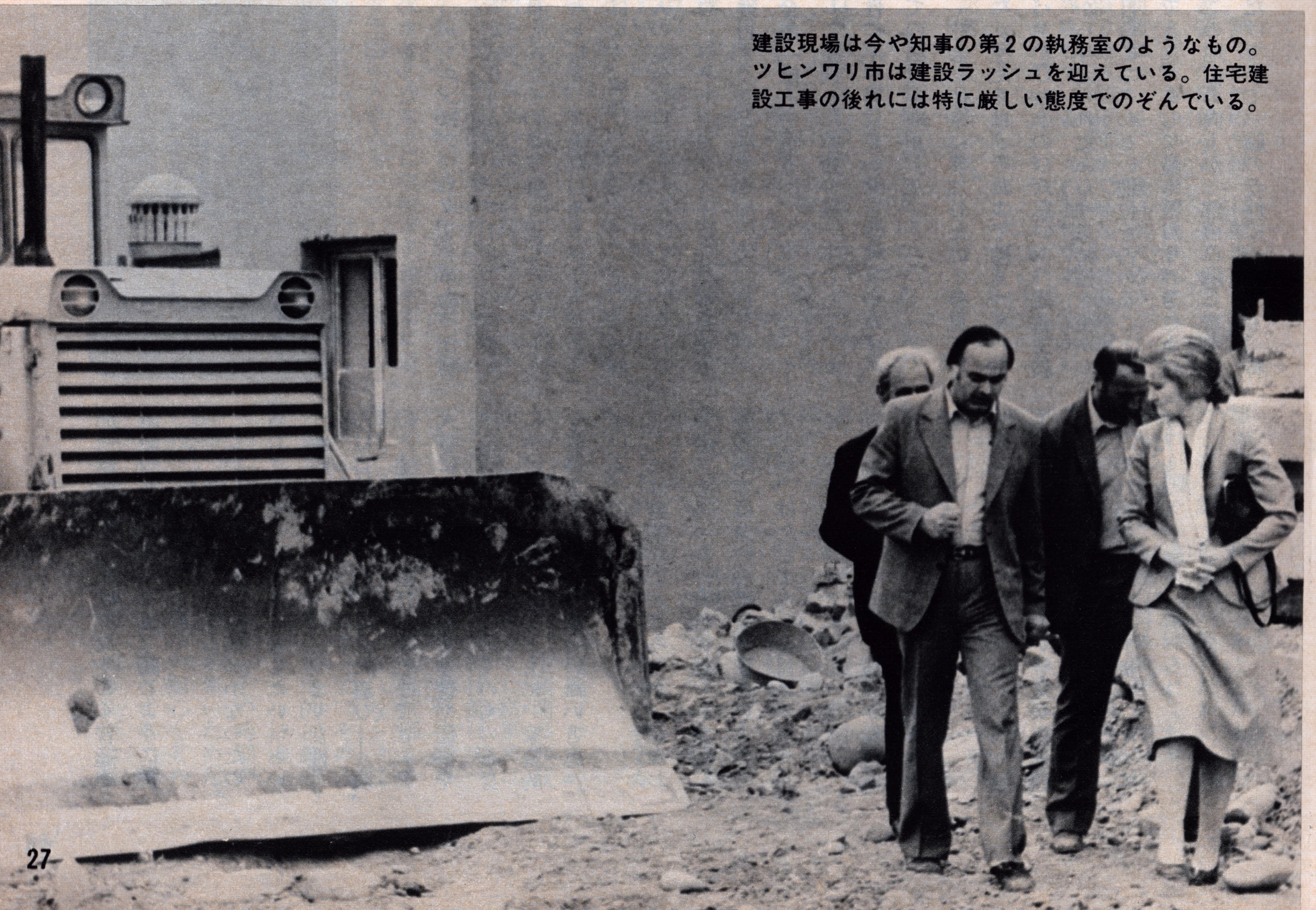
ます。ほら、あそこ、山の上に小さな村があるでしょう。私が生まれた村です。そこに見えるのがツヒンワリ。村やツヒンワリを私から取っちゃったら？ 私はこの土地に根を張っています。この土地が私に力を与えてくれるのです」

下から自動車の警笛が鳴り響いた。

「運転手の合図です。無線電話が入ったんです」——カブロワの説明に私たちは車の方へ行った。

受話器を置くとカブロワは言った。

「首都のトビリシへ行かなくてはなりません。国家計画委員会でツヒンワリに建設される劇場の設計のことで審議が行われるのです。規格設計を提案されているのですが、私たちは民族的伝統に基づいた独自の設計を用意しています。こっちの方が工費が高いものですから、議論しなくちゃならないのです」



建設現場は今や知事の第2の執務室のようなもの。ツヒンワリ市は建設ラッシュを迎えている。住宅建設工事の後れには特に厳しい態度でのぞんでいる。

女性の幸福、女性の願い

3月8日の国際婦人デーの前にぜひ思い出してほしい古い寓話を一つ挙げておきたい――仕立屋が、なんでも願いごとをかなえてやると言われ、「国を治める王になりたい。ただし少しは仕立ての仕事もやりたい」と頼んだという。

女性の気持ちもこの仕立屋の思いに似ている。ただ違うのは、自分が切望した〝王国〟――自由と男女平等――を、歴史は皿に盛って運んではきてくれなかったことである。女性の権利獲得の闘争の歴史はかなり長い。女性解放の要求が初めて唱えられたのは、一七八九年のフランス大革命の時と見られている。18―19世紀のフランスの空想的社会主義者シャルル・フーリエは「婦人の解放の度合いは、そのときの各社会のあらゆる解放運動の尺度である」と書いたが、フーリエに同調する人は、つねにかなり多かった。それにもかかわらず「そのときの各社会」は婦人の解放に激しく抵抗し、帝政ロシアのごときは一九一七年の10月社会主義革命までずっと最も頑強に反対した国の一つだった。帝政ロシアは女性を無権利と無教育の状態に閉じ込め、最もエネルギッシュな才能のある女性を無名、無活動のままに捨てておいた。

19世紀後半に活躍したソフィア・コワレフスカヤは、少女のころ数学の抜群の才能を発揮したが、家庭の後見を逃れ、高等教育を受けるためには、偽装結婚をしなければならなかった。彼女はゲッチンゲン大学（ドイツ）で哲学博士の学位をとり、ストックホルム大学（スウェーデン）で教授に就任した。またパリとスウェーデンの科学アカデミーの賞を受けた。しかし祖国のロシアではペテルブルグ大学の講師のポストをことわられ、モスクワ大学の博士号取得の試験を受けることもかなわなかった。

レーニンはプロレタリア革命の任務を定式化するさい、フーリエの言葉をほとんどそのまま繰り返したが、レーニンにとってそれはもうユートピアではなく、実行のプログラムであり、「婦人の完全な自由をたたかいとらなければ、プロレタリアートが完全な自由を獲得することはできない」（レーニン全集「婦人労働者へ」）と書いた。そして勝利した革命の第一歩として、女性の不平等に足かせをはめていたすべての法律を廃止した。

社会の仕事に参加したいと夢見ていた女性たちは、それまで縮まっていたバネがぴんとのびた思いで、社会主義から与えられたあらゆる特権を生かし、自分にふさわしい地位を占めることができた。そして最も注目すべきことは、この地位の向上が一部の卓越した女性だけでなく一般の女性についても、特別の運命の女性だけでなくごく普通の運命の女性についても、同じように言えることである。

しかし女性は永年の夢がかなったのちも、「少しは仕立てもしたい」という希望を捨てなかった。つまり女性たちは自然が弱い性に与えた喜び――妻、母、主婦になる喜びをこれまでどおり大事にしている。しかも学習や仕事や社会活動でできるだけ多くのものを身につけようと努めるとともに、家庭的な喜びをもっと多く味わいたいと思っている。

これは無茶なことだろうか、かなわぬ夢であろうか。女性の願いが絶対に論理的ではないのに全く正しいということが、はたしてないと言えるだろうか。公正を期すために言っておくが、逆の場合、つまり女性の意見が論理的だが、正しくないということもありうる。

そんなわけで、「王様になって、少しばかり仕立てをしたい」という希望は、実現可能だろうか。それについては、この特集記事から判断していただきたいと思う。

座談会

働く女性と家庭

――解決ずみの問題と未解決の問題



エレーナ・グルズジェワ――歴史学博士候補。教育大学卒業後、中学校で数年間教師をしたあと、ソ連科学アカデミー国際労働運動研究所に移る。働く女性の労働と職業教育の分野での調査・研究を行っている。



エレオノラ・チェルチーヒナ――経済学博士候補。同じく国際労働運動研究所に勤め、働く女性の家庭、日常労働、休息の問題を研究している。

働く女性の地位、技能資格、昇進、家庭との関係など、ソ連で解決されたこと、あるいはまだ解決されていない問題について、ソ連科学アカデミー国際労働運動研究所で婦人の労働問題を専攻している二人の女性学者――エレーナ・グルズジェワ、エレオノラ・チェルチーヒナと本誌のアダ・バスキナ記者が話し合った。

――まずお聞きしたいが、お二人のような人生コースはソ連の女性としては典型的なものだと言えるだろうか？

グルズジェワ　学校を出て職業を持ったという意味では、私たちの人生コースはソ連の大多数の女性の典型的な例と言える。今日では専門技能を持ち、自立して働きたいと願わない女性はまずいない。成人に達する頃になると、どの娘も、何か職業を身につけなければならないということをはっきり自覚している。そして大抵、大学や中等専門学校、あるいは職業技術学校へ入ってそういう専門を身に付ける。女性が学者になりたいと思った場合、チェルチーヒナのように学校卒業後すぐに研究生活に入る人もいるし、私のように途中から方向転換して研究者になるものもいる。

――女性にそういう活躍の場が与えられるかどうかは、ただ能力次第だと思いますか？

グルズジェワ　もちろん、この場合は能力が最重要の要因だ。しかし、ここですぐに出てくる問題は、能力を発揮できる諸条件があるかどうかということだ。第一の条件は教育だが、これはわが国では確実に保障されており、一九二六年と最近の国勢調査が行われた一九七九年を比べると、頭脳労働に従事する全就業者のうち女性の比率は26％から60％に増えた。有資格の専門家のうち、現在は女性が59％を占めているが、一九四一年には36％だった。大学生のうちの女子の比率も増えており、一九六〇年には43％だったが、一九八〇年には52％と過半数を超えている。ところが女子の高学歴と職場での昇進のテンポとの間には矛盾がある。例えばレニングラードの社会学者のデータによると、女性技師のポストの昇進は、男性より平均3年遅れているとのことだ。

――それはなぜか？　能力が劣るからだろうか？

グルズジェワ　能力の問題ではない。レニングラードの設計、生産関係の技師一〇〇〇人を総合調査した結果では、女性技師は仕事の質で男性技師に劣っていない。にもかかわらず女性技師たちの技能資格のレベルは男性技師より後れている。これはなぜかというと、技師の能力を示す指標はすべて、その人の職歴の最初の数年間に集中的に伸び、入社6年から10年で高いレベルに達するのだが、女性はちょうどその時期が結婚、出産と重なることが多いためだ。これは当然女性の仕事への関心をそらし、能力の向上と昇進を遅らせる。例えば工業部門では技師の約半数が女性

だが、生産施設の長をしている女性は16%に満たない。

—— その原因は、たくさんの従業員を管理するのは自分たち女性よりも男性に任せておいた方がいいといった女性特有の心理にも一端があるように思うが……

チェルチーヒナ　その意見には賛成できない。女性の専門家の中には、幅広い教養を身につけ、実務に通じた人や、男性より指導力のある優れた組織者がいる。問題はやはり家庭である。家事から女性を解放してくれる人はだれもいなかったし、家事は多くの関心や時間を奪いとっている。

グルズジェワ　私がさっき言ったのは、女性の指導者の相対的な人数のことだ。男性に比べれば少ないが、年々その数は増えている。

—— ソ連の女性勤労者の状態について何か特徴的な傾向はあるか？

グルズジェワ　タガンログ市（ソ連欧州部の南、人口約30万）で10年の間隔をおいて行われた調査があるが、その結果を見ると、10年間で女性勤労者の教育水準は男性とほぼ肩を並べた。しかし技能資格の面では相変わらず男性にはっきり水をあけられている。一九六八年のタガンログでは全男性労働者中に占める熟練労働者の比率は81%、全女性労働者中の熟練労働者の比率は34%だった。10年後の一九七八年のこの数字は男性が88%、女性が64%だった。

—— 教育水準が同じなら、技能面の後れの原因は何なのか？

グルズジェワ　学歴それ自体は、職業技能のレベルを決定するものではない。専門に磨きをかけるためには、やる気と時間が要るが、私たち女性には意欲はあっても時間の方がどうも……

—— やはり子供や家事がブレーキになっている？

グルズジェワ　もちろん！

—— 子供が大きくなるまで、女性は仕事を一時休んだ方がいいのではないだろうか？

グルズジェワ　私たちは同じような質問をさまざまな企業の女性従業員たちにした。彼女たちの答えは、長いこと仕事を休みたくはない、なぜなら現在のように発展のテンポが速い時代に、急速に複雑化している生産のレベルに後れるのは損になる、ということだった。

チェルチーヒナ　それに現代の娘たちは自分の母親やおばあさんを見て育ったから、男性たちに負けずに一級の専門技能を身につけようとしているといった事情もある。

グルズジェワ　社会もそれに応えている。多くの企業に、女性労働者を再教育する特別の制度が設けられている。子供のいる女性労働者も、勤務中、給与を全額もらって技能向上の講習会で学ぶことができる。

—— 私たちは今、〝仕事、仕事…〟と仕事を中心に話を進めてきたが、うちの編集部には、ソ連の女性はみな働くことが義務になっているのかという質問が外国の読者から来るが……

グルズジェワ　憲法で保障されたソビエト市民の労働の権利とは、婦人はみな働かなければならない、ということでは決してない。わが国の女性の7—9%は働いてもいないし、勉学中でもない。当然だが、誰も彼女たちを強制的に働かせることはできない。

チェルチーヒナ　最近母親のために導入され、今後もいろいろと予定されている追加の特典に伴って、働く婦人の数がいくらか少なくなるのではないかと思う。その特典とは、子供が満1歳になるまでの有給の産休と、そのあと子供が1歳半になるまでポストを維持したまま休める無給休暇（在職期間に算入される）のことだ。しかし私たちの調査が示したところでは、大多数の女性は仕事をすっかりやめようとは思っていない。

グルズジェワ　私たちはある調査の中でこんな質問をした——「もしあなたの給料分だけ夫の給料が上がったとしたら、あなたは仕事をやめますか？」これに対し、80%の人がノーと答えている。これは、女性にとって仕事では金銭的要因だけではなく、精神的な要因も大事だということを示している。確かに労働集団の生活に加わることは、個性を成長させる大きな刺激になる。働く女性は、家に閉じこもっている人よりもはるかに広い視野を持っている。

—— しかし社会的積極性は個性を発揮する一側面にすぎない。文化、教養面の成長という面ではどうだろう？　なにしろ教養を身につけるには時間が要る。働いていない女性の方が時間に恵まれているが……

グルズジェワ　労働集団が個人の職業技術面のレベルアップに役立っているのは誰の目にも明白だが、それだけではない。個人の教養全般のレベルアップにも役立っているのだ。労働集団の中で人々は交際し、この交際の過程で世間の出来事、芸術、文学、科学などの情報の交換が行われている。こういう交際では〝事情に通じている〟必要があるので、もっと沢山見たり、読んだり、興味をもたなければ、という意欲を女性に起こさせるのだ。

チェルチーヒナ　興味深いことに、働く女性の技能レベルが上がれば上がるほど、家事に要する時間は少なくなる。なぜか？　それは仕事上の活動が組織性、正確さ、工夫などといった資質を育てるからだ。中でも重要なのは、勤めが自由時間の価値を高めていることだ。仕事を通じて得られたこれらの特質は、日常生活でも発揮される。働いている女性は、内容の濃い余暇や子供の教育のためにもっと時間を作ろうとして、家事の合理化に努め、いわば家事労働の生産性を上げる努力をしている。

—— 子供の教育と言われたが、その心配の多くはソ連では国の児童施設が肩がわりしているではないか。

チェルチーヒナ　確かに保育園、幼稚園、学校の学童保育グループ、ピオネールの会館や宮殿、その他の国の施

設がその心配の大部分を肩代わりして親を助けている。けれどもこれはあくまでも援助であって、子供の教育は全面的に国がやるべきだと考えた者は、いまだかつて一人もいない。今まで問題になったのはいつも、家庭の影響と社会の影響がうまく両立しているかどうかということだった。例えばわが国には多くのすばらしい幼稚園があり、そこには児童を精神的、肉体的、美的に発展させる、つまり全面的に発展させる可能性がある。しかし、どんなに優れた児童施設であっても、それだけでは、人間の完全な成長にとって欠かせない両親の愛情、家庭の温かさを子供に与えることはできない。

—— では、女性が社会で果たさなければならない勤労者と母親という二つの役割はどう両立させたらいいのか？

チェルチーヒナ　この面で国の果たす役割は大きい。ここ15—20年間に、わが国の生活サービス業、商業など、家事を援助するサービス部門全体は急速なテンポで拡大した。これによって家事は楽になってきたし、今後はもっと楽にしなければならない。

グルズジェワ　このほか、女性たちにはパートタイム制で働いたり、自宅勤務できる権利が広く提供されている。そのために一連の企業では各自都合の良い時間に出勤できるいわゆるフレックス・タイム制が導入されている。

—— 先ほど、仕事が女性に事務能力、集中力、組織性の面で影響を与えていると言われたが、逆にその仕事が女性の情緒性を弱くしたり、女性らしさを失わせたりはしないだろうか？

チェルチーヒナ　合理主義はある程度情緒的なものを抑えるかもしれない。現代の職場はしばしばいらいらや心理的な負担を起こさせる。それに加えて、家庭のことの心配が山ほどある。それでもなお女性は、職場でも、家庭でも（とりわけ家庭では）、自然が与えた役割どおりの優しい母であり、妻であり、家庭の情緒的中心であり続けている。

グルズジェワ　仕事は（それが本当に興味深い仕事なら）、満足感をもたらすし、職場で仕事が順調に行っていて、女性がそれを喜んでいれば、彼女はその喜びを家庭に持ち帰って、家庭にも幸せな雰囲気が生まれるだろう。

主婦が自宅で働きたいとき……

――ソ連の在宅作業制度

本誌記者　マリナ・ルイクリナ
カメラ　V・ペルベンツェフ



〝ウメーレッツ〟生産合同の在宅作業者レーナ・グラズイリナ



レーナの仕事はこういう麦わら細工で手箱を飾ること。

婦人の務めとは何か？　一〇〇年も昔ならその答えは至って簡単。妻となり、母となり、家事を切り回すことだ。しかし今では、それほどはっきりとこの問いに答える人はまずいまい。若い娘が家庭や子供を持ちたいと思っているのは、もちろん、一〇〇〇年前、一〇〇年前と変わらない。けれども、家事に束縛されてほかのことができないのはもういやだと言う。何か仕事をして、社会のためになりたい、たとえ夫の収入がよくても自分は経済的に独立していると感じていたい。こういう欲求を現代の女性はたいがい持っている。では、大家族だったら？　実際に毎日出勤できなければ？　そういう場合にはソ連では、市立または区立の職業紹介所があって、婦人たちに、自宅にいて家事や育児をしながらできるいろいろな種類の仕事を世話している。

　こういった自宅で出来る仕事のあっせんをどうやってするのか、キーロフ州（モスクワの東北八〇〇km）を例にして紹介しよう。

子供が3人になって

　州の中心地キーロフ市には、家庭にいる女性たちに仕事を回してくれる企業が幾つかある。また、従業員の大半が自宅で仕事をする女性（在宅作業者）だという特別の会社もある。この会社の名前は〝ウメーレッツ〟（名人）生産合同。

　私とカメラマンのウラジーミル・ペルベンツェフは〝ウメーレッツ〟の定期便の車の一台に便乗して、従業員たちの家を回ることになった。この定期便は毎日、従業員の家へ材料や半製品を送り届け、完成品を引き取ってくる。キーロフ市（人口三九万二〇〇〇人）の方々に住んでいる数十人の家を回ってみて確信したのは、キーロフ市では主として子供を何人も持つ女性たちがいわゆる在宅作業者になっているということだった。その多くは出産までは市内の企業か施設（工場、学校、病院など）で〝常勤〟の職員として働いていた人たちである。

　私たちはそういう在宅作業者の一人、レーナ・グラズイリナに頼んで、日本の読者のために取材させてもらうことにした。翌日は好天で、レーナは2歳の末息子イリヤと一緒に外へ出て、会社の定期便を待っていた。定期便の運転手はレーナから手の込んだ麦わら細工で飾った美しい手箱を数個受けとり、別の人の家へ向かった。私たちはレーナの家へ入った。

　レーナは28歳。子供が3人いる。長男のリョーシャは6歳で幼稚園の年長組。娘のマーシャは4歳で同じ幼稚園の年中組。それに先ほどの末息子イリヤがいる。夫のニコライ・グラズイリン（28歳）はタクシーの運転手。レーナは5年前、キーロフ芸術専門学校（中等専門教育機関）を卒業し、一九八二年まで幼稚園で音楽の先生をしていた。

「長男のリョーシャが満1歳になったあと、保育園に預けて復職しました。（ソ連の法律では一九八二年までは出産した女性に対して仕事のポストを維持したまま1年間の育児休暇が与えられた。現在は1年半に延長）。なぜ復職したかというと、自分の仕事が好きでしたし、できるだけ人々と交わりたかったし、自分が役に立つ人間だということを感じたかったのです。だから、家にいた間はたえずピアノの練習をして、腕が落ちな



きょうは夫のニコライが休みなので、家族そろって団地内の児童公園へやってきた。

いように心がけました。マーシャが生まれた後もまったく同じでした。1年間休んで、仕事に戻りました。その頃には長男はもう幼稚園に行ってましたけど。

でも、3番目のイリヤが生まれた時は、もう勤めに出られないということが分かりました。子供たちはどんどん育って行くのに、私が子供たちの顔を見るのは夜か休日だけです。それに帰宅するとすぐ、子供たちを寝かせる時間になってしまいます。一人ひとりの子供にもっと沢山の時間をかけてやりたいのに。また、自分の子供が病気になると、私が仕事を休むことになりますが、そうなると今度は幼稚園の子供たちの音楽の時間がなくなってしまうわけです。

結局、私は仕事を辞め、専業主婦になりました。ところが末息子が1歳になった時、新聞で〝ウメーレッツ〟生産合同が自宅で出来る仕事をする人を求めているという記事を読んだのです……」

＊　＊　＊

ソ連では在宅作業制度は主として民芸品の生産に利用されている。レース、カーペット、木の枝、白樺の表皮、ボダイジュや柳の皮の細工、彫刻や絵付けをした木の民芸品、チェカンカ（金属の打ち出し細工）、陶器、セーム皮、生皮、毛皮の細工品など、民芸品の大部分は、急がずに念入りに行う作業を必要とする。現行法規ではこのような民芸品の製作技術を持つ人が、在宅作業契約を優先的に結ぶ権利を持っている。この場合、彼らは在宅作業と他の仕事を両立させ、その両方から賃金をもらうことができる。

数は少ないが、テープレコーダーの部品組み立て、シーツの縫製、機械を使った編み物、その他に従事する在宅作業者もいる。

ロシア連邦共和国地方工業相のビクトル・ウスペンスキーの話――「われわれは年々、在宅作業による日用品の生産を拡大している。現在すでにこれは一五〇〇点以上の品目にわたり、年間の生産額が四〇万ルーブルに達している。このような製品の需要は非常に大きい。地方工業部門で一九八五年までに在宅作業者数を倍増し、二五万人にまで持ってゆくことが予定されているのもそのためだ。在宅作業者を活用する最も効果的な形態にならなければならないのが、そのための専門企業だ。現在、ロシア連邦にはそういう企業が36ある」



夫のニコライの勤務が朝8時からの時は、夫婦そろって上の2人の子供を幼稚園へ送って行く。



長男のリョーシャはお母さんの仕事を見ているのが好きで、時々お手伝いもする。



週に2―3回、〝ウメーレッツ〟の定期便がレーナの自宅を訪れ、完成品を受けとり、材料と半製品（麦わらと木の小箱）を置いて行く。

生産合同〝ウメーレッツ〟

キーロフ州は昔から民芸が盛んなことで有名だ。だが残念なことに、時とともにその多くが忘れ去られてしまった。そこで〝ウメーレッツ〟生産合同はつねにデザイナーや職人を調査のために出張させている。派遣されたデザイナーや職人は州内の村々を訪ねて、住民が持っている古い調度品を集めたり、買い上げたりし、古い装飾や、いわゆるビャトカ模様（キーロフ市は一九三四年までビャトカと呼ばれていた。ビャトカはここを流れ



▲技術的に何かわからないことがある時は、会社の職場にいる自分の指導員を訪ねて教えてもらう。

る川の名前に由来する）を写真に撮ったり、模写したり、古老の話を記録したりしている。また特殊な技能を持つ老人に弟子入りして、技能を教えてもらうこともある。こうした老人の多くは家で注文品を作って、製品を〝ウメーレツ〟へ納めている。そのさい、老人たちには年金も従来どおり支給される。

現在、〝ウメーレツ〟の従業員は一八〇〇人。そのうちの一四〇〇人が自宅で仕事をしている。

キーロフ市にある〝ウメーレツ〟の本部建物には、いくつかの職場がある。そこでは手箱、木工品の絵付け、麦わら細工作りなどが行われており、みやげ物を作る職場では伝統的なマトリョーシカや木製のさまざまな人形が作られており、織物職場では手織機を使って装飾布が織られている。ここにはまた家で仕事をしている人たちの製品を集める場所があり、自動車で製品が運び込まれて来る。

キーロフ州の19の地区に〝ウメーレツ〟の支部が27カ所設置されており、農村の在宅作業者（年金生活者、子どもがいる女性、身障者）はここから材料を受け取り、ここへ製品を納める。これらの支部はふつう、平屋のあまり大きくない建物だが、ここには何らかの理由で自宅で作業するのを望まない人のための部屋がある。

それぞれの支部は、それぞれの地域に特有な仕事を受け持っている。ある地域では柳の枝でかごや電燈の笠や椅子を編む仕事を、別の地域では食器類の絵付け、あるいはパンかごや手箱、木製のチェスの駒やスプーンを作る仕事を、さらに別の地域ではウサギの毛でスカーフや帽子、靴下を編む仕事を、といった具合だ。たとえばオーリチ地区では、昔から麦わら細工が盛んで、細い麦わらで手箱を、太い麦わらで敷物が編まれている。

在宅作業は少なからぬ社会的意義を持っている。何よりもまず、農村からの労働力の流出を抑える上で役立っている。以前、夫だけが働いていた家族は、夫婦が職を得るために、かなり頻繁に転居しな



◀毎年、キーロフ市では夏に市が開かれるが、ここでも在宅作業者たちの手になるいろいろな日用品が売りに出される。



在宅作業者たちが作った民芸品

ければならなかった。〝ウメーレツ〟の支部ができたことによって、働くことを希望している女性に仕事が保障された。家族は仕事を求めて転居する必要がなくなった。

＊　＊　＊

〝ウメーレツ〟生産合同も所属するキーロフ州人民代議員ソビエト執行委員会の玩具・工芸産業局の管轄下では二二四二人の在宅作業者が働いている。たとえば、〝3月8日〟（国際婦人デー）記念透かし縫い・レース編み工場では従業員一四〇〇人のうち三〇〇人が、工芸品工場〝イデアル〟では七八〇人のうち一八〇人が、文化用品を作っている〝クリトトバールイ〟工場では八〇〇人のうち八〇人が、おもちゃを作っている〝ビャトカ〟生産合同では四〇〇〇人のうち二一九人が在宅作業者である。

在宅作業者の労働生産性は親工場で働いている従業員ほど高くない。それにもかかわらず、採算はとれる。なぜなら、企業は生産施設を拡張せずに生産高を確実に増やすことができるからである。

〝在宅〟でも有給休暇

レーナ・グラズイリナは話をつづける――「私は〝ウメーレツ〟生産合同の人事課へ行って、まず、何の特技もないことを告げました。それでも構わない、専門家が指導するから、と言うのです。それに、あなたにはどんな才能が隠れているか分からないじゃありませんかって」

「どんな風に教えてもらったのですか？　その費用は？」と私は質問した。

「在宅作業者を募集している企業はすべて、技能を無料で教えてくれます。在宅作業者は、仕事のむずかしさに応じて、2カ月から3カ月、直接〝ウメーレツ〟で専門家に習うのです。ある者はその途中で職種を変更しますが、それでも構わないことになっています。

また、企業の指導部はふつう、労働組合委員会の同意を得て出来高賃金を決めることになっている、とも言われました。経験のある在宅作業者の中には常勤の従業員よりもたくさん賃金をもらっている人もいます。会社は設備や道具を無料で貸してくれます。在宅作業者が仕事のために電気器具を使えば、企業は電気代も払ってくれます。

在宅作業者には年に15日の有給休暇があり、休息の家やサナトリウムの利用券、子どものためにはピオネール・キャンプの利用券も企業が無料、あるいは原価の30%で支給します。つまり、在宅作業者には親会社で働く従業員とまったく同じ権利や特典が与えられているのです。

私は麦わら細工による手箱の飾りを作ることにしました。私たちの職場には模様のいくつかのサンプルが与えられていますが、独自のデザインを提案することもできます。とは言っても、そのまえにデザイナーと相談しなければいけませんが。

うまく行かないときは職場へ行って、アレクサンドラ・クロトワに相談します。とてもすばらしい先生です。彼女はいつでも私のために時間を割いて、何でも教えてくれます。

間もなく、この仕事を始めてから満1年になります。あのときから私の生活は根本的に変わりました。以前には家事労働が単調に思われたのですが、いまでは逆に、同じことをやるにも気分がちがうのです。多分そのせいでしょうか、仕事も速く、以前よりよくできるようになりました。

朝、私はイリヤと一緒にリョーシャとマーシャを幼稚園まで送って行き、散歩がてら買い物をして、それからイリヤを寝かしつけて、仕事に取りかかります。もちろん家事もやります。夫は1日おきに仕事に出ますので、非番のときはできるだけ仕事をしないで、夫と一緒にいるよう努力します。私たちはしばしば郊外へ出かけます。庭つきの小さな別荘を持っているんです。夕食のあとは各人が好きなことをやります。子どもたちは一緒になって遊びますが、ときには私の仕事を手伝ってくれます。仕事に費やすのは平均して1日に4時間。仕事のためにほかのことを犠牲にするようなことはありません。

私は以前の職業を忘れたわけではありません。家庭のお祝いの日には必ずコンサートを開きますし、ふだんの夜もみんなで一緒に歌ったり、音楽を聴いたりします。でも、いまはちょっと忙しいんです。市の民芸祭に参加しようと思って。民芸祭では私たちの企業の在宅作業者が作った装飾品や工芸品が展示されるんですから」

数字・事実・法令

ソビエト社会と女性

女性の社会的進出

ソ連の女性の数は一億四五〇〇万人で、全人口の53・2%（一九八三年半ば現在）。

＊　＊　＊

「ソ連では、男女は平等の権利を持つ。これらの権利の実現は、一般教育と職業教育、労働、労働にたいする報酬、職場での昇進、社会・政治活動および文化活動において男子と平等の可能性を女子に与えることにより、また、女子の労働と健康の保護にかんする特別の措置により、……年少の子どもを持つ女子の労働時間の漸次的縮小も含めた母子の法的保護と物質的精神的支持によって保障される」（ソ連憲法第三五条より）

＊　＊　＊

高等教育、中等専門教育修了専門家の総数中の女性の割合。

一九二八年	29%
一九四一年	36%
一九六〇年	59%
一九七〇年	59%
一九八二年	59%

＊　＊　＊

国民経済における女子就業者一〇〇〇人当たりの高等教育、中等教育修了者数（比較のため男子一〇〇〇人当たりの数字も示す）。

一九三九年	女	一〇四
	男	一三六
一九五九年	女	四三一
	男	四三四
一九七〇年	女	六五一
	男	六五四
一九八三年	女	八五二
	男	八六三

＊　＊　＊

国民経済における女子就業者総数中の高等教育、中等専門教育修了専門家の割合。

一九四〇年	6・5%
一九五〇年	16・9%
一九六〇年	17・7%
一九七〇年	21・6%
一九八〇年	29・5%

＊　＊　＊

大学生のうちの女子の割合（%）。

	65／66学年度	75／76学年度	82／83学年度
女子学生全体	44	50	52
うち工科大学	31	40	42
農業大学	26	33	34
経済大学と法科大学	54	62	69
医科大学と体育大学	54	56	58
人文系、美術、教育大学	66	68	70

＊　＊　＊

女性の代議員数。

	女性代議員総数	代議員総数に占める割合(%)
ソ連最高会議（79年選出）	四八七	32・5
連邦構成共和国最高会議（80年選出）	二四一七	35・9
地方、州、自治管区などの地方の人民代議員ソビエト（82年選出）	一一四万五五九一	50・1

＊　＊　＊

ソ連共産党の党員総数に占める女性党員の割合。

一九七一年	22・2%
一九七六年	24・3%
一九八二年	27・0%

＊　＊　＊

労働組合の女性役員数。

	女性役員総数	役員総数に占める割合(%)
全ソ労評、中央監査委員会	二一一	35・8
各産別労組中央委員会、同監査委員会	二三三二	43・5
各産別労組区・市委員会、同監査委員会	四二万三二二五	61・5
企業、機関、組織の労組委員会、同監査委員会	四六二万三八四八	65・4

＊　＊　＊

国家予算中の母親への手当金給付額の伸び（一九四〇年を100とした指数）。

一九四〇年	一〇〇・〇
一九五〇年	三〇二・八
一九六〇年	五六一・四
一九七〇年	七二六・八

一九七九年　一四五四・二

＊　＊　＊

国家予算中の子供向けサービス費の伸び率（児童ホーム、幼稚園、保育所、夏季キャンプ郊外活動施設を対象としたもので、基本投資を除く。一九四〇年を100とした指数）。

一九四〇年　一〇〇・〇
一九五〇年　三〇三・三
一九六〇年　四〇七・八
一九七〇年　一〇一六・一
一九七九年　一六三三・八

＊　＊　＊

女性に対する治療・予防体制の発展。

	40年	50年	60年	70年	82年
妊婦用ベッド数（単位千）	147	143	213	224	237
婦人相談所、小児科の病院と診療所（単位千）	8.6	11.3	16.4	21.0	25.8

婚姻と母性

「結婚と家族に関するソビエト法令の任務は……男女の自発的な結婚による結びつきと、家族の全構成員の、物質的打算から自由な、相互の愛情、友好、尊敬に基づく家族関係の建設である…」（婚姻と家族に関するソ連と連邦構成共和国の基本法より）

＊　＊　＊

「ソ連における母性は国家によって保護され、奨励される。

母と子の健康保護は、婦人相談所、産院、妊婦と子を持つ母親のためのサナトリウムと休息の家、保育所、幼稚園、その他の児童施設の広範なネットワークを組織し、社会保険による手当金の給付を伴う妊娠・出産休暇を女性に与え、授乳のための休憩時間を設け、出産手当、病気の子供の看護期間中の手当を所定の手続きに従って給付し、重作業や健康に有害な作業を行う生産場での婦人労働の使用を禁止し、妊婦を平均賃金を確保した、より軽易な仕事に移し、労働と生活の条件を改善・健全化し、家族に国家的、社会的援助を与えることによって保障される……

女性の健康保護のために、女性に自分で母性問題を解決する権利が与えられる……

……保健施設はすべての女性に、妊娠中の適格な医療観察、出産時の病院医療、母と新生児の治療・予防措置を保障する」（保健基本法より）

母親の労働

「重労働、有害な労働条件をともなう作業、特定の地下作業（非筋肉労働、すなわち衛生・福利厚生関係の仕事）を除く地下作業では、女子労働の使用が禁止される。

……女子を深夜作業につかせてはならない。ただし、女子の深夜作業が特に必要な特定の国民経済部門においては、ただ臨時の措置としてのみ許可される。

妊娠中の女性、授乳中の母親、生後1歳未満の幼児を持つ女性を深夜作業、時間外労働につかせること、休日に作業につかせること、出張させることは許されない。

1歳以上8歳未満の児童を持つ女性を、その同意をえないで時間外労働につかせること、または出張させることはできない。

……妊娠中の女性は、医師の診断書に従って妊娠期間中以前の仕事のときの平均賃金を保持したまま、他のより軽易な仕事に配置転換される。

……妊娠や授乳を理由として女性の採用を拒否したり、賃金を下げたりしてはならない。

妊娠中の女性、授乳中の母親、生後1歳未満の幼児を持つ女性を管理部の発意で解雇することは許されない。ただし、施設・企業・団体が完全に閉鎖される場合はこの限りでない。そのときには、必ず次の就職をあっせんしたうえで解雇することが許される」

（労働基本法より）

＊　＊　＊

「……8歳未満の子供を持つ働く女性は、学習期間中月平均賃金を保持されたまま、仕事を休んで再教育を受け、資格を向上できる」（一九七九年6月21日付けソ連共産党中央委員会、ソ連閣僚会議の決定より）

追加の特典

「労働者と職員は老齢年金を受ける権利を持つ。男子は60歳に達し、在職年数25年以上、女子は55歳に達し、在職年数20年以上で、その権利を持つ。

……5人以上の子供を生み、8歳になるまで育てた女子は、50歳に達し、在職年数15年以上で、特恵条件で老齢年金を受ける権利を持つ」（国家年金支給手続きと支払いに関する規定より）

＊　＊　＊

「在職年数1年以上の働く母親、仕事を休んで学んでいる女性のために、子供が満1歳に達するまで育児のための一部有給休暇を導入する（産前産後一二日間の完全有給休暇に追加して—編集部）。

……働く女性に、子供が1歳半に達するまで、勤続年数と専門職の在職期間を確保したまま、追加の無給育児休暇を受ける権利を与える……

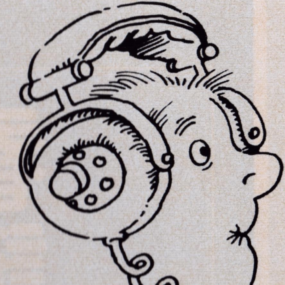
12歳未満の子供を2人以上持つ働く女性には以下の特典を与える。

—３日間の追加の有給休暇……

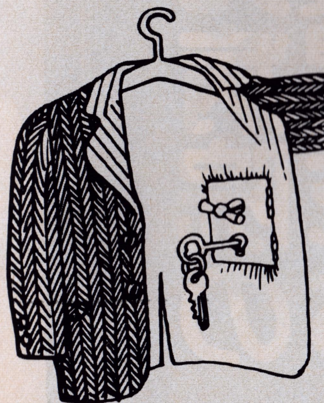
—夏季または働く女性に好都合な他の時期に年次休暇を受ける最優先権

—２週間以内の追加の無給育児休暇を受ける権利」（一九八一年1月22日付けのソ連共産党中央委員会、ソ連閣僚会議の決定より）

ユーモア









ふたりの男が夜遅くまでカフェーにねばっていた。ひとりが連れに聞く —— 「家へ帰ったら、奥さんに何て言うんだい？」
「たった一言“ただいま”だけさ。あとはみんな、女房が話してくれるよ」

◇　◇

洋服屋が背広の寸法をとりながらたずねる。
「お客さんは独身ですか、結婚していますか？」
「結婚していますよ」　「それでは書いておかなければ —— “上着の裏に隠しポケットを必ず付ける”」

◇　◇

「ぼうや、どうして手にコヨリなんかしているの？」　「これはママが、手紙をポストに入れ忘れないようにって、やってくれたんだよ」
「それで手紙はちゃんと入れたの？」　「ううん、ママがぼくに手紙を渡すのを忘れちゃったんだもん」

◇　◇

「喜んで！　夫がとうとうタバコをやめたのよ」
「つまり、お宅のご主人にもまだ意志の力があったっていうわけね」　「夫にではなくって、私の方にあったっていうことよ」

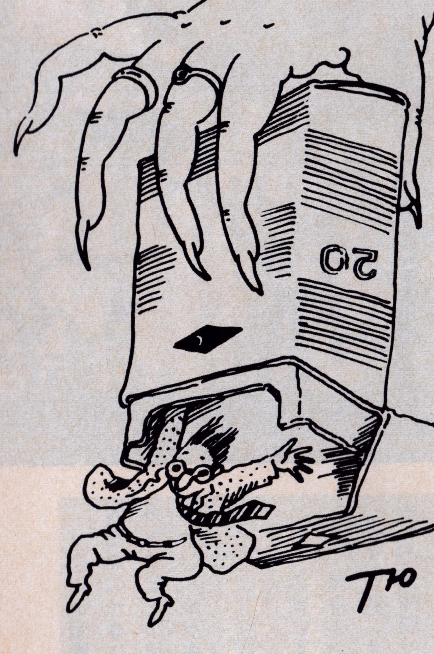
◇　◇

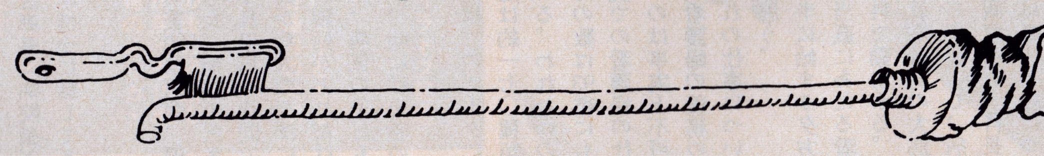
「ぼうや、妹がほしいと思わない？」　「ほしくないよ。それにパパだってきっと反対だよ。だって、ぼくがこのまえ子猫を拾ってきた時、あんなに怒ったもん」

◇　◇

「お母さん、チューブの中にどれくらい練り歯みがきが入っていると思う？」　「知らないわ」
「ぼく知ってるよ。ソファの所から玄関までだよ」







小児病院の看護婦たち

カメラ　V・フェドレンコ

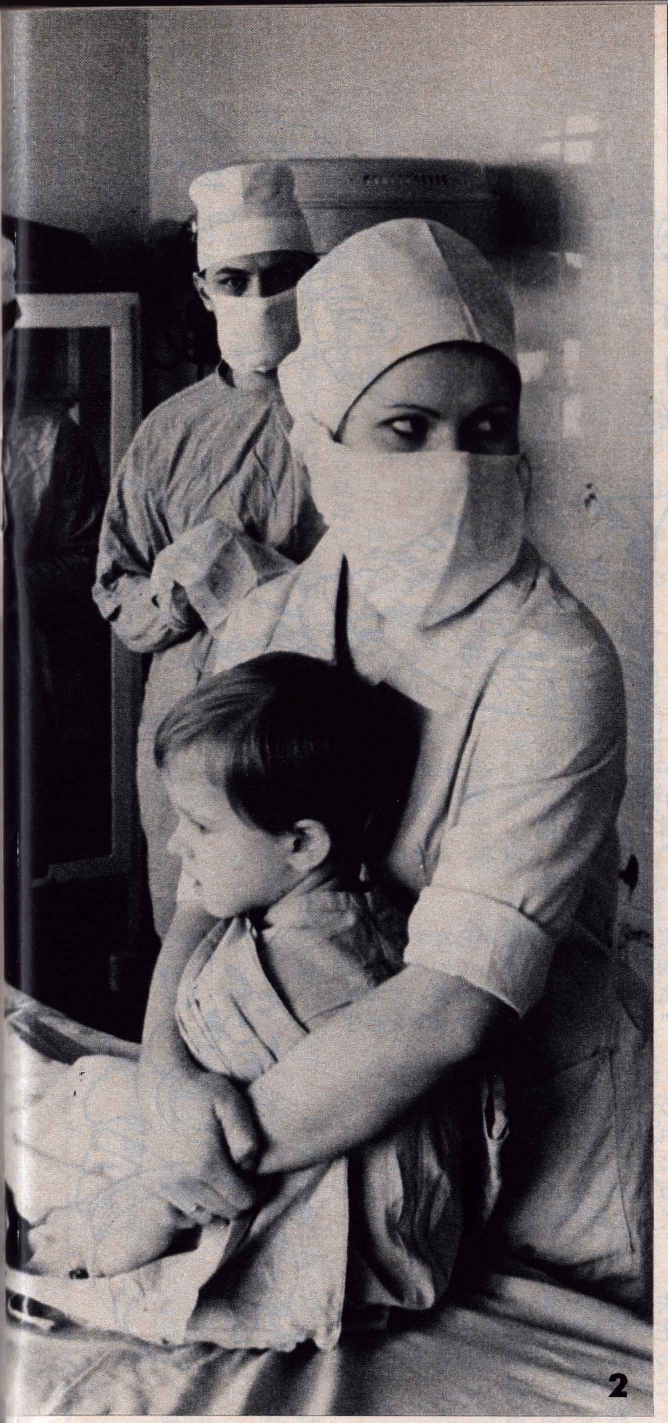
ソ連には看護婦が約三〇〇万人いる。看護婦の仕事についてモスクワのフィラトフ記念小児病院医師長（病院長）のヤン・ルツキー医学博士に話してもらった。

いつの世にも女性の美徳は忍耐、優しさ、献身とされてきた。病院で医者が病人と過ごすのは1日平均1時間で、残りの23時間は看護婦が病人のそばにいる。医師の指示を看護婦がどれだけ上手にやりおおせるか、病気の子どもをいかに看病するかが、時には患者の生命を左右する。

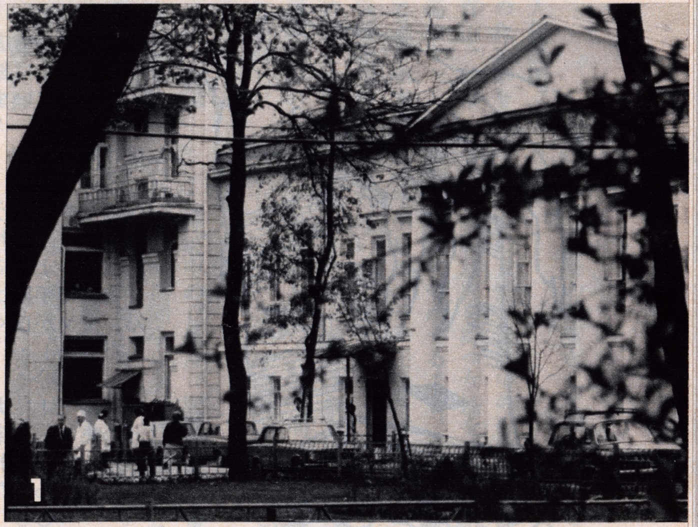
ＷＨＯ（世界保健機構）のデータによれば、現在の看護婦は約一七〇種類もの仕事をこなしている。われわれの病院で数えてみたらその数は93種にものぼった。だから病院での看護婦の仕事の全容をお話しするのは事実上不可能だ。それで私は一般看護婦の義務の中に入っているあれこれの仕事についてだけお話ししようと思う。

昼間の勤務は朝8時半に始まり夕方4時半に終わる。夜の当直にあたる看護婦は朝8時半まで各科で勤務する。

病棟づきの看護婦は就業時間の大部分を病人のベッドの傍らで過ごし、病人の世話をし、病状を観察する。科長と担当医の回診の時には必ず一緒について回る。前もって看護婦は病歴を用意し、回診中は医者の治療上および診



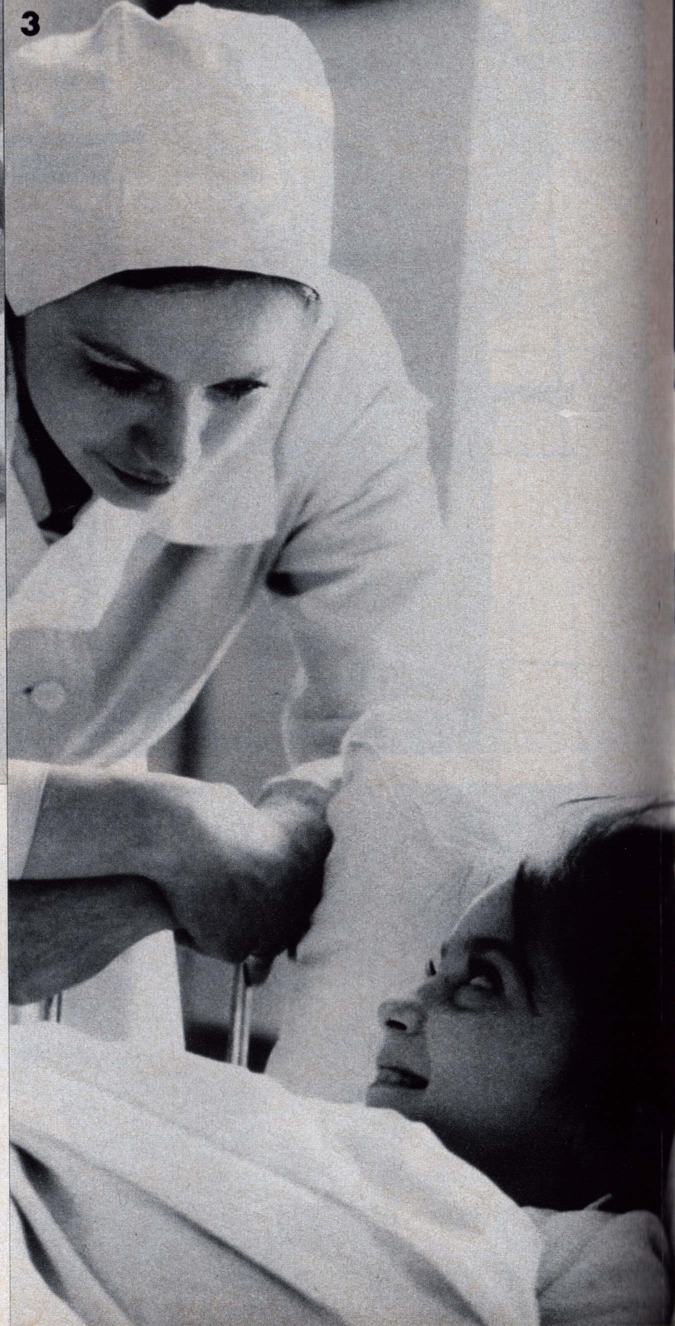
2



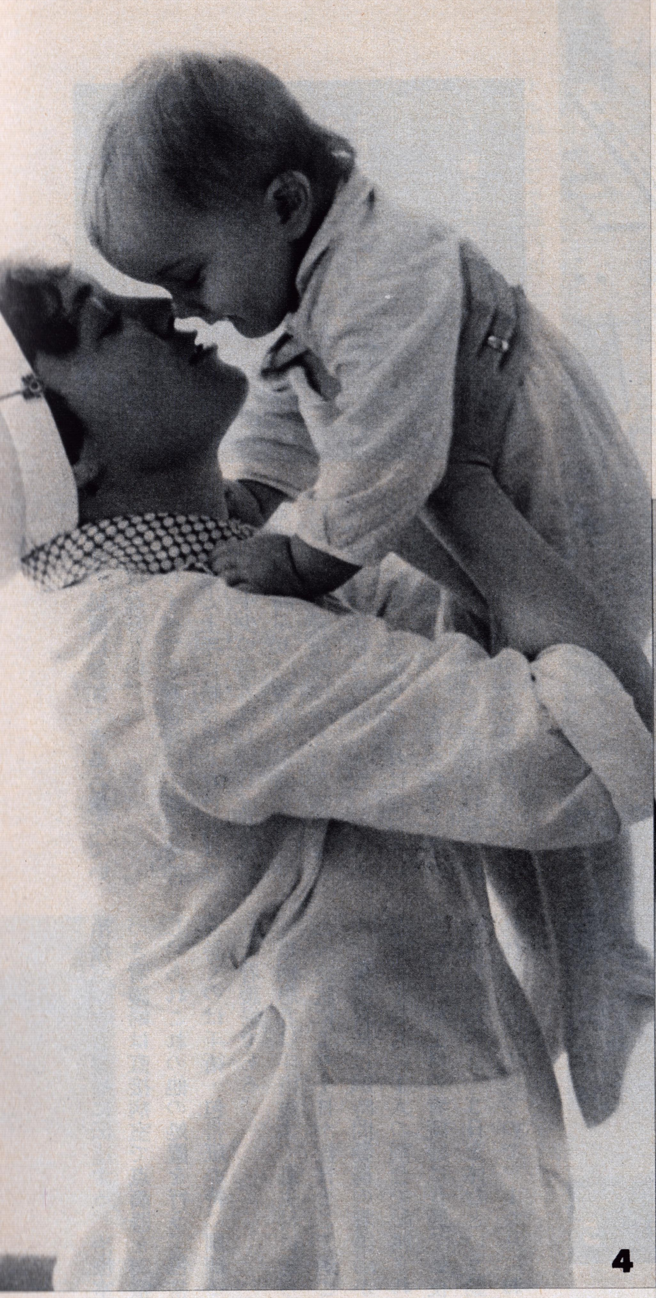
1

断上の指示を克明に書きとめておく。看護婦は医者が患者と交わした会話の内容を知っていなければならない。患者に何か問われた時、医者が患者に話したこと、助言したことと矛盾しない答えをしなければならないからだ。

そのほか、病棟づき看護婦は朝夕患者の体温を計り、適時に患者を各種検査に送り、検査の結果を診療カードに書き込んでおかねばならないし、患者が正しく食事をとっているかどうか、顔色はどうか、脈拍はどうか、など患者の様子を細かく観察し、呼吸時の痛み、咳、たんに注意を払う。看護婦はいついかなる時でも気管開口術、輸血、



3



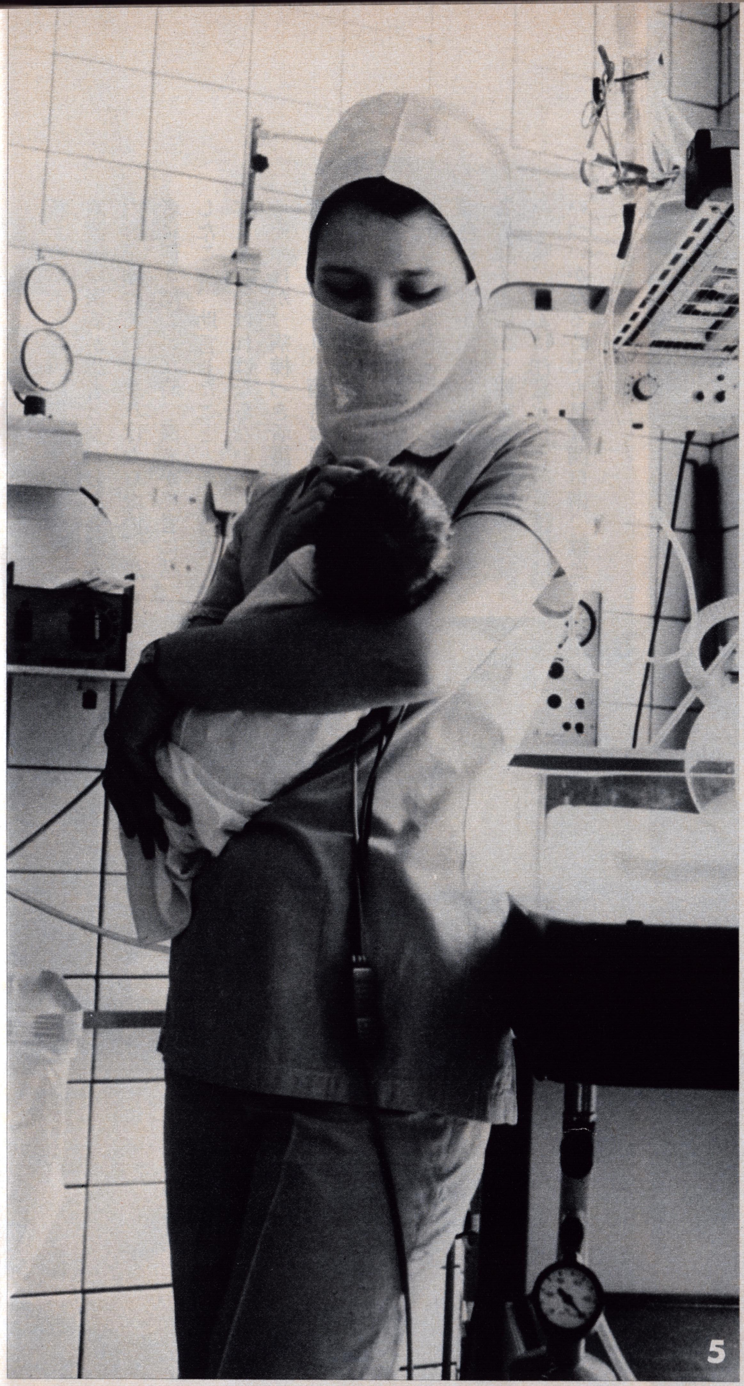
4

1　モスクワのフィラトフ記念小児病院

2　手術前、不安がる子どもを落ちつかせるのも看護婦の大切な仕事。

3　大変な腎手術の後の経過も良好。やっと笑顔が戻った10歳のカーチャと看護婦のオリガ・ソボレフスカヤ。

4　赤ちゃん、元気になってね！　丈夫な子になるのよ！





5　看護婦のマーシャ・カリダ。抱いているのは生後1週間にもならない赤ちゃん。

6　元気になって退院するかわいい患者を送り出す看護婦のリュドミラ・チカナ。

7　蘇生科の看護婦室

その他の処置に参加できる心構えでいなければならない。

これらすべてを看護婦は不断の精神療法作業と上手に結合させなければならない。年少の患者はしばしば非常に気持ちが高ぶり、警戒心が強くなっているので、看護婦は子どもを落ち着かせ、検査や手術は危険じゃないのだと子どもに思い込ませなければならない。

科の医療スタッフ全員が集まる朝の会議のあと、病棟づき看護婦は薬を配り、注射の指示がある患者のリストを治療室づき看護婦に伝達する。治療室づき看護婦は直接病室で点滴器を調整し、あれこれの他の処置を行う。包帯を巻くのは手術・包帯班の特に訓練された看護婦である。

重病患者は手術後すぐ蘇生科に送られ、症状により1日か数日そこで過ごす。蘇生科には24時間勤務の看護婦が患者2—3人に1人の割合で配属されている。蘇生科の看護婦は普通1昼夜勤務し、次の2—3日を休むという勤務体制をとっているので、1カ月におよそ7—10回当直をすることになる。夜間勤務の看護婦の場合もほぼこれと同じ体制だ。

ソ連で看護婦を養成している機関は看護学校だが、看護学校での教育も他の中等専門学校や大学と同じように無料である。期間は1年から3年で、それは入学時までの学歴によって異なる。われわれの病院の看護婦600人のうち大多数は看護学校卒業後資格向上課程を修了しており、60人は医科大学夜間部で学んでいるし、それと同数の看護婦が病院で行われるここの教授たちの講義を聴講している。

われわれの病院には救急処置を要する特別な病人が運び込まれる。外傷や火傷、集中治療やあるいは救急外科手術が必要な急性腎不全や他の疾患を持つ患者である。病院には30の科があり、重傷病患者に緊急の治療を行うことが出来る。

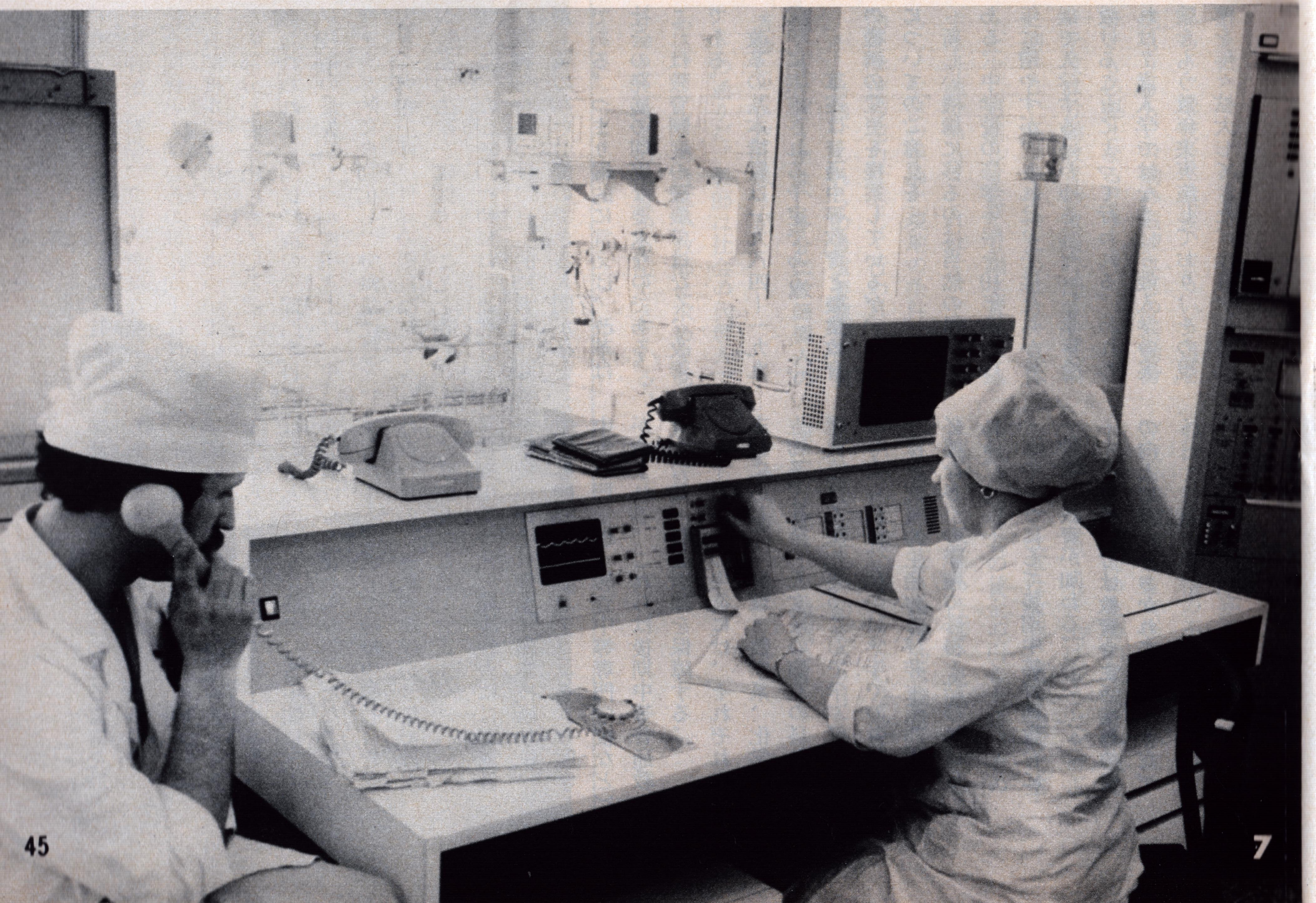
看護婦たちは学ぶだけでなく、教えもする。新生児の手術の時、もし外科の看護婦ヤナ・グルシコワが手術チームに加わっている場合は必ず、看護学校の実習生も手術に立ち会う。ヤナ・グルシコワから学ぶべきことがたくさんあるからだ。

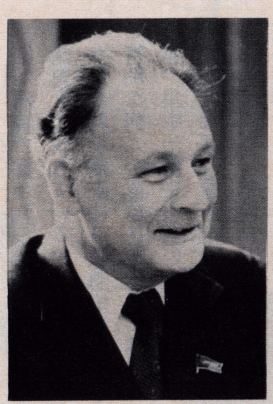
ヤナ・グルシコワは23歳。5年間ここで働いている。一九八三年度外科看護婦コンクール（毎年この種のコンクールがここで専門別に行われている）でヤナ・グルシコワが第1位になった。審査団は彼女の作業の速さ、正確さ、医療器機についての完全な知識、外科医との適確な連係作業を評価した。

小児病院の看護婦にとっては患者の性格を理解することも少なからず大切なことである。これは自分の災いについて話すことの出来ない赤ちゃんの場合は特に大切だ。マーシャ・カリダ看護婦が生後1週間にも満たない赤ちゃんを抱いている写真がある。生まれたばかりの赤ちゃんに両親が名前をつけてやるゆとりもなかった。約20昼夜、マーシャは医者とともにこの赤ちゃんの生命を救うために闘った。今この男の子は健康になり、イワンと名づけられた。同じ時に治療を受けていた4人の女の子は看護婦のマーシャに敬意を表して4人ともマーシャという名をもらった。

大人の方のマーシャは病院で一番〝若い〟科——新生児蘇生センターで働いている。この科は新設されてから3年しかたっていないが、この間何百人もの赤ちゃんが生命を救われた。産院から直接子どもも専門の救急車でここに運ばれて来た新生児はたいてい生後10日もたっておらず、しばしば生後何時間と時間で数えられる。

現代の医療設備のおかげでわれわれは、小児の体に応じた無菌隔離、高圧酸素室での酸素飽和、人工腎臓など最新の治療法を駆使することが出来る。慢性疾患とか大手術の後など、時に長期療養が必要な子どももいる。こういう子どもに対しては看護婦であるだけでなく、教育者にもならなければならないし、快活で、善良で同情心の厚い心根を持ち、楽天的に、忍耐づよく接しなくてはならない。看護婦の最良の特性はすぐに子どもの心に伝わり、それは間違いなく子どもたちを快方に向かわせるのだから。





社会の発展に応じた教育制度の改善

——学校改革についてソ連教育相に聞く

ことしの1月24日、ソ連でソ連共産党中央委員会の「普通教育学校・職業学校改革の基本方向」案が発表された。この草案は各家庭の利益にかかわる大きな社会的・政治的意義をもつので、草案を発表して全国民に討議してもらうことになった。さまざまな意見、気付いたこと、提案は新聞雑誌、ラジオ、テレビで大きく取り上げられ、検討されたあと、権威ある専門家委員会で審議されよう。全面的審議のあと、修正、追加された草案はソ連最高会議に提出され、討議、承認されて法的効力をもつことになる。

こんどの改革は学校（スクール）の活動の重大な改組を予定しているが、数世代にわたる教育者の努力や教育学によって達成されたすべての貴重なもの、時の検証を経たすべてのものは大事に守られ、積極的に活用すべきである。

こんどの改革の若干の点についてミハイル・プロコフィエフ・ソ連教育相（写真）にコメントしてもらった（聞き手　ワレリー・ブルート・ノーボチス通信記者）。

——学校の改組が必要になった理由は何か？

いま学校で学んでいる少年少女は、われわれの未来の課題を解決することになる。現在すでに、ソビエト社会、その経済、科学、文化の急激な発展や社会関係と人間自体の進歩向上に伴い、教育制度が実生活の要求についていけない部分が若干出てきている。

われわれは、国民経済の全部門を科学技術の最先端レベルに引き上げ、生産を大々的に自動化し、労働生産性を大きく引き上げ、世界の優良品レベルの製品の生産を確保することを計画している。だがそのためには、当然、高い教養を身につけ、自主的に考え、しかも質の高い労働のできる人間が必要である。つまり端的に言えば、改革は社会の発展の切実な要求なのである。これは教育制度の破壊ではなく、改善である。

改革の基本措置は一九八四―一九九〇年に実施される予定である。

——草案は普通中等教育と職業教育の機構の変更を提案しているが、これについてのご意見を……

新しい機構に移るのは当然の帰結である。中学校の修学年限を10年から11年に増やすが、これは、子供たちが6歳で入学するいわゆる〃ゼロ〃学年を設けることによって行われる。われわれは7歳入学ではなく、6歳入学の実験をもう数年来実施しており、その規模を年々拡大してきた。今日、この実験活動は、ソ連全土にわたる実施を取りあげてもよい段階にきている。

その結果、初等教育は3年間から4年間になる。生徒が前期中等教育（5年生から9年生まで）を修了する年齢はいまと同じく15歳で、5年間に学ぶ知識量は今と変わらない。たださまざまなルートを通じて後期中等教育を受けるための基礎教育課程が8年ではなく、9年となる。

後期中等普通・職業教育には普通教育学校の10―11年生、職業技術学校、中等専門教育機関（テフニクム、医学中等専門学校、教育中等専門学校など）が含まれる。これらは後期中等普通教育と労働・職業訓練を保障する。

8―11学年の生徒には、それぞれの志望に応じて、物理・数学系、化学・生物系、社会・人文系の個々の科目を選択授業で深く突っこんで学ぶ可能性が与えられる。10―11学年での労働教育は、物質的生産および非生産部門に必要な多くの職種の修得と結びつけられる。

このようにして後期中等普通教育に一般職業教育が加わる。

——改革案では教育や生活指導の質の向上に重点がおかれているようだが……

この問題は永遠だ。発展する制度にはたえず更新と近代化が要求される。そして社会は、それぞれの時代に、青少年世代の知識水準に対する新しい要求を出す。

現在われわれは、教育内容そのものを改めて明確にし、現行のカリキュラムや教科書を改善し、副次的な、あるいは必要以上に複雑な教材を取り除き、最新の成果を補充しなければならない。教育課程に最新のコンピューター技術を取り入れることも含めて、教授法や教育手段の近代化も必要である。講義、セミナー、実習などの大学で行われている方式が、ますます広く中学校に導入される。芸術教育、情操教育、体育が大幅に改善される。生徒の思想教育、道徳教育、法律教育が特に重視される。

——草案の大半の項目は大なり小なり生徒の労働教育の問題に触れている。この草案には、学校は生徒が大学で勉学を続けるために必要な高い知識水準を保障すると同時に、国民経済での社会的に有用な労働に進路をとるように生徒を指導し、このための訓練をしなければならない、と述べられているが、この点についてご意見は？

私が強調したいのは、労働教育が今や各教科にまたがる問題に変わってきていることだ。またこれは、人格形成の最も重要な要因とみなすべきである。学校で若干の職業訓練を受けた若い人々が社会的に有用な労働に直接加わることは、すべての点できわめて有益であろう。学校を卒業後、どういう道を進もうとも、労働の鍛練はどの活動分野でも必要となるだろう。

学校は労働教育の授業時間数を大幅に増やし、高学年生のためには、夏休みを少し短縮して毎年労働実習を実施する計画である。これはすべて、もちろん、生徒の年齢、現地の条件、具体的な学校の能力に応じて行われよう。

——当然、これらの最重要課題が実現するかどうかは、多分に教師個人の活動しだいだと思うが……

その通りだ。教師は社会の代理人である。こんどの改革が教師に求めており、また改革の本質から出てきている、新しい諸要求（私がここで言っているのは、教師の資格の不断の向上、自己完成と独習のことである）のほかに、われわれは教師の社会的地位と権威をできる限り高く引き上げることをめざしている。改革は教師、保育教師、生産教育指導者の賃金の引き上げ、その社会・生活条件の改善を見込んでいる。また教師の仕事を精神的に刺激する新しい方法も探求することになっており、たとえば新学年の始まる9月1日を全国民的な祝日——知識の日とすることなどである。

催し物のお知らせ

☆スビャトスラフ・リヒテル・ピアノ演奏会

リヒテル氏の健康上の理由で3月からの公演日程が変更になりました。

横浜・神奈川県民ホール（2月19日）、東京・昭和女子大学人見記念講堂（2月21日）、高崎・群馬音楽センター（2月24日）、昭和女子大学人見記念講堂（2月28日）、松戸・聖徳学園川並記念講堂（3月1日）、昭和女子大学人見記念講堂（3月4日）、大阪・ザ・シンフォニーホール（3月7日）、名古屋市民会館（3月8日）、熊本・熊本県立劇場（3月14日）、福岡市民会館（3月16日）、宮崎市民会館（3月21日）、富山市公会堂（3月25日）。

☆ニキータ・ミハルコフ監督の新作映画『ヴァーリャ！　愛の素顔』上映

1983年モスクワ国際映画祭の国際映画批評家大賞受賞作品。本誌2号で紹介のミハルコフ監督の最新作（原題『だれも見ていないが……』）。

2月18日（予定）から東京・六本木のシネ・ヴィヴァン・六本木（電話03・403・6061）で上映。

☆エミール・ギレリス・ピアノリサイタル

大阪・フェスティバルホール（3月15日）、横浜・神奈川県民ホール（3月18日）、東京文化会館（3月20日）

▽お問い合わせはジャパン・アーツ（03・235・1661）へ。

☆国立モスクワ中央人形劇場公演

東京・朝日生命ホール（3月15日―24日）、福岡郵便貯金ホール（4月13日―15日）、京都府立勤労会館（4月20日―22日）、神戸文化ホール（4月24、25日）、大阪国立文楽劇場（4月27日―30日）、東京・ヤクルトホール（5月2日―6日）、東京・朝日生命ホール（5月8日―12日）

▽料金＝一般席大人　前売3,000円　当日3,500円
子供　前売2,000円　当日2,500円
指定席券（大人・子供共通）800円
団体割引あり

▽お問い合わせは、ＣＢＡサービス（電話03・572・6331）へ。

教育改革――私はこう思う

――来日したノボシビルスク物理・数学特別中学校長にインタビュー



さる1月20日から28日までラウフ・ダダバエフ・タジク共和国教育相を団長とするソ連教育省代表団が民間交流で訪日した。デウーリン本誌記者は団員の一人、ノボシビルスク物理・数学特別中学校（全寮制）のアレクセイ・ボガチョフ校長（写真）に、ソ連の教育制度の改革の狙いや非行の問題、特別学校などについて聞いた。

――いまソ連では1月3日に公表された学校改革案の審議が進められているが、この改革の狙いは何か？

ソ連の学校の発達は、わが社会全体の前進運動としっかり結びついているので、学校改革の諸段階は、ソ連の歴史的発展の各段階の全国的課題の遂行を反映していると言える。たとえば一九一七年の10月革命直後のわれわれの課題は文盲を絶滅することであり、その後普通8年制教育、さらにそのあと普通中等10年制教育の課題を着実に解決した。ここでは細部に触れず、これらの課題が解決されたときの内外条件は、決してよいとはいえなかったことを指摘しておくにとどめたい。しかしそんな条件にもかかわらず、われわれはこれらの課題を解決した。

とにかく時は動いており、ソ連における発達した社会主義社会の建設に伴って、社会の成員の普通、職業教育に対する要求は著しく高まった。これは改革の多くの理由の中の決定的な理由であろう。

そのほかに、たえず情報量が増えていることも、理由の一つに挙げておきたい。そこで、生徒は、今までよりももっと厳しい尺度で情報を選択しなければならないし、情報を受け取り、自分のものにするために必要な時間を増やす必要が出てきている。

教育制度改革案によると、学校の教育期間は1年分増えて、11年になる。そのために、現在の7歳入学が一九八六年から6歳入学になり、1―4学年が小学校、5―9学年が前期中学校になる。その後生徒の選択により普通教育学校の10―11学年に進むか、テフニクム（ソ連の中等専門学校）で中等教育修了の専門家を養成する）か、職業技術学校（中等教育修了の高い技能資格を持つ労働者を養成する）に入る。

これら三つのいずれを選ぶにしても、生徒は中等教育を受けるわけだが、今までと違い、三つの進路が取り入れられたことによって、生徒の卒業後の職業選択の問題に前よりも柔軟に対処できるようになるし、生徒の時間も国の時間も節約できる。

改革案は次のソ連最高会議で審議され、補正を加えた後法律となり、それに基づいて一九八六―一九九〇年中に新しい教育条件に移行することになる。

――最近日本では校内暴力が増える傾向にあり、社会の注目を浴びている。本誌の読者は、ソ連にもこうした現象があるかどうか、あるとすればソ連の教師はそれにどう対処しているか、たずねているが……

青少年のエネルギーは、水量が多くて流れの速い川のようなもので、そのエネルギーをどう生かすかは、教育者の努力もさることながら、家庭の事情とか、生徒の精神状態とか、友達や目上の人との相互関係などといった数多くの要因に負うところが大きい。こうした要因を頭において、それを積極的に生かしてこそはじめて、青少年のエネルギーをけだかい目的の達成にフルに生かすことができる。そうしないと、このエネルギーは思いがけない形（望ましくない形をとることがままある）で爆発してしまい、防ぎようがない。

私の学校を例にとって言えることは、エネルギーと関心のはけ口を生徒に確保するために、われわれが最大の努力を払っているということだけである。沢山のスポーツ部や舞踊スタジオ、さまざまな趣味のサークルや社会奉仕活動があって、その方が忙しく、反社会的行動をやる余裕もないし、馬力もない。道徳教育（選択課目）の時間にわれわれは、賢明で、善良で、喜ばしいものを生徒に教えるよう、たえず努めている。われわれにももちろん過ちや誤算はあるが、ソ連に、子供の暴力の問題があるとは思わない。

――ソ連の学校の試験制度について。

原則としてわれわれは試験の数をできるだけ減らそうと努めている。いまソ連の学校では8学年のあと10学年のあとの2回試験をやっている。改革後も試験の回数は増えないはずだが、9学年が終わったときに数学、物理、ロシア語の試験が、11学年が終わる卒業のときに6科目（数学、物理、化学、歴史、ロシア語、外国語）の試験が行われよう。学業の成績を評価する手段はいまのままで十分であり、その手段のうちで肝心なのは生徒を点検、監督し、援助する教師の日常活動であるから、今以上に試験の回数を増やす必要はないと思う。

――あなたがすでに13年余りも校長をしている学校について、もっと詳しく話してもらえないか。

うちの学校はソ連科学アカデミー・シベリア部付属の物理・数学特別学校で、2年制である。物理・数学の才能がとくに秀でた生徒が、うちの学校の9―10学年で勉強を続ける。五五〇人の生徒が21のクラス（10学年が14クラス、9学年が7クラス）に分かれている。ノボシビルスク国立大学で学び、卒業後ソ連科学アカデミー・シベリア部で働く要員を養成するという学校の特殊性と使命を考慮に入れて、われわれは学校の講師スタッフを決めた。学校の講師は博士が3名、助教授と博士候補が32名である。

ロシア語通訳の問題をめぐって

――第5回シンポジウム開催

盛会だった第5回シンポジウムの会場



1月28日、東京世田谷区経堂の日ソ学院（後援）でロシア語通訳問題シンポジウムが開かれた。ロシア語通訳協会主催の同シンポジウムは、一九八〇年以来毎年1月末に定期的に開催されており、今回で5回目。現役のロシア語通訳・翻訳者を中心に、ロシア語関係者約90名が一同に会し、ゲスト・スピーカー他2名の報告者の報告を中心に活発な討論が行われた。

協会顧問の久野　公さんの主催者あいさつの後、ゲストとして招かれた草柳益和さん（日本コンベンションサービス取締役・通訳部長）は「理想的通訳者像」と題し、顧客の依頼に応じて通訳を派遣するコーディネーターとしての立場から、顧客の求める通訳者像、クレームなど具体例を挙げて報告した。

英語の通訳者に関するデータだがとのことわりつきでクレームの例として挙げられたものは、◎数字の単位が不正確◎オリジナルより日本語が短かかった◎細かい点まできっちり訳して欲しかった◎語尾がうやむや◎訳しもれ（長い場合3―5分も）◎固有名詞、テクニカル・タームなど事前の打ち合わせが不十分◎時間に遅れる◎日↓英の時、質問のポイントのずれ◎通訳者のミスの場合、ミスを認めて欲しかった◎日本語としてこなれて聞きやすいが時には話をはしょったのではという疑問、などで、ロシア語通訳の場合にも当てはまることでもあり、共感を呼んだ。

クレームの具体例を通して草柳さんは、コミュニケーションの担い手としての通訳はまず理解力にすぐれ、表現力に富み、相手が何を言おうとしているかを瞬時に捉える勘が鋭くなければならないとし、そのためには通訳としての場かずを踏み、クレームなどのマイナス材料も前向きにプラスに変えていく気概と努力が必要だろうと述べ、一人前の通訳になるには英語の場合、以前は10年かかると言われたが、現在は4―5年で十分立派な通訳が育っていると述べた。

コーディネーターとしての草柳さんに、需要の多い英語界の現状について、例えば通訳がキャンセル料を要求できるかなど具体的質問がなされた。

ロシア語通訳協会会長の徳永晴美さんは「ロシア語通訳の現場から」と題して報告し、日本語とロシア語の表現の違いにスポットを当て、日本語の原発言とロシア語訳の豊富な実例を駆使し、単語や語句の直訳ではなく、それらが表わす情報を、背景知識に基づいて自由に作文すべきではなかろうかという問題提起をした。これは参加者の間に大きな反響を引き起こし、会場は活発な論議の場となった。

日ソ学院の講師クージェリさんが発言を求め、あまりにもロシア語的表現に通訳・翻訳してしまうと日本人のこころが伝わらないのではないかとの感想を述べたが、この、日本語的表現、日本語らしさをどの程度ロシア語の訳文に残せるか、原発言が日本語としても整っていない場合、通訳者はどの程度原文を尊重するかなどをめぐっていろいろの意見が述べられた。

第3番目の報告者小川章一さん（ロシア語通訳）は通訳の営業面の問題点に触れ、仕事に入る際には契約書を取り交わすことを勧め、契約書の実例を紹介し、シンポジウム参加者に常識的価格、労働条件で仕事をし、ダンピングをしないよう呼びかけた。

最後に元高崎経済大学学長の岡本正己さんが、通訳は語学力以外に一般常識に富み、根気強く、年季を入れ、常に暗記力を養い、そのうえ正直な人柄であらねばならないとしめくくった。

話題を拾う

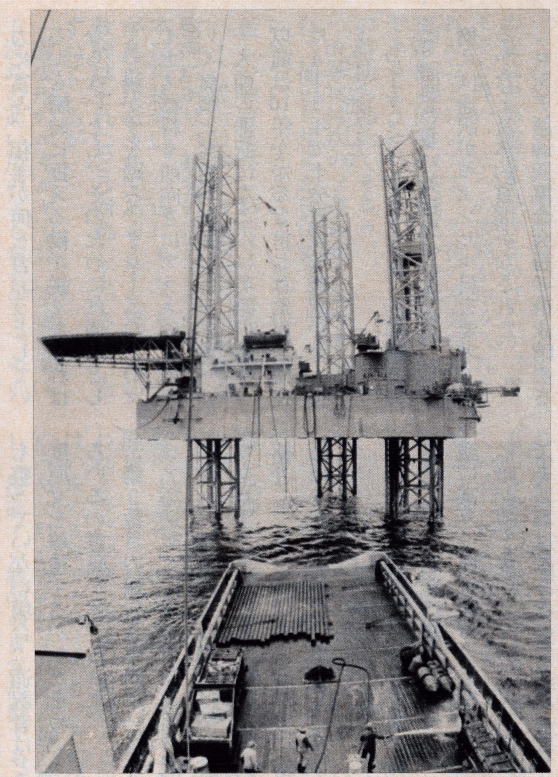
サハリン沖の石油探査



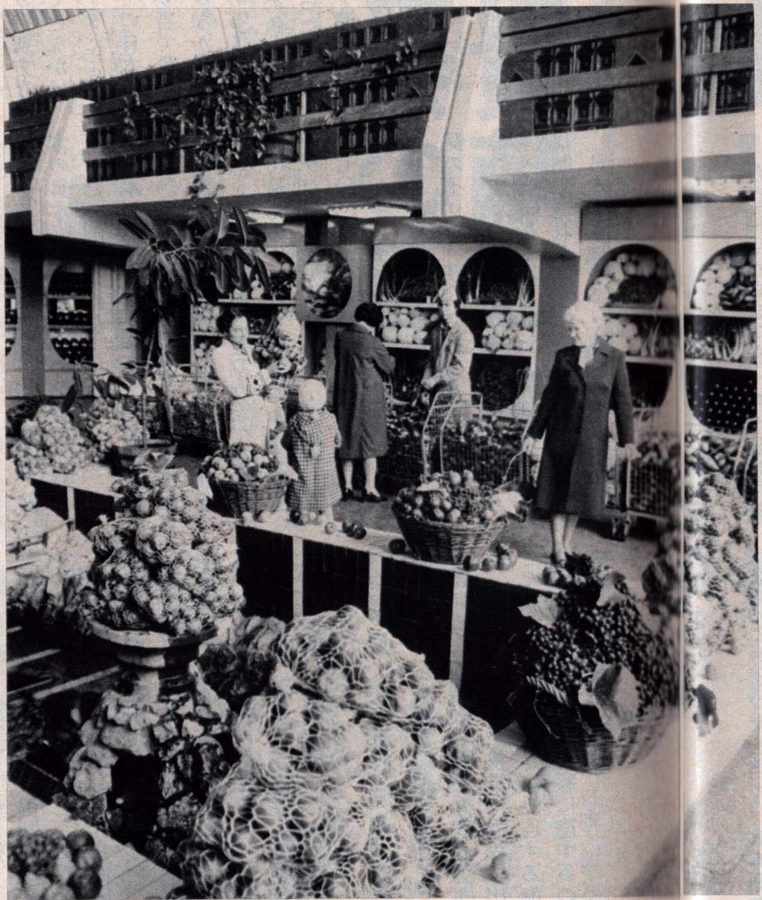
サハリン島東北のオホーツク海の困難な条件の中で、極東海洋石油ガス探査深部ボーリング隊が、サハリン島陸棚の石油ガス鉱床の探査を続けている。

掘削装置ではソ連の専門家と一緒に日本のサハリン石油開発協力株式会社（SODECO）の代表たちが働いている。サハリン陸棚の石油、ガスの探査、採掘での協力と対日供給に関する協定がSODECOとの間で調印されたのは1975年である。オドプト鉱床の探査は近く終わり、深さ2000m以上の探査井が3本掘られる。

写真は掘削船オハ号で成果を語り合う日ソの専門家(上)とオハ号(下)。



モルダビアの野菜と果物

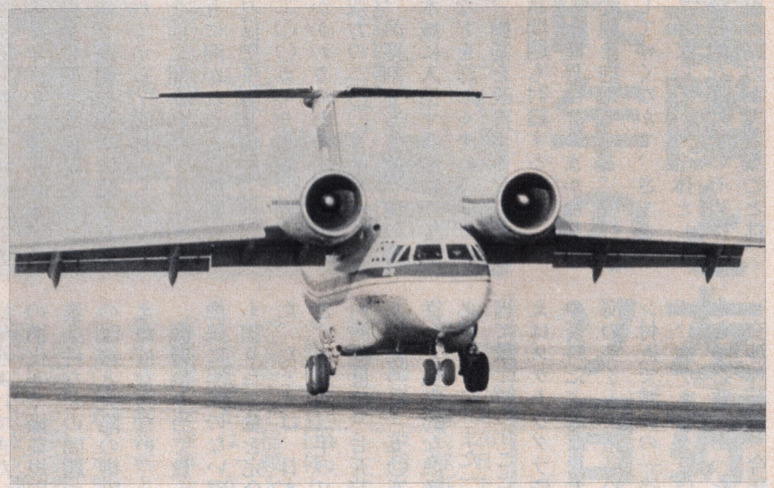


ソ連欧州部西南のモルダビア共和国の果樹・野菜栽培は工業方式に移され、農業機械や収穫機械が大々的に使われている。

近代的な農業機械が使われているおかげで手労働はほとんどなくなり、ヘクタール当たりの収量は50%増えた。広大な畑では灌漑装置がたえず動き回り、化学肥料が追肥された。その結果、モルダビア共和国は野菜と果物を自給自足しているだけでなく、ソ連の他の地区にも大量に移出している。

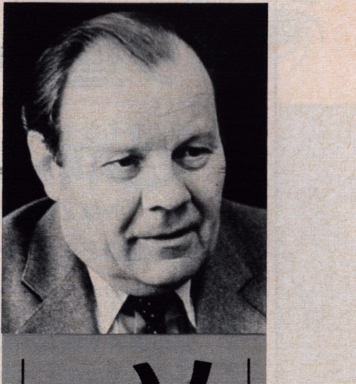
写真はモルダビアのベリツィ市の野菜・果物店。

ソ連女性パイロットの101の世界記録



ソ連の有名なテストパイロット、マリーナ・ポポビチ（写真下）は、このほどさらに2つの航空世界記録を立てた。彼女とパイロットのセルゲイ・マクシモフ、フライトエンジニアのタマーラ・メドベージェワの3人が操縦する新型ターボジェット輸送機AN72（写真上。離陸重量20－25t）は高度1万3410m、水平飛行高度1万2980mに達した。ポポビチは30余年の飛行歴を持つが、その間に101の世界記録を樹立した。ポポビチは2児の母親で、工学博士候補でもある。夫は宇宙飛行士。





ソ日漁業交渉の妥結

ソ連漁業省技術経済調査中央研究所長　ニコライ・コトフ

一九八三年11月21日から12月24日までモスクワでソ日政府間の漁業交渉が行われた。こんどの漁業交渉は、一九七七年に北西太平洋のソ連沿岸水域での日本側の操業に関する協定と、日本沿岸水域でのソ連側の操業に関する協定が調印されてから7回目のもので、新しい漁期を前に開かれた。モスクワと東京で交互に開かれるこの漁業交渉は、ソ日双方は協定の有効期限の延長とソ日両国の二〇〇カイリ水域内での操業の継続にかかわりのある諸問題を討議し、ソ日双方の二〇〇カイリ水域での操業区域、漁獲割り当て量、魚の種類、漁期、水域に入漁する漁船の隻数と型、漁具などを詳しく決める。そのほか、毎年、操業を改善するための新しい追加の諸問題も討議する。

ソ日両国の水産界は、いまかなり幅広い多くの問題を抱えている。現行協定を実施してゆくなかで、さまざまな問題が出てきているが、全体としてソ日双方が建設的な態度でのぞめば、実務的な互恵の協力ができることは、これまでの例で明らかだ。

ソ日両国の水産界は、操業方法の改善や操業規則の順守などで少なからぬ成果をあげてきた。しかし割り当て量の消化率や操業規則の順守の監視、操業条件などの問題で、われわれは事態の改善と欠陥の排除について一緒に考えねばならない。

漁獲割り当て量については、両国の漁民に関係のない理由により、双方とも割り当て量を完全に消化できなかった。たとえば、日本側のデータによると、一九八三年のソ連水域での日本側の漁獲量は、七五万tの割り当て量があったのに、五〇万tに達しなかった。従って現実的な漁獲量を決めることが必要だった。また一部の種類の魚の割り当て量を減らすことも必要だった。たとえばスケトウダラ資源は、ソ連の学者の資料によれば、太平洋とオホーツク海のクリール諸島沿岸付近、東サハリン付近で減少の一途をたどっているので、スケトウダラに対しては制限措置をとる必要があった。

交渉の結果、今年の操業条件に変更が加えられ、まず双方の割り当て量が減って日本側は七〇万t以下、ソ連側は六四万t以下になった。日本側の割り当て量は主にスケトウダラ（二万t減）の漁獲量を削ったのだが、割り当て量が減っても、水域に入漁する漁船の隻数は減っておらず、日本の漁民の不利になっていない。一九八四年にソ連水域では五七六三隻の日本漁船が操業できる。ソ連側の割り当て量は、日本の日本海沿岸水域での漁獲量を減らすことで削減された。

日本の漁民は、これまでどおりソ連の二〇〇カイリ水域内の、オホーツク海と日本海の7区域で操業でき、18種の魚をとる。その漁獲割り当て量のうちで最も多いのは、相変わらずスケトウダラで二七万tであり、イカは一三万七〇〇〇t、サンマは六万四〇〇〇t、カニ、ツブ、エビは合計一万五〇〇〇tである。日本の沿岸水域でのソ連側のイワシ、サバ、スケトウダラ、サンマの漁獲割り当て量と、他の魚種の割り当て量も決まった。混獲は四万tに制限された。

日本の水域でのソ連側の操業条件は、ソ連の水域での日本側のそれよりもずっと複雑である。たとえば、日本の沿岸の一部の区域では深さの制限があり、水深五〇〇m以下の浅い所でのソ連側の漁獲は禁止されている。その浅い所には魚が多いから、漁業の効率はぐんと落ちるわけである。

隣国の水域で操業する漁民の作業条件も若干改善され、隣国の港で乗組員は短期間休養し、飲料水や生鮮食料品を補給することができる。2月1日からソ連の漁船は小名浜（福島県）に寄港し、いわき市を訪問する権利を得た。日本の漁船はナホトカ港に停泊できる。

このように、幾つかの問題に関する交渉の過程で、双方の見解は違っていたが、協定は合意を見、両国の漁民はタイムリーに出漁できることになった。

最後に議定書に調印したソ日両国の責任者の発言を引用しておきたい。

高島益郎・駐ソ大使——「議定書と関連文書に調印できたのは、率直かつ真剣な交渉のおかげである」。高島大使は日ソの漁業協力が安定した発展を遂げ、長期の展望を持つことに深い関心を表明した。

ウラジーミル・カメンツェフ・ソ連漁業相——「交渉が順調に妥結したことは、両国の漁民の利益にかなっている。協力の精神と、操業の過程で出てきた緊急問題を前向きに処理する態度は、困難を克服し、合意に達するのに役立った。」

善隣と友好に貢献した昨年のソ日協会の活動



▲ソ日協会理事会の会議。活動報告をするのはアレクサンドル・コロマク事務局長。

昨年12月26日モスクワの対外友好会館でソ日協会理事会の会議が開かれ、日本国民との相互理解、善隣、友好を願う変わることのない気持ちと、日本の親善社会団体とともにソ日関係における協力と信頼を伸ばしていきたいという希望がはっきりと表明された。この会議では理事会各委員会の一九八三年度の活動報告と協会書記局の活動報告が行われ、承認された。

会議での発言者たちは、日本国民の生活・文化をソ連の人々に紹介し、日本各層の人々との交流を拡大するための協力の多面的活動について語った。

たとえば経済・科学委員会の委員たちは、日本の社会・経済生活のさまざまな面について、多数の聴衆を相手に定期的に報告した。文化委員会の委員は「現代日本の文化」と題する講演会を開き、日本研究家のウラジーミル・コンスタンチノフと永年日本で暮らしたロシアの女性画家ワルワラ・ブブノワの追悼の夕べが催された。生け花クラブの活動は活発で、クラブ員は数回生け花展を開いた。囲碁クラブも日本棋院の対ソ使節団と親善対局を行った。

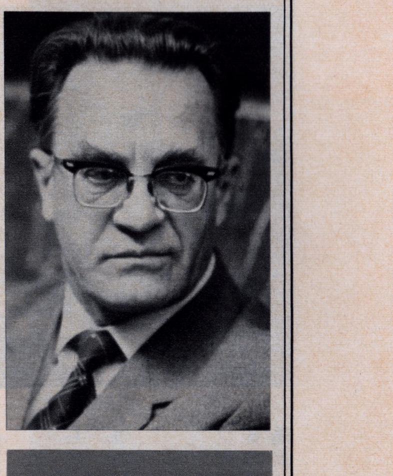
婦人委員会の委員たちはモスクワの第3回ソ日婦人セミナーに参加し、日本の婦人代表団を受け入れ、日本の婦人諸団体と文通し、日本の団体にさまざまの広報資料や出版物を送付した。

青年委員会はハバロフスクのソ日勤労青年の会合や「不戦を誓おう」をモットーにソ連のさまざまの都市で開かれた共同行動に参加し、モスクワのプーシキン記念ロシア語大学の日本人学生に助力した。観光委員会の委員は日本から来た12の「友好の船」の参加者との会合や懇談会をやり、日本人観光客の南サハリン訪問を後援した。

結びの言葉を述べたドミトリー・ペトロフ・ソ日協会副理事長、歴史学博士は、ソ日協会の一切の活動を貫いているのは、平和擁護、核軍拡競争の中止、新戦争防止をめざす強い願いであると指摘した。ペトロフ副理事長は、欧州での米国の中距離ミサイルの展開開始と関連して、一九八三年11月24日付けのY・V・アンドロポフの声明を全面的に支持する決議を、12月6日に協会理事会が採択したことを特に強調した。この決議は、「どんどん新しい種類の兵器を増強、発明することではなくて、逆に現有軍備をぐんと低いレベルにまで減らすことによって、平和は強固なものになり、諸国民の安全は保障されうる」と強調している。さらに決議は、日本の親善団体や日本のソ連のすべての友人たちに、友好・善隣をめざす運動で力を合わせて、ソ日関係が極東の平和の保障に実際に役立つようにしようと呼びかけており、ソ日協会の会員も世界のどこかで広島、長崎の悲劇が二度と起こらないよう全力を尽くすだろうと述べている。

シベリアの医学と健康管理

ソ連医学アカデミー・シベリア支部総裁　ウライル・カズナチェーエフ



ウライル・カズナチェーエフは一九二四年にシベリアの古都トムスクで生まれた。先祖代々の生粋のシベリア人である。中等学校を卒業後、17歳でファシスト・ドイツとの戦争（一九四一—四五年）に出征。一九四五年に前線で重傷を負って病院に収容された。戦後、ノボシビルスク医大を出て、臨床と研究にたずさわる。医学博士。一九七〇年にソ連医学アカデミー・シベリア支部ができたとき、その初代総裁になった。同時にノボシビルスクにある臨床・実験医学研究所長を兼任している。

昔からシベリアっ子は我慢強く、人一倍の力持ちで、しかも性格が穏やかだというので有名だった。今ならさしずめ、心身ともに頑健と言うところだろう。こうした特徴は今も残っている。しかしこの頃は〝シベリアっ子〟と言うと、いくらかちがった別のイメージも浮かんでくる。それは、最近シベリアに移住してきた何十万人もの人たちのことだ。

健康人相手の医学

シベリア、なかでもシベリア北部の総合的な開発が始まり、全国各地から人々がここに集まってくると、ソ連欧州部で行われている健康管理のシステムをシベリアに持ち込んでも、問題の解決にならないということが分かってきた。長い間にできあがった伝統的な普通の健康管理体制は、シベリアのいろいろな地方の条件のもとでは不十分だったのである。

もともと医学は健康な人間の問題にはあまり真剣に取り組まず、病気を治すことに専念してきた。しかし、シベリアの医学と医療の第一の特色は、普通の健康人だがシベリアに適応できないという人たちの健康を守り、こういう人たちが極限的な気候条件の土地で生活し、働いていけるようにするのが務めだというところにあった。

シベリアのきわめて複雑多様な自然条件に人間のからだを適応させるという問題に、医学者たちは総合的に取り組んだ。新しくシベリアに移住してきた人たちの健康状態を研究しただけではない。調査隊を出して広大な地域で調査にあたった。ノリリスク（クラスノヤルスク地方北部の都市）、チュコトカ（アジア大陸北東端）、ザバイカル地方（バイカル湖東岸）、オビ川下流部（西シベリア）などで原住少数民族の調査を行い、ヤクート人、チュクチ人、ネネツ人、そのほか少数民族中の少数民族に属する例えばドルガン人、ヌガナサン人の生活様式を詳細に調べた。これらの少数民族は何百年もこれらの地域に住み、酷烈な自然条件に見事に適応し、独自の、しかも多様な食生活、居住形態、生活慣習をつくり出したのである。

こうした調査の結果、たとえ自然環境が極限的でも（低温、ミネラルを少ししか含有していない水、極北では昼と夜の長さが両極端なので生活リズムが狂うことなど）、設備のととのった

住居、衣料、食生活、からだの鍛練その他、生活を正しく組織すれば十分埋め合わせのつくことが分かった。

実例を一つあげよう。ノリリスクは北緯69度にある都市で、第2次世界大戦直後に建設が始まった。現在の人口は約20万。この辺は永久凍土帯なので、特殊な基礎の上に近代的なビルがたくさん建っている。そこここに広い大通りが走り、暖房本管が地表のすぐ下を通っているところでは、通りの両側に街路樹が植えられている。

ノリリスクでは医学者の勧告にしたがって市民たちのために十分なスポーツ施設ができている。例えば小中学校の児童用プール、成人用特殊プール、屋内体育場、郊外の休養センター、工場従業員用の大規模な予防診療所などである。つい最近、私たちはノリリスクに住んでいる人間が一日にとる食事の内容を改めること、つまり脂肪分や肉類の摂取量の引き上げ、炭水化物のパーセンテージの引き下げ、ビタミン食品の追加などを勧告した。また例えば発酵飲料をとらせることにしたが、その結果、市民のカゼにたいする抵抗力が高まった。

これらの調査研究と平行して、シベリアにも独自の基礎医学研究センターをつくることが鋭意すすめられた。これらのセンターはきわめて短期間に組織され、現在も成長を続けている。ノボクズネツクには衛生・職業病総合問題研究所が、トムスクには心臓医学、腫瘍学、産科・小児科学、精神医学の各全ソ・センターの支部が、イルクーツクには外科学センターの支部が開設されている。

「人間生態学」とか「医学地理学」とかいった新しい用語が出はじめたのは70年代の初め頃だが、当時はまだバイカル・アムール（バム）鉄道の敷設工事も準備段階にあった。線路のコースを決めるにあたっては、医学者の意見が絶対必要だった。またバム鉄道の建設工事には全国各地から人間が集まってきたのに、伝染病が流行したこともなく、けがが頻発する心配もなく、労働集団の健康が完全に保たれたのは、疑いなく医学者たちの功績だった。またバム建設工事にやってきたのは主として青年層だったから、当然結婚して世帯をもつものがどんどん増えた。いろいろ困難はあったけれども、われわれは新しく生まれた子供たちの健康を守った。

一九八五年にはバム鉄道の建設工事が終わり、全線運転が始まるが、そのあとも医学者の苦労が減るわけではない。この鉄道沿線の開発に関連した実にいろいろな問題を処理しなければならないからだ。こんどの仕事は多少ちがってくるが、大体はやはり予防医学方面の仕事になる。

コンピューターの援軍

医学の現代的レベルとはまず第一に診断用および治療用のありとあらゆる機器を備えていること、基礎医学と臨床の双方で成果を上げることだが、われわれの仕事も完全にその水準にある。

シベリアの人口は今どんどん増えているが、その一人ひとりに行き届いた医療を与えるのにいったい何人くらいの医師が必要か、想像していただきたい。何しろここで問題になっているのは、健康人の健康管理を真剣にやるということなのである。そして健康な人間となると、現在約三〇〇〇万人を数えるシベリアの住民の事実上全員が対象になる。ところが、現代の医師が知っておかなければならないことはたくさんある。その具体的な人間の心理的、神経的、内分泌的疲労のプロセスはどうなのか？　その疲れが完全に消えるようにするにはどの位〝中休み〟をしなければならないのか？　体調と体力をどのようにして、どういう手段で取り戻せばいいのか——食生活かスポーツか、それとも単にくつろぐとか、長い休暇をとって療養することによってか？……

5年前シベリアの大企業の一つ、ノボシビルスクの農業機械工場でわれわれが初めてコンピューターを使った医学調査をしたのは、前述のような理由による。ディスプレーのスクリーンに出る質問に、回答者はイエスかノーで答えればよい。

こうしたやり方で普通は20—25分間の問答が続けられた。コンピューターの記憶装置には一定の論理に従って並べられた一〇〇〇項目以上の質問がイ

ンプットされている。イエスの回答が何か不安な兆候に該当すると、この自動インタビュアーともいうべきコンピューターはたちまちその回答の背後にあるものが何なのかの検索を始める。ノーと答えた場合、コンピューターはもう一つ確認するための質問をしたあと、本人の健康がほかの面で異常がないかどうかを引き続き調べていく。もちろん、コンピューターは医者の代わりにはならないが、実にまじめで疲れを知らぬ助手にはなれる。

同様の調査をいろいろやってみたが、みなすばらしい成果を上げた。調査の対象になった人たちは三つのグループに分類され、コンピューターで色分けされた。コンピューターがグリーンで示せば健康人、イエローならば診断基準から見て健康状態に危険信号が出ている者、レッドならば即時治療を必要とする者ということになり、大して時間をかけずに全部の人間の健康状態が分かったのである。

このあともコンピューターを使った調査を何回もやったが、遺伝による先天的な性質と後天的に培われた性質を持つ人間が、いろいろな労働条件にどのように反応するかということを知る上で大いに参考になった。この調査で分かったことだが、過重な仕事に耐えて平気でいるが、すぐに休まねばならない人間がいる。こういう人間はスポーツにもそれに似た現象があるので、仮りに"短距離ランナー型"ということにした。それとは逆に、それほど重くない仕事の場合、昼いっぱいでも、徹夜でも、一昼夜24時間でも、長時間働いて、しかも労働能力が落ちない者がいるが、これは"長距離ランナー型"ということにした。

実際の経験が示すところによると、ソ連の北部地方では短距離ランナー型はあまり向かない。北部地方に必要なのは長距離ランナー型の人間なのである。何か緊急の突貫作業を行うために臨時の集落ができて数日間もしくは数週間交替で仕事をやり、そのあと後方基地の集落で長期間休息をとるという場合には、短距離ランナー型がよい。

このようにしてわれわれは、健康を損なわずに働ける人間、時期、場所、作業体制などについて正確な処方せんを提供しているのである。

体系的な健康管理理論を

新生児がこの世に現れるとすぐ、医師は血液の化学的性質や免疫反応にもとづいてまた胎盤を調べて、その子の育て方、とくに注意すべき病気の種類、給食内容などについて助言できる。われわれは大人にもそういう健康診断をすることができる。言い換えると、体系的な健康管理理論をつくることが大切だということだ。

われわれ医学者は、人間の健康を単に精神生理学上の状態としてだけでなく、非常に大きな社会的価値だと見ている。ところで、実際に健康管理をするとは一体どういうことなのか？　それは基本的な科学的方法を使って現在進行しつつある健康上の問題を処理し、将来の問題を予見することを意味する。したがって、一方では航空・宇宙機器を使ってできる限りの広範囲で外部環境を調べ、他方で人間そのものの構造を細胞、分子のレベルで研究しているわけである。

今日では社会衛生学的な健康管理体制の諸問題は医学の枠を打ち破ってより範囲の広いものになり、子供の養育、教育、食生活、肉体的発達などの問題を含んでいる。したがって、問題を解決するには総合的なアプローチで臨まねばならない。まさにそのようなアプローチによって、純然たる地上の条件下で、"生命維持システム"という宇宙的な名のついた方法をまとめることができたのである。

シベリアの条件下では、この概念には例えば、地元の保養施設の拡充、予防診療所の開設、夏休みの期間延長、休暇旅行コースの作成（中部、中緯度地帯などへの）、それに工場の昼勤、夜勤の計画的実施などの問題も残らず含まれる。

われわれ医学者が行った提案や勧告は最初のうちはよく世間から驚かれたばかりか、疑念を持たれたことがよくあった。それが今日では生命維持システムはシベリアではごく当り前のことになってしまったのである。

ロシアのクレープ"ブリヌイ"

本誌記者　アナトリー・ゴロフコフ

ブリヌイ（クレープ）はロシアの伝統的料理の一つ。昔から普段の日にも、祝日にも食されて来た。例えばロシアの冬を送り春を迎える祭（昔は謝肉祭と呼ばれ、まる一週間も続いた）には欠かせない料理だ。

スラブの謝肉祭（マースレニツァ）は西欧で行われているカーニバルの姉妹で、両方ともキリスト教伝来以前の風習の遺産である。例えば古代スラブ人たちは、謝肉祭では牧畜と農耕の庇護者だったボロース神をたたえた。

謝肉祭の時には通常、トロイカ（3頭立てのソリ）やブランコに乗ったり、氷や雪でおおわれた小高い場所からソリで滑り降りたりして遊んだものだった。また、おとぎ話に出て来る主人公たちの仮装をしたり、仮面をかぶったりして、歌いながら輪舞をし、ダンスに打ち興じたものだった。この伝統は現代にも受け継がれ、2月末の冬を送る祭りの日、まちの公園や農村の通りはいつも人でいっぱいになる。色とりどりの屋台が出、コンロの上では鉄のフライパンがジュージュー音を立て、ブリヌイがほどよく焼き上がっている。

ブリヌイは最大の液体分量（水または牛乳）に最少の粉しか必要としないという意味で、恐らく最も経済的な粉の料理だろう。

ブリヌイはライ麦粉、ソバ粉、キビ粉、小麦粉で作られ、それぞれの名で呼ばれるが、一番ポピュラーなのはもちろん、小麦粉でできたブリヌイである。

ブリヌイを作る時は、焼き上げる5－6時間前に粉を練っておく。最初、イーストを入れた水または牛乳の中に粉の一部を溶かす。ペースト状の塊が持ち上がって来たら、残りの粉、卵、好みに応じて砂糖や塩、植物油を加える。時間がたつと、もう一度練り粉が持ち上がって来るはずである。そうしたらもうブリヌイを焼いてもいい。硬さの具合から言うと、それほど濃くないカーシャ（麦粉と牛乳のかゆ）かスメタナ（サワークリーム）に似ている。

ブリヌイを焼くフライパンは小型の鉄製のものがいい。フライパンは前もってよく熱し、植物油を塗っておく。焼くばかりになった練り粉をお玉ですくい、適量をフライパンに注げば2分ほどで焼きあがる。ふんわりと持ち上がり、キツネ色になって来たら上面に油を塗って裏返してやる。裏返して1分もすれば焼き上がる。フライパンのそばに良く熱した深さのある入れ物を置いておき、焼き上がったブリヌイを一枚一枚積み重ねていく。その際くっつかないように、一枚入れるごとにそのつど表面に油を塗っておく。冷めないように上を布巾でおおう。

こうして出来上がったブリヌイは、バラエティーに富んだいろんな食べ方が出来る。一番ポピュラーなのは、溶かしたバターやスメタナにブリヌイを浸したり、あるいは塩漬けの魚（サケ、ニシン、マス）やキャビアを中に巻くなどして、油っこいものや刺激性のものを加えて食べる食べ方である。ブリヌイはいろんなオードブルや料理に添えてパン代わりに食べてもいい。

ブリヌイを重ねて作ったパイもポピュラーだ。普通このパイは積み上げられた数枚のブリヌイから出来ていて、あいだあいだには各種の詰め物が入っている。一番多く使われるのはひき肉とタマネギやさいのめに刻んだゆで卵をよくいためたもの。こうして作られた詰め物入りのひと重ねのブリヌイは、詰め物がはみ出さないように端々を粉と卵と牛乳を混ぜたもので塗り込め、オーブンで焼き上げる。

比較的最近、西欧諸国で作られるようになったブリヌイには練り粉に重曹を加えているが、これはロシア料理には似つかわしくない。ロシアのブリヌイはまったく独特の硬さを持っていて、柔らかくてもろく、ふんわりしており、しかも無数の空気孔がはっきりと見える半透明の色つやをしている。こういうスポンジのようなブリヌイは溶けたバターやスメタナを十分に吸い込むので大変うるおいがあっておいしい。



ロシアの伝統どおりブリヌイはこんもりと積み重ねて食卓に出される。



ブリヌイの詰め物はバラエティーに富んでいる——キャビア、イクラ、キノコ、ニシン、バター。どれもそれぞれにおいしい。



モスクワの代表的なレストランの一つ、"スラビヤンスキー・バザール" のブリヌイ

歴史を伝えるリボフの町並み

本誌西ウクライナ担当記者
アレクサンドル・グレービチ
カメラ　F・グリンベルグ他



▲17世紀に建てられたシトー会の聖ベルナール寺院の中庭

西ウクライナの大都市リボフ（人口約七〇万人、リボフ州の中心地）のことが初めて史料（年代記）に出てくるのは、一二五六年の項目である。というわけで、この年がリボフ市誕生の年とされている。13世紀の末頃にはリボフは商業、経済、文化の大中心地になっていた。ヨーロッパのほぼ中心に位置しているという地の利のおかげで、ここは東ヨーロッパと西ヨーロッパ、黒海とバルト海沿岸を結ぶ交易路の〝交差点〟になった。これらの交易路を何百年もの間、ロシア、イタリア、ギリシャ、ハンガリー、オーストリアなどの商人たちが往来した。そのため、リボフの町並みにはそれぞれの国、それぞれの時代の独特の痕跡が今もはっきりと残っている。

商業の隆盛はさまざまな国や民族出身の建築家、彫刻家、画家たちにふんだんに活躍の場を与えた。ウクライナ人、ロシア人とともに、ポーランド人、イタリア人、ドイツ人、アルメニア人、オーストリア人、チェコ人がこの町の建築に参加した。そのことはロシア通り、セルビア通り、ギリシャ通り、アルメニア通りといった市街の名前に今も面影を残している。

有名、無名の建築家たちが作った昔の建物や建築アンサンブルの数々は、いくらながめていても見飽きることはない。かつての寺院や僧院の名称から、イエズス会、フランシスコ会、シトー会



古い石畳の道を電車が行く旧市街



▲リボフの中心部にあるミツケービチ広場。中央が一九〇五年に建立されたポーランドの大詩人アダム・ミツケービチ（一七九八—一八五五）の記念碑。



▲リボフにあるウクライナ科学アカデミー自然科学博物館の建物（手前）



17世紀建立の聖ベルナール寺院



1897年から1900年にかけて建てられたリボフ・オペラ劇場は19世紀末建築の典型的な建物。修復作業がまもなく終わる。



クレタ島出身の商人コルニャクトが16世紀末に建てた家の中庭"イタリア小園"。リボフ音楽院室内楽団のコンサートが時々開かれる。



古い建物は絶好の画題（旧市街地区で）。

などの修道士たちが昔この町で活動していたことがわかる。これらの建造物は練達の修復技術者たちの手で修理され、現在もリボフ市民に奉仕している。たとえばドミニコ寺院（18世紀建立）は宗教史博物館になり、聖クラリス寺院（一六〇七年建立）はリボフ美術館の展示ホールになっている。火薬塔（一五五四—五六年建築）の頑丈な壁の中には建築家会館が収まり、市の兵器庫（一八七三—七五年建築）は昔の武器の博物館になっている。また、元の聖マグダレナ寺院（一六三五年建立）はオルガンの演奏ホールに姿を変え、その丸天井の下ではほとんど毎晩、リボフ市民に人気のある古い音楽のコンサートが開かれている。聖オヌフリー僧院（一五五〇年建立）は印刷史博物館になっている。ここはロシアの印刷術の祖イワン・フョードロフ（一五一〇？——一五八三）が一五七四年、ウクライナで初めて本を印刷した場所であり、四〇〇年前そのフョードロフが葬られたのもここの境内である。

今日のリボフはウクライナの産業、学術、文化の大中心地になっており、市の領域も広がった。人口は戦後になってから3倍に増え、今は70万人を超している。住宅もそれだけ建設され、新しい住宅地区がたくさん生まれた。

しかし、新しい地区の住民たちも、余暇にはリボフの旧市街に足を向け、その風情を楽しむ。旧市街の古い建物のそばには国内や外国からの観光客の姿も多い。あちこちで画家が絵を描き、恋人たちが語りあっている。

クレタ島出身の商人コルニャクトが16世紀末に建てた家は、歴史博物館になっている。騎士たちの彫像を戴いたこの建物の正面のプロポーション、装飾模様は、ルネサンス期の建築物に特有の明るさ、軽快さ、調和の感覚を呼び起こす。中庭には半円形のアーチ、欄干、トスカナ風、イオニア式の円柱が面しており、地面には板石が敷いてある。そして壁一面に生い茂った緑のキヅタ。まるでイタリアへでも来たような気がする。そのせいで〝イタリア小園〟と呼ばれているこの場所では、リボフ音楽院の室内楽団が時々コンサートを開く。そういう時、ここではすべてのものが、音楽も、歴史も、建築も一つになってハーモニーを奏でているような印象を受ける。

16世紀に建てられた火薬塔。今は建築家会館になっている。





▲市場広場。中央の建物は市ソビエト（市役所）。

古い塔のうろこのような壁、街路の石畳の上には何百年もの歴史が秘められている。リボフの旧市街地区は年ごとに美しくなっている。とりわけここ数年は文化記念物の保護と修復の仕事が強力に行われ、大きな成果を上げた。旧市街の約一二〇haが保護ゾーンに指定されているが、この地帯には三〇〇点もの建築と美術の文化財がある。一九七五年にリボフ市は国立歴史・建築保護区になった。それ以後はこの町の風ぼうに何か変化を加えることは、修復技術者、建築家、歴史家、美術史家などで構成される委員会の許可と監督を受けなければ出来ないことになった。

リボフの歴史的文化財の保護ではすでに多くの仕事が行われたが、これからやらなければならない仕事の方がもっと多い。この地方で活躍したウクライナの有名な作家・社会評論家のヤロスラフ・ガラン（一九〇二—四九）は次のように書き残している。「将来の、工業都市リボフを目前にして必要なことは、祖先たちが残してくれたすべての優れたものを貴い宝として保存することだ。一つの石たりとも、そのすばらしい壁から雨で洗い流されないようにしよう。なぜならどの石も、われわれの歴史の破片なのだ。後で子孫たちに恥ずかしい思いをしないようにしよう」

文化交流で相互理解を深めよう



駐日ソ連大使館参事官 D・N・ゴルブノフ

1月20日、日本の外務省でソ日文化交流に関する一九七二年1月27日付け交換書簡の有効期間を2年間延期する文書が交換された。これらの文書にはソ連側からV・Y・パブロフ駐日ソ連大使、日本側から安倍晋太郎外相が調印した。

これらの書簡に基づいて、学者や研究者の交流、政府刊行物の交換を含めたさまざまな分野の交流が行われ、ソ連と日本で両国の広報資料が配布される。両国の各種の組織、機関、個人間の文化交流も拡大する。

日本ではロシア・ソビエトの芸術、文学がよく知られている。それは昨年秋日本で大成功を収めたロシア・ソビエト芸術祭のときに、はっきり示された。

ソ連人も隣国日本の豊かな伝統をもつ独特な芸術、文化に、大きな関心と尊敬を寄せている。

文化交流に関する書簡の有効期間の延長は、この分野の両国の結びつきの拡大に役立つだろう。

ソ日国交回復後すぐに、つまり一九五〇年代末から、ソ日文化交流は急速に発展し始め、やがてソ日関係全体の中で重要な、注目すべき地位を占めるにいたった。なぜなら文化交流は外交交渉のみならず、商取引に比べても大きくまさっており、それぞれの国の生活様式や精神財、国民の哲学観の体系を多数の人々にわかってもらう媒体となっているからだ。

歴史的に見ると、19世紀にロシアと日本との公式の接触が始まったのち、両国の文化はそれぞれの相手国に急速に浸透していった。19世紀―20世紀初めのロシアの偉大な作家、作曲家、バレエ演出家の創作が、多くの日本人の教育、世界観の体系の中にしっかり根を下ろしたのは、ソ連人にとってとてもうれしいことだ。

ロシア・ソビエト芸術に対する日本人の強い関心は、昨年秋日本で大成功を収めたロシア・ソビエト芸術祭のときに、あらためてはっきり示された。

この芸術祭の期間に四〇〇人余りのソビエト芸術の巨匠たちが、日本の27の都市で約一三〇回の公演を行い、二〇万人以上の観客を動員した。芸術祭に参加したのはボリショイ劇場のバレエ団、エブゲニー・スベトラーノフ指揮のソビエト国立交響楽団、レニングラード・ボリショイドラマ劇場、V・スピバコフ指揮のモスクワ・ビルトーゾ室内管弦楽団、ボリショイ劇場のソリストのエレーナ・オブラスツォワとエブゲニー・ネステレンコ、ピアニストのミハイル・プレトニョフである。

芸術祭以外にも、サーカス団が二つとボロジン記念弦楽四重奏団、「ドン・コサック」歌と踊りのアンサンブルが訪日したし、ソ連のピアニストのニコライ・デミジェンコ、タチヤナ・シェバノワ、ミハイル・ボスクレセンスキーが公演した。東京と大阪で開催されたエルミタージュ美術館所蔵の17世紀オランダ・フランドル絵画展の入場者は約二六万人にのぼった。

ソ日文化交流の今後の計画は多彩である。

後楽園のボリショイ大サーカス(昨年12月―本年2月)は、とくに子供たちの評判がよい。セルゲイ・オブラスツォフ指揮のモスクワ中央人形劇場が見せる独特なジャンルの出し物のファンたちは、3月15日から始まる公演に期待を寄せている。

日本ではソ連の博物館の所蔵品の展覧会が多数開催されており、現在開催中の「鳥の世界展」(日本対外文化協会、毎日新聞社主催、ソ連科学アカデミー協力)は好評である。

ソ連側も日本の伝統芸術や現代美術のすぐれた作品をソ連に紹介しようと努めており、現在双方の間で歌舞伎の公演、ソ連の多くの都市での蒼月流生け花展、7―8月の日本デザイン展「伝統と現代」の開催などについての話し合いが進められている。

文化交流が相互理解と相互信頼を確立し、深める最も効果的な手段であり、さらに二国間の真の善隣関係の確立に役立つことを双方が理解すれば、ソ日文化交流はさらに拡大するだろう。このことをぜひ期待したい。

ソ連共産党カリーニン州委員会と社会党千葉県本部の交流



1月26日から2月2日まで、日本社会党千葉県本部の招きで、ソ連共産党カリーニン州組織の代表団(団長は党カリーニン州委員会第二書記のM・シェストフ)が来日した。

こんどの訪日の印象についてシェストフ第二書記(写真)は次のように語った(聞き手 V・デウーリン本誌記者)。

――社会党千葉県本部との交流のいきさつは?

両党組織の代表団の交流は、一九七三年に日本社会党千葉県本部の代表がカリーニン州を訪れたときに始まり、以来交流は定期的に行われ、ソ連側の訪日は今回で5度目、日本側の訪ソは6回になる。つまりわれわれは、ほぼ毎年ソ連か日本で会って、党活動の諸問題について意見と経験を交換し、各界代表と話し合っているわけだ。

例えば、この前社会党の千葉県本部代表団がわが州を訪問したときは、ソ連共産党の市、地区委員会を訪れ、州内の労働者代表と会い、州の教育施設を視察し、カリーニン市の市民の家庭を訪問した。

今度の訪日で、われわれは石橋日本社会党委員長をはじめ、渡会俊誉・日本社会党千葉県本部委員長、中野晟・千葉県副知事や社会党県組織、千葉県当局の代表と会談した。意見の交換は極めて幅広い問題にわたったため、当然、すべての点で見解が合致または類似したわけではないが、そういう合致点、類似点があったことがなにより重要だと私は思う。こうした合致点の一つは、平和と、現在および未来の世代の安全を守るための共同闘争の必要性を双方が理解したことだ。われわれは、ソ日両国民間の友好と善隣をめざす恒常的共同行動の実現を、このグローバルな課題の一部と考えている。この共同行動は、あらゆる形態を使い、あらゆる関係のレベルでやらねばならない。われわれはこれを、両党の関係を強化、拡大するわれわれの活動の最重要課題の一つだと見ている。

――どんな会合が一番印象的だったか? そしてその理由を……

いろいろな会合や催しに参加したが、特に忘れられないのは、千葉海浜交通労組の活動家との会合と、社青同同盟員や学校教員との会合だ。これらの会合で、われわれが強く感じたのは、一般の日本人がソ連やソ連国民の生活に対して好意的な関心をもっているということである。しかしこうした関心は、日本のマスコミでは十分に取り上げられていない。

われわれとしては好意的関心があるということはある意味でうれしいことだ。今のように両国の関係が決して良いとはいえない時に、こうした前向きの関心があるということは、友好と協力の未来が必ずくるということである。

――社会党千葉県本部とカリーニン州との今後の交流についてもっと詳しく話してほしい。

今までの交流や会合の中でも、われわれの今後の関係拡大に関して、少なからぬ希望が述べられてきた。われわれから見れば、これは大いに歓迎すべきことで、現在の両党間の交流を強化し、それを新しい分野――特に社会生活の分野にまで広げるために、万全を尽くすことができる。その手本は少なからずある。わが州はハンガリー、フィンランド、西独といった国々の各界の人々とさかんに接触している。わが州には姉妹都市もあり、代表団の交換は大々的になっているし、スポーツ、文化、ツーリズム、学校間の交流は、着実に発展している。日本側との関係も同じように進展すると私は思うし、そうなると信じている。

☆ ☆ ☆

ノーボスチ通信特派員報告

アフガニスタンの労組

Y・スベトリチヌイ記者（カブール）

アフガニスタンではいま、社会生活のすべての面で変化が起こっている。アブドル・サタル・プルデリ・アフガニスタン労働組合中央評議会議長は言う——「近年、人民権力が成長して労働者階級が隊列をいちじるしく強化した事実もまた、われわれは革命的現実の喜ばしい現象だと考える。当然のことながらわれわれは、わが国の労働者階級を労働組合運動のいっそうの成長と、勤労大衆に対するその影響力の強化のための確かな基盤だと見なしている」

アフガニスタンには現在、労働組合員が一六万三〇〇〇人おり、そのうちの一五万人が生産部門——運輸、工業、建設に従事している。国営と私営とを問わず、すべての大中企業と小企業の多くに労働組合委員会が設置されている。宣戦布告なき戦争のもとで、反革命の不意討ちを断ち切る必要から、労組委員会は三つの死活的に重要な課題の遂行に参加している。

第一は、企業の正常な活動を保障し、企業を反革命武装集団の攻撃や防害活動から守ることである。このために、それぞれの企業に自衛部隊が設けられている。現在、一万五〇〇〇人の武装労働者が一三五の工場を守り、幹線道路をパトロールし、政府や民間の建物を警護している。これらすべては労働時間外の仕事である。

第二は、経済的な課題である。あらゆる困難にもかかわらず、40以上の大企業が生産課題を超過遂行している。それには、何万人をもまき込む生産競争を指導している労働組合も少なからず貢献している。

第三は、労働者の労働条件と生活条件を改善し、労働者に各種の権利や特典を与えることである。これらの措置は労働組合の権威を高め、働く人間についての人民権力の配慮を確信させている。

インドシナ3国の第2回民衆芸能祭

E・ソロビヨフ記者（ビエンチャン）

ラオスの首都ビエンチャンで、ベトナム、ラオス、カンプチアの民衆芸能祭が開かれ、一〇〇人以上の歌手や演奏家が出演した。

これらの国の人民は一緒に民族解放のために植民地主義者や外国の侵略者と闘い、一緒に平和的な労働と社会主義的未来の建設に向かって歩み出した。インドシナ3国人民の文化財を大切に保存し、それを増やし、文化を革命的に変革し、精神的に新しい人間を育てることは、これらの国々の社会主義建設には欠かすことができない。

芸能祭のプログラムは多彩で、コンサートのほかに、ビエンチャンの名所見学、企業や集団農場の働き手たちとの集会まであった。

トンシン・タマボン・ラオス人民革命党中央委員候補は芸能祭の目的と課題についてこう語った——「今回のベトナム・ラオス・カンプチア民衆芸能祭は2回目のもので（第1回は昨年プノンペンで開かれた）、兄弟3国の文化生活における新しい、非常に重要な伝統を継続するものだ。ベトナム、ラオス、カンプチアには民間に伝わる芸能のそれぞれの民族的特徴、独自の形態がある。だが、それぞれの国の芸術には多くの点で共通するものがあり、深い民族的な根でつながっている。だから芸能祭の主要な意義は、これによって民族文化を相互に豊かにし合い、アーチストや演奏家や作曲家の創造的探求に新たな刺激を与えることです」

パーシングはアフリカにも脅威

V・オヌチコ記者（バマコ）

米国が仕掛けている軍拡競争の新たな危険な高まりは、アフリカでも不安を呼んでいる。かつてこの大陸では、自分たちは核の脅威から免れ、第3次世界大戦にまき込まれることもないだろうといった気分が一般的だったが、そうした気分が次第に消えている。

第一に、アフリカは米国の軍事基地に取りまかれており、核紛争が起これば、欧州がそうなったように、米国の人質になってしまう。第二に、南アフリカでプレトリアの人種差別政権が独自の核産業を創設した。南アフリカ共和国は現在すでに、米国が広島に投下した原爆よりも強力な核爆弾を毎週1個ずつ作るのに十分なだけの量のプルトニウムを生産している。南アフリカ共和国がまだ核兵器を保有していないという保証はどこにもないし、この共和国がアフリカの平和的な住民に対して、現在近隣諸国に対して通常兵器を遠慮なく使用しているように、核兵器を使用しないという保証もない。

さらに、もう一つの要因を挙げることができる。米国核ミサイルのイタリア領——シチリア島への配備は、アフリカへの北からの現実の脅威である。なぜなら、コミゾ基地に搬入されたミサイルは、イタリアをソ連から守るためであるかのように言われているが、アフリカ大陸を数千kmにわたって射程に収めているからである。故意に、あるいは偶然に発射されたこのミサイルが、アフリカの数十万人の生命を奪わないとだれが保証できるだろうか？

だからアフリカでは、米国とNATOが世界に贈った〝新年のプレゼント〟が憂慮されているのである。

ソ連の新聞記事から

（一九八四年1月後半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議で内外政策の一連の問題を検討した。

政治局は一九八四年1月25日付けのプラウダ紙の質問に対する回答の中でY・V・アンドロポフ同志が打ち出した諸提案を全面的に、完全に支持した。回答の中では共産党とソビエト国家の対外政策の原則的な方針が完全に反映されていることが強調された。

定例会議では、欧州における信頼と安全の強化と軍縮に関する会議でのソ連代表団の活動について、またこの会議期間中にストックホルムで開かれたワルシャワ条約加盟諸国外相会議および米国務長官との対談その他一連の外国の外務省指導者との対談について、A・A・グロムイコ同志の報告が聴取され、承認された。

昨年の活動の結果を考慮して中央委政治局は、ことし党の中央諸機関で検討されることになっている党建設、国家建設、経済建設、イデオロギー、対外政策の主要問題の範囲を定めた。

政治局はM・ウィルナー書記長を団長とするイスラエル共産党代表団とのソ連共産党中央委員会での会談について、K・U・チェルネンコ同志とB・N・ポノマリョフ同志の報告を聴取した。

政治局定例会議では、党生活および国家生活上のその他いくつかの問題が討議され、決定が採択された。

（プラウダ紙1月28日号）

見本市は技術革新の鏡

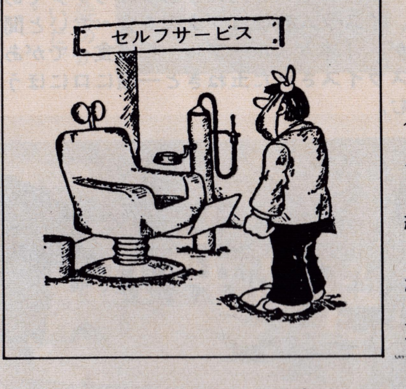
ソ連商工会議所のV・プレトニョフ第一副会頭はクラスナヤ・プレスニヤ常設展示場で記者会見を開き、ことしソコリニキやクラスナヤ・プレスニヤ会場で行われる展示会の種類と日程を発表した。その主なものは次のとおり。「金属加工機械＝84」展——3月27日—4月5日、会場はソコリニキとクラスナヤ・プレスニヤの2カ所。この種の国際展示会としては最初で、20カ国および西ベルリンの工作機メーカーの製品が展示される。第4回「農業機械」展——5月から6月にかけて。ソ連は数十種の農業機械を輸出しているが、〝ベラルーシ〟農業用トラクターはとくに有名で、輸出先も多い。こんどは水田用、急傾斜地用、綿花畑用の最新型を出品する。「林業・製材機械＝84」展——9月11日から。ソ連は森林面積で世界第1位、全世界製材量の$\frac{1}{3}$を占め、国内の木材消費は1日当たり一〇〇万立方mにのぼる。

（イズベスチヤ紙1月28日号）

児童専用のサナトリウム

エッセントゥキ（北カフカズのスタブロポリ地方）で子供専門のサナトリウム——「ユーノスチ」が完成した。このサナトリウムには明るい快適な部屋のほか、最新の医療機械を完備した治療室、食堂、勉強部屋、遊戯室などがあり、サナトリウムの隣では学校の校舎が建設中。校舎が落成すれば、このサナトリウムにきた子供は治療を受けながら同時に学校の科目を全部履修することができる。サナトリウムは間もなく受け入れを開始する。

（イズベスチヤ紙1月18日号）



V・アシマノフ作
（トルード紙1月22日号）

バム鉄道からの初旅客

1月20日の朝、バム鉄道ティンダ駅発の旅客列車がモスクワに到着した。この列車は現地で編成された最初のもの。バム鉄道の建設工事はいまもなお進められているが、すでに全国の単一輸送システムの重要な一環として運行されている。

（イズベスチヤ紙1月21日号）

好評の乳児水泳

ラトビア共和国の首都リガには「イルカの赤ちゃん」という乳児専門のスイミングクラブがある。

ソ連の学者は乳児に水泳をさせると、からだの各部分が均整のとれた発達をとげ、健康にも非常によいと主張しており、その裏づけになるデータも発表されている。

このスイミングクラブに連れてこられる子供は生後1カ月以下の赤ちゃん。水泳はある種の身体障害にも効果がある。

もっとも、いまのところこのクラブのある場所は診療所の中だが、ここでの実績を参考にして特別の水浴療法施設をつくる計画がすでに進められている。

（プラウダ紙1月27日号）

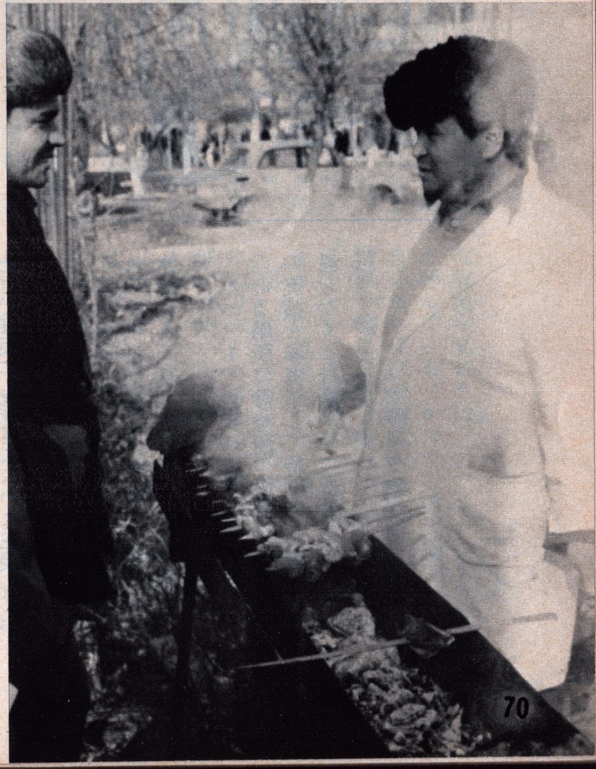
ウズベクの人々

ノーボスチ通信東京支局 服部 仁
石井 信介

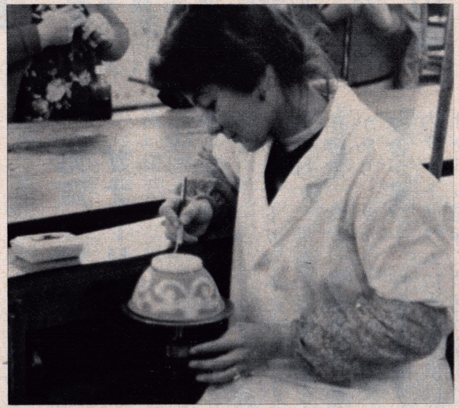
旅行の楽しみは、エキゾチックな名所旧跡を訪れることよりも、未知の人々との出会いにあるのではないだろうか。私たちは昨年12月18日から27日まで、ウズベク共和国のタシケント、サマルカンド、ブハラを訪れた。ソ連と言えば、モスクワ中心のロシア、あるいはスラブのイメージしかなかったわれわれにとって、シルクロードの昔から諸民族が交流し、独特の文化を創り出している中央アジアの人々との出会いは、新鮮な驚きだった。旅行中のスナップを通じて、彼らの素顔を紹介したい。



タシケントの都心近くにあるアブドラフマノフさん一家を訪れ、楽しいひとときを過ごした。主人のグリャムさん（元オペラ歌手）手づくりのピラフは最高においしかった。奥さんのズフラさんは「この人と一緒になって50年、いつも私が我慢してきた」とこぼしながらも、8人の実子と3人の養子の成長に大満足（ウズベク共和国では戦時中ソ連欧州部のみなし子を養子にした家が多い）。



サマルカンド。レギスタン広場からビビ・ハヌム寺院とコルホーズ市場に通ずる通りには出店がたくさんでていた。ちょうど昼時、炭火で焼くシャシリクのにおいにさそわれてたちよる。ヒツジの肉だと思ったらブタであった。イスラム教徒はブタ肉を食べないと聞いたが。1本が1ルーブル、相当食べでがある。スライスされた玉ねぎと一緒に口にほうりこむ。



サマルカンドの陶器工場で。従業員一六〇〇人の平均年齢は25歳。そのうち80%が女性。美人が多い。下町の世話好きなおばさんといった感じのデザイン主任は「若いデザイン工芸家が育ち始めると、男は兵隊にとられ、女は結婚してしまう」となげいていた。



サマルカンドのコルホーズ市場でこのおばさんの売るマントイをたべた。中国の〝肉マン〟の皮をうすくして油でいためたものと思えばよい。このおばさんは、10人の子供を育ててきたと言った。日本人だと言ったら、友好が大切だよと、自分の両手を握って振って見せた。



◀ モスクワと違って、子ども達の姿をいたる所で見かけた。新年を前にして買物客でにぎわうサマルカンドの大通りで。



タシケントのバザールで。若者はタジク人、娘さんはキルギス人というが、私たちは旅行の最後まで、ウズベク、タジク、キルギスの各民族を区別することができなかった。



サマルカンド。ビビ・ハヌム寺院のかたわらの市場でほうずきを売っていた。薬にするのだそうだ。なつかしい。



ウズベク共和国最高会議法務部長、アリムジャノフさん。肩書きから判断してエリート大学法学部出身の怜悧な官僚と思っていたら、気さくなおじさんだった。でも眼光は鋭い。



サマルカンドの公衆電話。



グルジア共和国の山村タイア村に住むレバン・サジャワ老人はこのほど115歳の誕生日を迎え、盛大なお祝いが行われた。写真はその席で村のアマチュア芸能団と踊るサジャワ老人。

短信アラカルト

ことしも二五〇万人の新卒業生

この夏、ソ連では約二五〇万人の若者や娘が10年制の昼間の学校を卒業する（働きながら学ぶ人のためには夜間の学校がある）。卒業までにはまだ間があるが、卒業生たちがどんな進路を選択するかについては、いまからもう大体予測することができる。

最近の傾向によれば、卒業生の約36％は昼間の中等専門学校（技術専門学校、教育専門学校、医科専門学校その他）か大学へ、32％は職業技術学校（修学期間1年半、高度の職業技能を教える）へ進む。残りはそのまま国民経済のさまざまな分野で仕事に就く。これらの卒業生は、企業付属の無料の講習会や経験豊かな熟練工の指導で、あれこれの専門技能を身につけることができる。

発展する内水面漁業

南ウラルにあるバシキール自治共和国の首都ウファで、毎年四〇〇〇万尾のサケの稚魚を養殖する養魚場が操業に入った。稚魚は池を利用する各地の養魚場へ送られる。

ソ連ではいま内水面漁業が急速に発展しており、漁業省の系統で二一万七二〇〇haの池を使って三五〇の養魚場が操業している。そのほか、農業省の系統でも約二〇〇の養魚ソフホーズと、多角経営のソフホーズやコルホーズ内の約一〇〇〇の養魚場がある。これらの池の総面積は一四万五〇〇〇haに達し、年間の水揚量は三万二〇〇〇tである。

火力発電所や原子力発電所の貯水池も有望視されている。ここでは年間一〇万t以上の魚が生産できるだろう。発電所の温排水を利用したこの種の養魚場は現在、ソ連に34カ所あり、近い将来さらに72カ所の建設が計画されている。

いまなぜ外輪船？

ヤクート自治共和国のジャタイ船修理・造船所で、河川用外輪船シリーズの最初の船が進水した。船の両わきに直径4mの外輪が一つずつついている。船の長さは40m以上。見かけは不格好だが、外輪をそれぞれ別の方向に回転させることによって、その場回頭ができる。速力は毎時18km。推力はスクリュー船に劣らない。

〝時代後れ〟の外輪船をわざわざ採用したのには、わけがある。ヤクーチアの中小河川の多くは水が少なく、遠く離れた地域まで貨物を届けるには、浅瀬でスクリューがつかえてしまう。外輪船なら吃水がわずか1m。おまけに機動性がいいので、以前には普通の船が行けなかったところまで行くことができ、特別な桟橋がなくても接岸できる。

極東の海岸に児童総合施設

ウラジオストク郊外の美しい海岸に周年営業のピオネール・キャンプ〝ブリガンチナ〟が開設された。六〇〇人収容の5階建ての生活棟のほかに、学校、図書館、クラブ、仕事部屋、技術サークル、芸術サークル、診療所がある。

〝ブリガンチナ〟はすでにシベリアとソ連極東のさまざまな都市の子どもたちを受け入れている。利用は無料で、費用は全額、子どもたちの親が働いている企業や機関の管理部と労働組合が負担する。

現在この地域にさらに三つのピオネール・キャンプ――〝パールス〟〝アムフィビア〟〝ガラクチカ〟が建設中で、〝ブリガンチナ〟と合わせて総面積二七五haの総合施設〝オケアン〟を形成する。毎年ここでソ連東部諸地域の学童二万六〇〇〇人が休息し、学ぶことになる。

生活棟のほかに、映画コンサートホール、天文台、マリンランド、スポーツ宮殿、スタジアム、プール、テレビスタジオその他が建設される。〝オケアン〟は船団を保有し、子どもたちはそれらの船で実習し、沿岸を航海する。

巨大タイヤ製造機

ジョジノ市のベロルシア自動車工場（ベラズ）で、ソ連で最初の一一〇t積みダンプトラック用のタイヤ製造ユニットが運転を開始した。タイヤは直径3m以上、重さ2t以上という巨大なもの。ソ連はこれまで、このような大型タイヤは外国から輸入していた。

ベラズではもっと大きい、一八〇t積みダンプトラック用のタイヤ製造ユニットもできており、現在テスト運転中。このユニットの重量は約50t、直径3m半以上のタイヤを製造する。

文学

〔短編〕

地球の秘密

ビクトリア・トカレワ
山田　はじめ　訳

エレーナ・ジュラブリョワは朝、すべてが嫌になって目が覚めた。

目を覚ますと彼女は、最終的に意を固めて、感じていることを言葉にまとめ、その言葉を声に出して、電話で言う必要があると決心した。

ニコラエフが9時に電話をかけてくる。彼女は受話器を取って、こう言うだろう。

「ねえ、分かる？　私、疲れたの。何もかも嫌。これ以上もう何もほしくないわ！」

いつも彼は、かっきり9時に電話をかけてくる。それが都合がいいのだ。

彼は電話で言う。

「やあ」

彼女は答える。

「やあ」

彼は言う。

「じゃあね」

彼女は答える。

「じゃあね」

これがすべてである。双方から2言ずつ、計4言。「やあ」と「じゃあね」だけ。

だが、それは形式であって、内容はもう少し深い。実際には、もっと長い会話なのだ。本当はこうなる。

「やあ、ぼくはきみのそばにいるよ」

「私もあなたのそばにいるわ」

「でも、ぼくは仕事なんだ。出かけなくちゃいけない」

「私はあなたの仕事を尊敬してるわ。真の男性にとっては、仕事は女性よりも大切なんだものね。仕事がすめば、あなたは私のところにやって来る。待っているわ。じゃあね」

これが双方2言ずつ、計4言の意味なのだ。

きょうはすべてが別のふうになるだろう。

きょう、彼は「やあ」と言うだろう。

彼女は答える——「私、疲れたの。もう何もかも嫌。これ以上、何もいらないわ！」

彼はびっくりする——「でも、どうして？」

彼女は言う——「問題はそれなの…」

目覚まし時計が9時3分を示していた。次は9時4分だ。

56分後に目覚まし時計はかっきり10時を示した。

ニコラエフは電話をしてこなかった。それはまったくの例外だった。それは太陽が1時間おくれて顔を出すか、まったく昇らないのと同じだった。

エレーナは目覚まし時計を見たり、電話を見たりしながら、何か当惑のようなものを味わっていた。彼女は当惑が計画を洗い流すことを恐れ、準備していた言葉の代わりに、受話器に向かって叫んだ——「なぜ鳴らないの？　私は立って、待っているの、ばか女のように……」

台所へお茶をわかしに行った方がよかったのだろうが、エレーナは水道の音が他の音を、電話が鳴る音をかき消してしまうのではないかと心配した。

時間がエレーナの周辺で停止した。いや、エレーナ自身が停止して、時間は彼女の素足と優しい顔をゆっくり撫でて流れつづけていたのだろうか？

エレーナは米国の女優オードリー・ヘップバーンに似ていた。ヘップバーンが横目を使ったら、初等クラスの唱歌の教師エレーナ・ジュラブリョワと見分けがつかないだろう。

目覚まし時計は11時15分まえを指していた。おなかが空いた。

エレーナは電話のところへ行き、ニコラエフの番号をまわした。なぜ彼の電話を待っていることがあるだろう？　自分の方からかければいいのだ！　電話をして、すべてを話せばいいのだ。

受話器の中で呼び出し音が聞こえた。1回、もう1回。呼び出し音は彼の事務室で鳴っているのだ。そこには机があり、生活に必要な空間——全体の生活空間から切り離された7平方mがある。

長いことだれも出なかった。エレーナは待ちながら、彼の顔を思い浮かべていた。

「もしもし」　不意に聞き慣れない声が応答した。だれかが彼の部屋に入って来たのだろう。

「ニコラエフを呼んでいただけませんか？」と、他人の声に驚きながらエレーナは言った。

「彼は所長のところで会議中です。何かお伝えすることでも？」

「いえ、結構です。ありがとう」

もちろん、その男性を通じて、「私、疲れたわ。もう嫌。何もいらない」と伝えてもらうことはできる。だがそれでは、過ぎ去った愛に対して誠実だと言えるだろうか？　過ぎてしまったものではあっても、自分の感情を大切にし、有終の美を飾らなければならない。

大事な言葉を第三者を通して伝えるわけには行かない。自分自身で言わなければならない。電話でではなく、面と向かって。彼の職場へ行こう。美しい、自立した女として。愛の初めのときよりももっと美しい、もっと自立した女として、行って、すべてを話すのだ。そして、まわれ右をして、引きあげよう。新しい歌がうたいたくなったら、彼は彼女を呼ぶことができるだろう。だが、取りもどすことはできない。

ニコラエフが働いている機関は地球物理学研究所という名称だった。そこでは研究員たちが仕事をし、学位論文を書いていた。

研究員たちの仕事は、たとえば電気のような、地球のもう一つの秘密をあばくことだった。電気を抜きにしては、いまの生活は考えられない。10年後には、いま地球物理学研究所で取り組んでいる発見を抜きにしては、生活は考えられなくなるだろう。

それが何であるかを言うのはむずかしい。あるいは、時間の新しい法則が発見されるかもしれない。時間を予定することができるようになり、各人が自分の好きな寿命を決めることができるようになるかもしれない。あるいは、40–50歳までの一定の年齢——それ以上年をとりたくないという年齢にとどまっていることができるようになるかもしれない。

だが現在までは、研究所は地球から主要な秘密を取り出すことに成功しておらず、可能なあらゆるテーマのさまざまな資料を蓄積したにすぎない。研究員たちはそれを、学位論文に反映させているのだ。天才が現れて、すべてを解明しなければならない。混乱を一つの特定な思想にまとめなければならない。だが、まだ天才は現れていない。まだ生まれていないのか、生まれてはいるが、まだ成人していないのか、いずれにせよ。あるいは、すでに成人して、大学を卒業して、雇ってもらうために人事課の窓口に立っているかもしれない。あるいは、もうずっとまえから働いているのだが、イニシアチブを発揮できないでいるのかもしれない。だから所長が会議を招集して、部下の中から天才を発掘しようとしているのだろうか？

もしかしたら、それがニコラエフかも？　まず、そんなことはないだろうが。ニコラエフにとっては、科学は他人に自分を認めさせるための手段なのだ。ニコラエフには観衆の大軍団が必要なのだ。そしたら彼は、地球が持っている秘密より4つも多い秘密をあばき出すだろう。

エレーナにはボバという知人がいる。4歳の隣人である。出会うと、エレーナはその子のまえにしゃがみ込んで、髪の毛をなでながら言う——「ボバはお利口ね、かわいいね、だれよりもいい子ね」。ボバはまばたきもしないで彼女の目をのぞき込む。そして、まつ毛さえ動かさない。だが、「ボバは悪い子」なんて言われると、たちまち本気にして、腹を立て、涙を流して泣く。

彼女とニコラエフの関係もほぼ同じである。エレーナは彼の顔をなでながら言う——「かわいい人。私のただひとりの人。だれよりもいい人」。ニコラエフも彼女の目をのぞき込む。彼の顔にも半信半疑の表情が浮かぶ。

そのような顔をするのは、自分に自信がないからだ。彼は自分を信じていない。だからエレーナの確信は、比重のために必要なのだ。風で地表から飛ばされないように。

2時をすぎていた。

所長のところでは相変わらず会議がつづいていた。所長室のドアのまえには上品な秘書が陣取っていた。年齢が止まってしまった女性である。

秘書は非難がましい表情はおくびにも出さずに、エレーナを見て、聞いた。

「どんなご用でしょうか？」

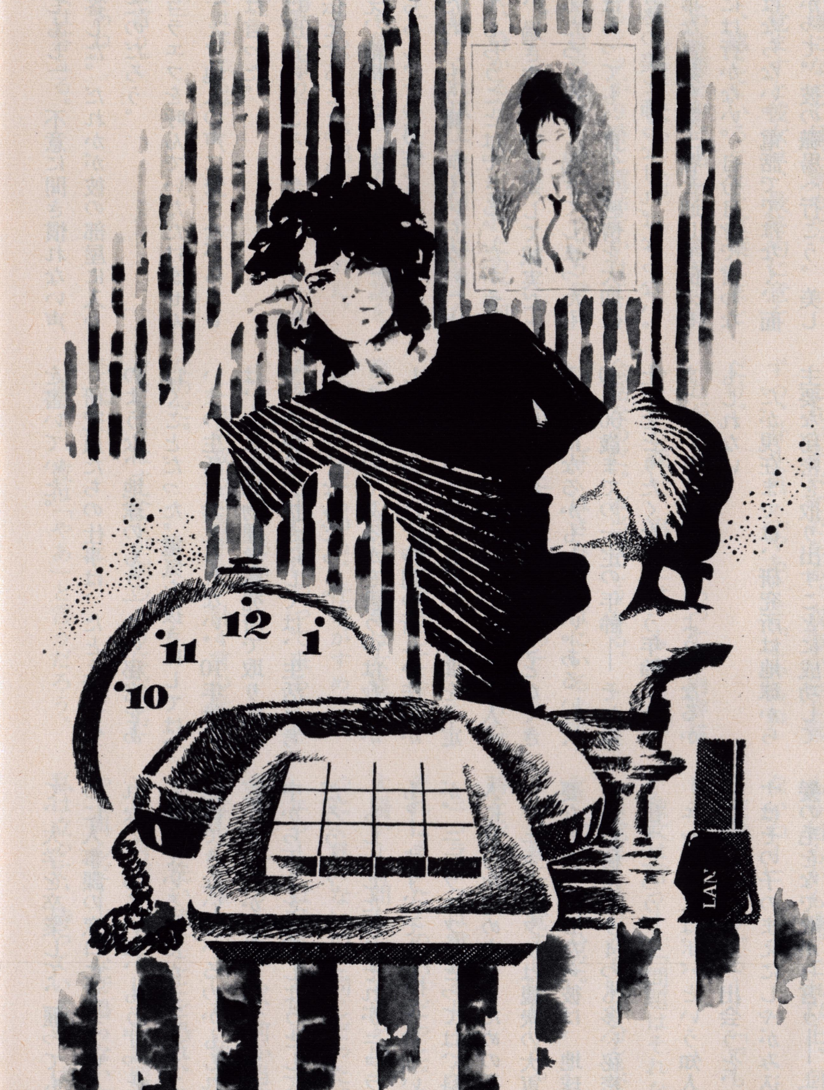
「ニコラエフに用があります」とエレーナは答えて、足を組み、周囲とはまったく関係ないといったポーズで座っていた。

エレーナは、ニコラエフが会議のあと、自分の部屋をのぞかずに、そのまま帰ってしまうのではないかと心配だった。そうなったら、また別の日に出直さなければならない。彼女に都合のいい日は、学校で歌の授業がない水曜日しかない。

ひっきりなしに研究員たちが応接室をのぞいた。彼らはいくらか驚いた様子でエレーナを見て、そのあと秘書に——「あの人だれ？」と聞くのだった。

エレーナの様子は、仕事時間中に研究所へやって来たというようなものではなく、夜のバーへやって来たという感じだった。黒いサテンのキュロットに銀色のTシャツ姿で、Tシャツの下からは彼女の若い、柔らかい体が想像でき、部分的にはそれが見えていた。

彼女は夜のいで立ちで現れたが、いまは昼だった。彼女は休日の装いで現れたが、いまは平日だった。



ふと、エレーナは立ち上がって帰りたくなった。だがそのときドアが開いて、所長室から人々が出て来た。ミニ集団の中ほどに、どっしりした人が歩いていた。

エレーナは確信していた—— 人間はみんな猿から発生したとは限らず、各人がそれぞれの獣から発生したのだと。

エレーナは猫から。ニコラエフは馬から。それも大きな馬ではなく、ポニーから。あるいはロバかもしれない。集団の真ん中を歩いている人は、ライオンが祖先だ。重々しい、王者のような風貌がある。どの特徴もみな、重々しくて、意味ありげだ。エレーナはそれが所長だろうと推測した。所長は黙って歩いていたが、すべての人々の注意は、磁石の針が北を指すように、所長の方に向けられていた。

だれかが、単語とアクセントに気を使いながら、所長に何か言った。所長は聴いていたが、その顔の表情からは、関心を持っていないことがうかがわれた。

彼は何にうんざりしているのだろうか？ 仕事に？ いや。彼は自分の仕事を愛し、理解しているだろう。男が仕事に飽きることはない。

生活に？ いや。50歳をすぎた人間は、生活を理解し、大切にしているものだ。

あるいは、彼は女性を悩ませ、自分自身も悩んでいるのでは？ あるいは、2人の女性を悩ませて、2倍悩んでいるのかも？

所長は忍耐づよく聴いていた。彼の目は鉛色をしていた。

エレーナは椅子から腰を上げた。目で人々の頭を追った。ニコラエフは見あたらなかった。彼女は直感的に彼がいないことを感じた。そして、実際にいないことを確認した。

エレーナは所長のまえまで進み出て聞いた。

「ニコラエフはどこでしょうか？」

所長はエレーナを見た。彼女は動く物体のようだった。

「どのニコラエフかね？」 所長はけげんそうに言った。

「技術情報課の」と、背後でだれかが教えた。

「ああ……ニコラエフか」 所長は思い出した。「本当だ、彼はどこにいるんだ？ なぜいないんだね？」

「ひょっとして、忘れたのかな？」と、さっき口をはさんだ男が言った。

「いや、ちがうよ……」と別の男が言った。

「なぜいないんだね？」 所長は活気づいた。「きっと忘れたのだ。若いのに、何という無責任。見栄さえないのか！」

「ご自身を省みて下さい」 エレーナは腹を立てた。

「どういう意味かね？」 所長はエレーナを見た。その目には好奇の色が浮かんだ。

「彼は3カ月も図面を書いていたのです。あなたはそれに関心さえ示しませんでした」

「どんな図面だって？」

「図面ではなくて、製図です……朝から晩までそれにかかり切りで、話題もそのことばかり。それをあなたは見ても下さらなかった」

「私が？」

「いや、あなたではなく、あなた方のだれかが」

「どうしてだろう？」

「知りませんわ」

「どうして私がそのことについて何も知らないんだろう？ ニコラエフはどこだね？」

「それは私の方がお聞きしたいくらいです」

所長は並み居る人々を見まわした。

「きょうはまだ会っていません」とだれかが言った。

「病気じゃないのかい？」と別のだれかが言った。

「病気だわ……」 エレーナが考え深げに言った。「あの人は慢性肺炎の気があり、カゼをひきやすいのです」

「彼にとってあなたは？」 所長が聞いた。

「別に何でもありません……きょうからは……」 エレーナは思い出した。

所長はライオンが猫を見るように、腹も立てずにエレーナを見ていた。あるいは、自分たちの血縁性を感じたのかもしれない。所詮、ライオンだって猫の仲間なのだから！

「じゃ、私は失礼します」と告げると、エレーナは派手な姿を仕事中の人々から引き離すように、実際に歩き出した。

ドアの陰に消えるまえに、エレーナはふり返って、秘書に別れを告げた。

ニコラエフのアパートには電話がなかった。彼は新しい地区に住んでいたが、ここにはまだ電話が引かれていなかったのだ。

ドアを開けたのはニコラエフの母親だった。色っぽい老姿で、いつまでも老けないタイプの女性だ。

ニコラエフと母親は、生まれたときにヘソの緒を切るのを忘れたかのように、固く結ばれており、いまでも同じ血液が循環しているかのようだ。ニコラエフは31歳をすぎていたが、大きなピンで母親のスカートに留められていた。

ときおりニコラエフは反乱を起こして、姿を消した。母親はあわてなかった。彼がもどって来ることを知っていたからだ。そんなことがよくあった。

あるとき母親はエレーナに言った。

「私にはあなたの年齢のとき、すでに子どもが2人いました」。エレーナには母親の気持ちが分かった。彼女はこう言いたかったのだ——「お嫁に行きなさい。家庭を築くのです。私の息子のまわりで時間を無駄にしないで。どうせあなたと息子のあいだには、何も起こらないんだから」

エレーナもニコラエフの母親も、互いに気に入っていなかった。理由はなかった。あるいは、理由はニコラエフだったのかもしれない。彼女たちには同一の愛の対象があり、それをそれぞれが独り占めしたがっていたからだ。

「こんにちは」とエレーナがあいさつした。

「こんにちは」とニコラエフの母親が、エレーナの出現とその服装にいくらか驚きながら言った。

「サーシャはいますか？」とエレーナが聞いた。

「サーシャは仕事に行っております」母親はきわめて丁寧に言った。エレーナがまだ家庭を作らず、何の見通しもなく自分の息子のあとを追いまわしているのを気の毒がっているかのようだった。

「彼は職場にいません。私はいまそこへ行って来たばかりです」

「それは知りません。いずれにせよ、あの子は仕事に行くと言って、出て行きました」

エレーナは母親に意地の悪いことを言いたくなった。だがそれを我慢して言った。

「さようなら」

エレーナは歩いて1階まで降りた。ニコラエフは仕事に行くと言って出たが、職場へは行かなかった。つまり、何か起こったのだ。あるいは、車にひかれ

たのだろうか？

彼女は顔を上げて、ニコラエフの部屋の窓を目で探した。窓には母親の姿が見え、彼女の動かない、不安そうな目さえ見えた。彼女もまた、エレーナと同じことを考えていたのだろう。一定の状況は、一定の思考を生む。

「ベーラ・ペトローブナ！」エレーナが声をかけた。

ニコラエフの母親は即座に窓から顔を出した。

「事故照会所はどこかご存じですか？」

たちまち母親の姿が見えなくなった。多分、卒倒したのだろう。

エレーナはしばらく待っていたが、やがて考えながらバス停の方へ歩き出した。

もしニコラエフが車にひかれたのなら、何よりもまず彼は病院へ運ばれただろう。そこへ行けばいいのだ。病院へ行って、彼のわきにそっと横になろう。ニコラエフは、暖かい湯の中にいるように、彼女の体温に包まれ、痛みも消えるだろう。恐怖も消えるだろう。唇を耳もとにつけて、そっと訊ねるのだ。

「ねえ、聞いている？」

彼は目を閉じ、うなずく代わりに、まつ毛を動かすだろう。

「私はもう飽き飽き。もう何も欲しくないの」

彼はまつ毛を伏せる。目の端から耳の方へ、小さな、不透明な涙が流れる。

ニコラエフは仕事に行くと言って出たが、職場へは行かなかった。恐らく、実際に彼の身に何かが起きたのだろう。それとも別のことが？ より正確に言えば、別の女性が？

エレーナは推理に心を奪われて、立ち止まった。あるとき、まだ愛が始まったばかりのころ、ニコラエフが仕事に行かなかったことを彼女は思い出した。そのころエレーナは彼にとって、地球のあらゆる秘密よりも大事だった。彼は無断欠勤者に浴びせられる侮辱を恐れなかった。彼はいかなる懲罰も恐れなかっただろう。そのとき彼は仕事に行かず、彼らは映画を見に行った。映画のあとは喫茶店。それから、腕を組んで街をぶらついた。

きょうもそれと同じなのだ。同じことをやり、同じ言葉を交わす。そもそも、なぜ彼が別の新しい言葉を考え、別の行為をしなければならないのか？ 愛の対象は変わっても、彼はもとのままなのだ。だから同じ感情を表わす。

彼と別の女性はいま映画館に座っている。あの同じ映画館で、隣り合って。肩を寄せ合って。彼はスクリーンを見ている。彼女は彼を見ている。彼はふり向いて、スクリーンを見ろ、というように、ちょっとあごで示す。だが、彼女は彼の方を見ている。彼もまた彼女の方を見る。闇に彼の目がきらめく。

人生の最後の瞬間に人が何を考えるか、だれも知らない。まだだれもそれを話してくれないからだ。だが、最後の瞬間に、エレーナが薄闇の中できらめく彼の目を思い出すことは、大いにあり得る。彼が実際に車にひかれて、彼岸の世界へ行ってしまっていた方がいいのだ。別の女性と一緒に。

……彼らは映画を見て、喫茶店に入った。彼は閉じた唇をもぐもぐさせ、たえず別の女性を見ている。そして、彼女以外のだれかに夢中になっていたことなど、覚えていないのだ。彼女はエレーナよりも美しく、若くて、エネルギッシュで、ニコラエフの母親の気に入るだろう。彼女は小さな手のひらで彼の頬をなでながら言う——「あなたはだれよりもすてき。あなたはただひとりの人よ」。ニコラエフはその手を取って、指の一本一本にキスをする。彼女は顔を寄せて、彼の手に——やはり指の一本一本にキスをする。彼女はもちろん、エレーナのことを知っている。彼は過去をわび、沈黙によって過去を抹殺しようとするかのように、困惑して、黙っている。

「あなたの切符ですよ」だれかがエレーナの耳の上で言った。

エレーナは我に返った。彼女のまえに女性が2人立っており、彼女自身はバスの中で座っていた。エレーナはなぜ自分がバスに乗っているのか分からなかった。見知らぬ女性たちが彼女に何を要求しているのか分からなかった。

彼女は悲しみに満ちた目で女性たちを見上げた。それから席を立つと、だれの方も見ずに歩き出した。

女性たちはおじけづいて、わきによけ、エレーナを通した。

エレーナはフェスティバル通りという名の停留所で降りた。どんな通りだろう？ なぜこんなところへ来てしまったのだろう？ きっと行き先をまちがえたのか、別のバスに乗ってしまったにちがいない。いや、その両方らしい。

そうするあいだにも生活は順調に進んでいた。昼に代わって、夕方がやって来た。地上で行われているあらゆるものに無関心な、堂々たる雲が空にかかっていた。宇宙全体の中で、ひとりの女性の運命など何だろう？

何をすればいいのだ？ どうやって自分を主張すればいいのだ？

彼が見ているまえで、窓から身を投げることもできる。そうすれば彼は、彼女のことを理解してくれるだろう。

忘れようにも、忘れられないだろう。彼女は死者となって、彼らのあいだに立ち、彼らを引き離すだろう。

とはいえ、彼を殺すことができるのに、なぜ自殺する必要があろうか？

エレーナはとつぜん、鋭い寒さを感じた。彼女は息がつまった。やがて彼女のからだから、水がしたたり出した。かたわらを撒水車が走りすぎた。運転手が身を乗り出して、何か叫んだ。怒っているようだった。

撒水車は走り去った。エレーナはバス停のわきに立っていた。髪がへばりつき、マスカラが流れて、顔に黒い跡を残した。水は靴の中にまで入り込んだ。スラックスが足にまといついた。

ニコラエフと別の女性は、いまごろ街を歩きまわっており、ひょっこりフェスティバル通りへやって来るかもしれない。彼らは手を取り合い、喜びの感情で結ばれて、エレーナのわきを通りすぎて行くだろう。

ニコラエフはエレーナに気づいて、あいさつする——「やあ」。彼女は答える——「やあ」。そして彼は言う——「じゃあね」。彼女も言う——「じゃあね」

彼らはわきを通りすぎて行く。しばらく行きすぎてから、別の女性はふり返り、エレーナにすばやい、ねっとりした視線を走らせる。

エレーナはフェスティバル通りを歩き出した。濡れた靴で歩くのは気分が悪かった。彼女は靴を脱ぎ、それを手に持って、素足で暖かいアスファルトの上を歩き出した。

行き会う人々はふり返って、驚きと羨望の目でエレーナを見た。彼らもやはり、湿った靴を脱いで、子どものころのように、素足で歩きたいのだ。

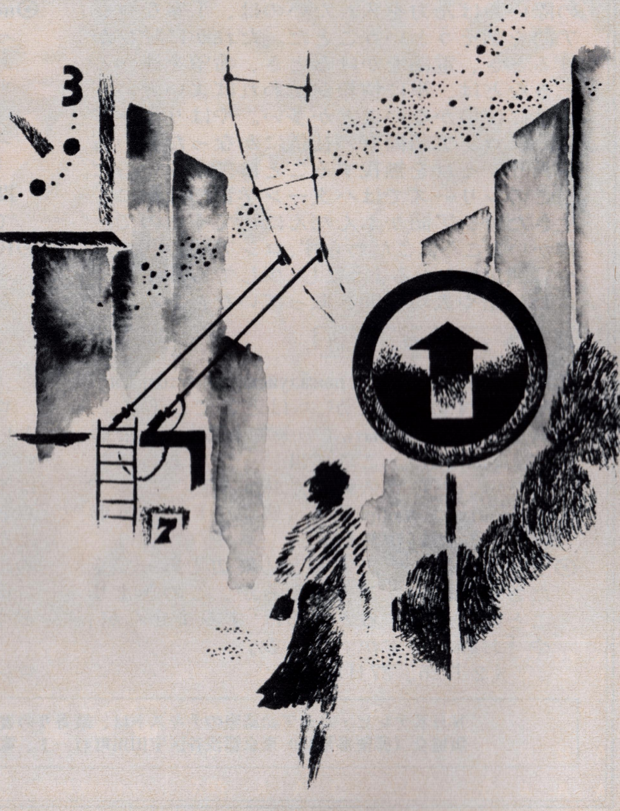
アパートのエレベーターは動いていなかった。エレーナは歩いて11階へ向かった。足で歩いているのではなく、心臓の弁で歩いているように思われた。

……ニコラエフが彼女の部屋のドアのまえの階段に座っていた。まどろんでいるようだった。エレーナを見ると、彼は顔を上げた。階段から立ち上がり、まばたきもせずに見ていた。彼の目は馬の目のようだった。ポニーの。だが所詮、ポニーの目も、馬の目も、ロバの目さえも、同じだ。

エレーナはのどがつまらないように、興奮を呑み込んだ。興奮はいくらか去ったが、たちまち、ふたたびのどもとに近づいた。息が苦しくなった。

「私は12時からあなたを探していたのよ」とエレーナが言った。

「ぼくは12時からきみを待っていたんだ」とニコラエフが言った。



「ねえ、分かる？」

「分かるよ……」

彼らはよろめくように近寄ると、抱き合って、そのまま動かなくなった。

エレーナは息子を抱くように彼を抱いた。危険を脱してやって来て、ふたたび危険の中へ飛び込んで行かなければならない、自分が育てた、辛酸をなめた息子のように。彼らを別々の生活空間へ引き離すことができるような力は存在しなかった。

エレーナは思う存分泣いた幼児のように、とぎれとぎれに溜め息をついた。乾き切った地面が雨のあと溜め息をつくように。一つのこと以外——こんなにも美しい、積極的な、感情を抑えることのできるエレーナ・ジュラブリョワが、なぜわが国のすべての男性の中から、ほかならぬニコラエフを選んだのか、ということ以外、すべては明白だった。

それは、だれもが、決して解くことのない地球の秘密の一つだった。

（さし絵　V・ボチコフ）

ロシア語のページ

А Б В

NHKテレビ ロシア語講座から（2月後半）

テレビでロシア語を学ぼう！

この欄では、ＮＨＫ教育テレビ・ロシア語講座のご協力を得て、同講座のテキストから主な表現や単語その他を紹介させていただきます。原則としてロシア語の単語や文には発音を表記しませんので、是非テレビの放送で実際の発音に親しんで下さい。

（２月18、20日放映）

きょうの表現

Разреши́те мне сказа́ть не́сколько слов.
私にひとこと言わせてください。

⊙**разреши́те**＜**разреши́ть**　「許す」の命令形。「〜させてください」

⊙**не́сколько слов**　文字どおりには「幾つかの単語」**слов**＜**сло́во**　複数生格。

きょうの単語

①**ку́бок**　カップ　②**золота́я меда́ль**　金メダル
③**сере́бряная меда́ль**　銀メダル
④**бро́нзовая меда́ль**　銅メダル
⑤**зна́мя**　旗　⑥**гра́мота**　賞状

（２月22、23日放映）

●シリーズのはじめに●

〈応用シリーズ〉（II）では、会話のエチケットを主要なテーマにして、これまでに学習したロシア語をもう一歩深めることにする。その際いちばん力を入れたいのは、丁寧なロシア語を話そうということだ。だれかに呼びかけるとき、電話をかけるとき、希望を述べるときなどは、単に情報が伝わればよいというわけにはいかないことが多い。やはりロシア語にはロシア語固有の礼儀にかなった言い方があり、それを無視することはできないのだ。

このシリーズではパターン学習のほかに、生きたロシア語がふんだんに出てくるので、細かいところにこだわらず、ロシア語のリズムや雰囲気にひたるようにし、少しでも多く耳慣れた単語や表現を聞き取っていただきたい。

きょうのロシア語

Бу́дьте любе́зны, скажи́те, пожа́луйста, где нахо́дится〜?
あのう、すみませんが、〜はどこでしょう。

⊙**бу́дьте** は動詞 **быть**（……である）の命令形（二人称複数）。ここでは「……であってください」という依頼を意味する。

⊙**любе́зны** は **любе́зный**（親切な）という形容詞の短語尾複数形。

⊙上記の例文を直訳すると「親切であってください」ということになるが、このきまりことばが意味するところは「すみませんが」や「お願いですが」である。

（２月25、27日放映）

きょうのロシア語

Позво́льте пригласи́ть вас к нам в го́сти сего́дня.
きょう、わたしたちのところへお遊びにいらしてくださいませんか。

⊙**позво́льте** は **позво́лить**（許す）の命令形。「〜させてください」の意。

⊙**пригласи́ть**＝「招待する」

⊙**в го́сти**＝「お客に」、「遊びに」

きょうのポイント

相手に対する依頼や招待、お祝い、感謝、謝意などを丁寧に表現したい場合、**Разреши́те** あるいは **позво́льте** のあとに動詞の不定形を持ってくるという方法がいちばん楽であろう。意味は「〜することをお許しください」、「〜させていただきたいのですが」となる。何しろ動詞を活用させなくて済むので有り難い。

［例文］

＊**Позво́льте** / **Разреши́те**　**познако́миться.**
お近づきにならせてください。
предста́виться.
自己紹介させてください。

＊**Позво́льте** / **Разреши́те**　**предста́вить вам моего́ дру́га.**
私の友人を紹介させてください。
познако́мить вас с мои́м нача́льником.
私の上司を紹介したいと思います。

（２月29日、３月１日放映）

きょうのロシア語

Не зна́ю, как сказа́ть.
どう言ったらいいのかわかりません。

⊙**не зна́ю**「わかりません」。**знать** は本来「知っている」という意味の動詞であるが、「さあ、わかりません」などの日本語の表現に当てはまるロシア語は **Я не зна́ю.** である。「さあ、わかりません」と言うつもりでうっかり **Я не понима́ю.** と言ってしまうと、「今あなたがおっしゃったこと（今のご質問）が理解できません」という意味になってしまう。

⊙**Как сказа́ть**「いかに言うべきか」。（“**Как**＋動詞不定形”で「いかに〜すべきか」の意味になる。）

きょうのポイント

ロシア語の会話をスムーズに進行させたいというのは、恐らく学習者全員に共通する願いであろう。しかし一挙に頂上に到達するのは不可能であるからには、そのための通過地点として「言葉につまったときの表現」を学んだり、簡単な合いの手の表現を覚えておくのは決して邪道ではないはずだ。

［例文］　＊**Как сказа́ть?**
どう言ったらいいのでしょうか（何と言うか）。

＊**Не зна́ю, как э́то по-ру́сски.**
ロシア語でどう言うのかわかりません（が……）。

ＮＨＫテレビ・ロシア語講座のテキストは、最寄りの書店でお求め下さい。書店にない場合は、日本放送出版協会（郵便番号150 東京都渋谷区宇田川町41−１、電話03・464・7311）へお問い合わせ下さい。

今日のソ連邦
一九八四年3月1日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集　ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3−9−13・電話03−447・3536）
定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）